明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十
大正二年七月二十五日印刷納本（五日印刷納本）
大正二年八月一日發行（毎月一回一日）

女子文壇

第九年　八月號　第十一號



東京　女子文壇社發行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新音譜賣出し

鳴渡れり!! 噫々鳴渡れり!! ニツポノホン

蓄音機の美音は實に寒村僻地に鳴渡れり!!
朗々たる



何の故ぞや。此れ其工場に於て多年研究に腐心し之が改良進歩に心膽を碎きし賜に外ならざるなり
弊社は華客の趣向を旨とし嶄新なる音曲を選び玆に滿天下に紹介せんとす

◉ドンブラコ。（桃太郎一代記） 帝國歌劇部員演奏 北村季晴氏及初子女史 七、八、九、十（鷲印兩面盤）
七月賣出しに兒童諸君の大喝采を得たるドンブラコは注文雨の如くに繁し玆に引續き四種の賣出しを試みんとす

◉和洋合奏（越後獅子、上、下、吾妻八景、娘道成寺） 丹誤倶樂部員演奏（鷲印兩面盤）
丹誤倶樂部員の苦心の跡歴々たり和洋兩樂の調和誠に巧妙吾れを忘れて舞躍るの感あり

◉浪花節（大高源吾、山鹿護送道中付上、中、下　西鄉南洲 上、下） 東家樂燕（赤鷲印兩面盤）
浪界の尤物東家樂燕現はれたり心身共に溶けんばかりの聲調

◉唱歌（小學唱歌二宮金次郎、よく學びよく遊べ、雲雀　田植、蟬、浦島太郎、案山子、富士山、仁田四郎、雪）（赤鷲印兩面盤）
納所文子孃の玲瓏たる聲音文部省發行の小學唱歌十種兒童諸君の好侶伴たり

◉軍樂隊（Valse, Loin du Bal, Cavaleria Rusticana Selection）陸軍戸山學校軍樂隊（鷲印兩面盤）
世界に覇を爭はんとする戸山學校軍樂隊が其最得意とせる洋樂二種聽いて血沸き肉躍るの感あり

鷲印兩面盤　金壹圓五拾錢
赤鷲印兩面盤　金貳圓也

全國四十の出張所と四百の特約店あり

神奈川縣川崎町
株式會社日本蓄音器商會本店
電話川崎四九番

東京銀座一丁目
全卸賣及小賣部
電話京橋二五七・二五八・二八八七番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

銷夏絶好の讀物

近代脚本叢書

袖珍本美装 毎冊三八〇頁

定價毎冊 四拾錢 送料四錢

毎冊原作者及舞臺面寫眞版數葉入

最新刊 第七篇
ショオー作 和辻哲郎譯
戀をあさる人

最新刊 第六篇
イブセン作 草野柴二譯
海の夫人

最新刊 第五篇
ストリンドベルク作 島村民治譯
伯爵令孃

好評嘖々忽重版

(四篇) ワイルト作 若月紫蘭譯 サロメ

(三篇) メーテルリンク作 島村抱月譯 ヘレアストメレサンド

(二篇) ショオー作 楠山西雄譯 運命の人

(一篇) シュニッツラー作 森鷗外譯 戀愛三昧

本書世評の一班

『時事』近代脚本叢書は小説より劇に赴いた今の文壇に新しい劇よ面白い脚本よとの叫びが高いのでこの要求に應じて泰西名家の傑作を文壇知名の士が移植したのを鉛槧に附し次に一般同好に頒首的で生れたるもので心地よい装幀と内容とは共に讀書子を滿足せしむるに充分で實に愛すべき叢書だ

『大阪朝日』近代泰西名家の手に成た脚本を飜譯刊行する目的として生れたる近代脚本叢書は今又第七篇「戀をあさる人」を刊行せり各篇譯者は何れも現代一流の劇作家だけ有つてあかぬけのした氣持ちの宜い飜譯である

東京神田南神保町 現代社發行 電話本局一四一二五

女子文壇

八月號

第九年第十一號

目次

外出に必要なる化粧品

■外出前■には如何なる化粧品を用ゆべきか。

アルモンドローション(一瓶四十錢)は夏の化粧料として好評あり。白粉下としてよく、且つ日に焦けるを防ぐ効力あるが故に、夏の外出前には是非之を用ゐたまへ。

■外出中■には如何なる化粧品を用ゆべきか。

外出先にて白粉の剝げたるは誠に見惡きものなり。之には化粧直しとしてサイクラメン紙白粉(一冊十一錢、六冊入一箱六十五錢)を携帶するを忘るべからず。こは、日本人の皮膚に適する樣に研究して製せる新着品なり。

■外出後■には如何なる化粧品を用ゆべきか。

歸宅後直に洗面に苦熱を忘るゝの快は之を譬ふべきなし。キセロル、オーデ、トワレット(一瓶八十五錢)と稱する洗面香水の眞價はこの際に遺憾なく發揮せらるべし。

御婦人の身嗜みは夏に於て殊更に注意せらるゝ必要あるべし。御注文を希ふ。

東京駿河町

三越呉服店

朝顔



大江製版印刷

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子文壇社出版書目

●横瀨夜雨先生著
夜雨集
（著者と筑波山寫眞挿入）

生活を描くこと最も眞實にして其文、男子より婦人を觀、婦人より男子を見るに濃蓋し本書は出來合の出版にあらず當然永遠の生命を有すべき眞面目なる著述なり

▼賣價特製金八拾錢 並製金五拾錢 送料各六錢

著者は我邦に珍しき鄕土詩人なり身は筑波山下の一閑村に寂靜なる孤獨生活を送れど其文名は天下の青年男女に渇仰されて驚くべき潜勢力を有せり殊に『夜雨集』は自己の人を動かさずんば已まず而かも此書の如く濃かなる感情の籠れるものは他に尠し

●河井醉茗先生序 山田邦枝子著
姿見日記
（作者寫眞挿入）

舊い世界から新しい世界へ出やうとして水火の中をも辭せざる新らしい女の血あり涙ある叫びを聞け

▼賣價金三拾五錢 送料四錢

●水野葉舟先生序 前島優梨子作
小說 町むすめ
（著者寫眞挿入）

溫順珠の如き女の心を持ちて女の生活を描寫したる完全無垢の短篇小說集

▼賣價金三拾錢 送料四錢

●いたづら小僧著者 佐々木邦先生著
一人やんちゃん
（石版極彩色木版色刷挿畫數葉入）

▼賣價金三拾五錢 送料六錢

いたづら小僧日記で有名の、佐々木邦先生の作ですから、大人にも小供にも面白いこと請合の書物です。世の中に出ると、到る處評判になつて、何處の家庭でも争ふて購求され。近來の好著として、持て囃されて居ります。

（全國書店取次販賣）●東京市京橋區大鋸町●〔振替口座壹七貳九番〕

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして生來色黑き男女にても平素之を用ゆれば本劑の主成分たる皮膚漂白性作用により漸次肉體**白色**となり肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し**艶美**の容貌となる卓効を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑特製分貳劑を試よ偉大なる奇効完全に顯る 價並製壹劑壹圓廿錢 特別製壹劑貳圓貳拾錢

色白飲藥

英國輸入の全身清血劑にて飲んで體内の惡血毒血惡液を體外に排泄し血液を清淨にし完全に肉色を**白色艶美**ならしむる奇効顯著藥なり 價壹劑貳圓九拾錢參劑七圓九拾錢五劑拾貳圓五拾錢色白新劑と内外双方併用せば偉大の奏効迅速に顯る着金即刻送藥す

腋臭根治劑

本劑は腋臭症に對し最近の學理と實驗とにより研究發見せられたる**斯病唯一**の理想的卓効新藥にて本劑の作用により其病原汗腺を根底より變質せしむるを以て如何なる難症腋臭も完全に治癒す故に他藥にて全治せざる患者は早く試み病原を去り**苦悩を脱**せよ難重症は特別製用ゆれば完全の著効を奏す 藥價輕症用壹圓八拾錢重症用貳圓八拾錢慢性症用五圓八拾錢頑固症用特別製分拾圓八拾錢着金小包密送す

最新發見奇藥 陰萎病 特効新劑

本劑（藥名トニチン）は最近發見に係る陰萎病**唯一**の特効新劑にして其主治適應症を擧れば種々の原因より來る**陰萎病** 精神性陰萎。貧血性陰萎。衰弱性陰萎。根氣衰弱。神經衰弱症。早漏。萎縮。元氣衰弱。腎虛し冷症等に卓越絶倫なる奇効あり苟も精力を旺盛にし生殖機能を强健ならしめ人生の快樂を保全せんと欲する人は早く試よ偉大なる特効顯著なり藥價試用分壹劑貳圓輕症用五劑九圓五拾錢重症用八劑拾四圓五拾錢 慢性症用拾參劑貳拾參圓也着金即刻小包密送す

閉通經劑

本劑は胃腸を害せず子宮を痛めず月經とまりを容易に**通經**す長き滯り及び血塊には特に**通經**製分を用ひよ極安全に快通**流經**す且つ月經不順より起る子宮病血の道を治癒し惡血古血を一掃す患者は早く試み卓絶偉大なる**特効**を知られよ近時無効類似偽藥多し御注意を乞ふ價は壹劑七拾錢貳劑壹圓廿錢參劑壹圓七拾錢 特別製分貳圓卅錢頑固症用特製分四圓卅錢郵券代用貳割増し

婦人病の福音 本劑は最新の學理と多年の實驗とにより發見せられたる婦人病藥唯一の靈劑なるを以て頑固なる月經閉止及血塊抔と稱へ永年經水なきを快通流下するは勿論月經不調に基因して續發する逆上頭痛眩暈腰或は子宮に痛ある人腹子宮部の痙攣に用ひて偉大なる卓効顯著なり早く試よ

（奇効顯著藥） 毛髮新藥

本劑（藥名ヘアーグロース）は多年研究實驗の結果發見したる**毛髮發生藥**なり即ち男女共禿頭病の人各種の病氣にて脱毛する人頭髮及はゑぎわの薄き人陰部毛なき人まゆげ口ひげの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛なき人用ゆれば毛髮蒼々と**發生**する**特効**あり 本劑は世にありふれたる種々雜多の毛はへ藥とは其効大に異なるに付幸に玉瓦混同視することなく速に試み偉大なる奇効を知られよ價小瓶壹圓廿錢中瓶二圓卅錢大瓶五圓卅錢特別製分拾圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増しの事

やせる藥

壹劑參圓廿錢貳劑六圓二十錢特別製九圓拾錢

本劑（藥名ヨードチリン）錠は學理實驗に徴したる唯一の**瘦身劑**にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顔赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に減し**美容健康**を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたる諸君は速に本劑を用ひ其偉大なる卓効を知られよ

以上七藥專賣 東京市神田區五軒町十九番地

日新館藥房

電話下谷五百四拾六番
振替東京壹九貳四六番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

THE GIRL'S GRAPHIC

少女畫報

第八月號 定價金拾五錢 郵税一錢五厘 前金 六冊郵税共金九十錢 十二冊一圓七十五錢

編輯顧問 高島平三郎 倉橋惣三 兩先生

讀物

畫報

讀物

口繪

發兌 東京市京橋區鍛治橋外 振替東京一一八一八番 東京社 電話京橋二三二五番 各地書店雑誌店に有

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA


これたから困ります
◉娘時代の苦勞——某閨秀敎育家談
いくら書いても、自分の思ふやうに書けないで巻紙ばかり澤山書損ひする時はホンとにくやしくつてどうしたら、他人様のやうにスラ〳〵ときれいに書けるでせう。女の字の拙いほど耻かしいことはない、手紙かく時はいつもくやしくつて泣き出すことが度々ありました。と今は世に知られてゐる某閨秀敎育家の昔語り……併し今日の御婦人たちはそんな苦勞はいりませぬ。小野鵞堂先生書專賣特許習字速成法で御練習なされば、いくら手習しても御上手にならぬ御方でも不思議に三四ケ月で驚く程上達します。試みに東京本郷大學正門前帝國習字速成學會へ「ハガキ」を出して御覧なさい見本及會則を無代で送つてよこします

邸内そゞろ歩き（一）

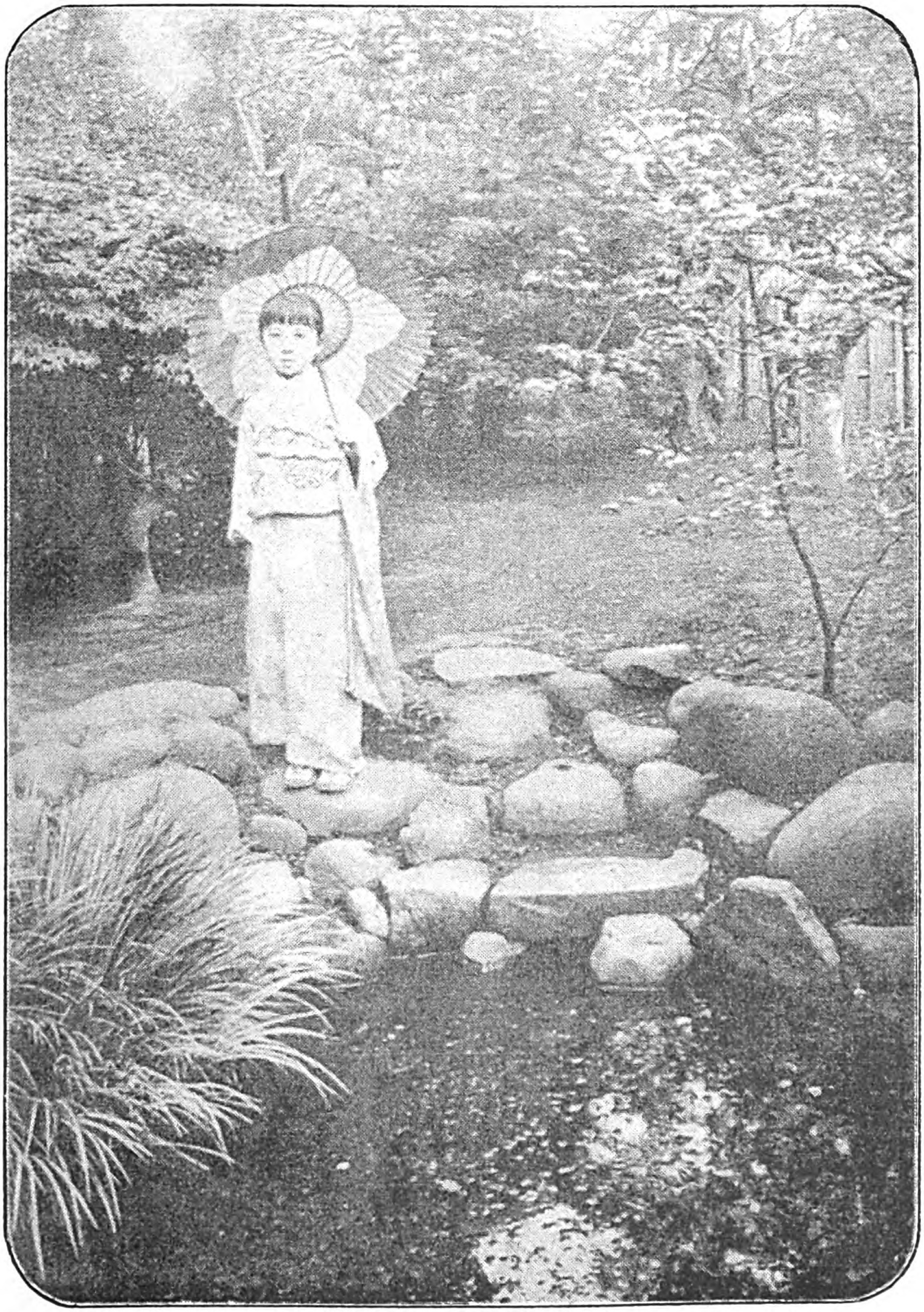


（中山希賢氏庭園内に於ける令孃の散歩）

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

邸内のそゞろ歩き（二）



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鈴木博士發見の本品は結核、腺病特に神經衰弱症の最良强壯劑として現時治療界を風靡する有機性燐劑なり

ユーキリン説明書郵呈

ユーキリン

東京市日本橋室町三丁目

三共株式會社

スピーゲル博士發見の本劑が生殖器神經に作用して陰萎を治するの効力顯著なるは内外諸大家の報告之を證明す

ヨヒンビン説明書郵呈

ヨヒンビン錠

東京市日本橋室町三丁目

三共株式會社

醫科大學教授醫學博士高橋順太郎氏創製の本品は殆ど無臭且吸收し易き形態に精製したる眞に理想的肝油なり

改良肝油説明書郵呈

高橋氏改良肝油

東京市日本橋室町三丁目

三共株式會社

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▲東京の婦人の美しきは
かくしてみがくからであります。

美顔と化粧法

一冊送料共三十七錢
私方へ御申越あれば
特別割引二錢切手十
五枚にて送本致ます

目次の大略●色白くなる方法▲赤き顔を櫻色にする方法▲シワのよらぬ方法▲キメを細かにツヤを出す方法▲日にやけるを防ぐ方法▲色を白くする方法▲手の色を白くする方法▲髮の毛を黒くする方法▲毛のぬけるを止める方法▲毛をのばしつやを出す方法▲ふけを去る方法▲ちゞれ毛くせ毛を直す方法▲あるべき所に毛なきを生ずる方法▲やせる法ふとる法▲鼻を高くする方法▲髮をよくする方法▲入浴の方法▲化粧品の選び方▲おしろいのつけ方▲衣服の模様と縞柄▲衣服の縫方▲衣服の着方▲其他色々皆誰にもすぐ出來る事ばかり記せる良書なり。

●本書著者　東京市神田區錦町三　高柳こう子

色白くなる

色黒き方、青き方、赤すぎる顔の御方は郵便切手二錢封入御手紙下さい色白く美しくなるよい藥を御知らせ致します。日にやけて黒くなったなどはすぐなほります。皆様に御實驗を願ひました所『日本一の黒美人などゝ笑はれた生れ付の色黒が色白くなりました』とか『美人の神様と拜んで居ります』などいふを始め數千通の御禮狀をいたゞいて居ります。

東京市神田區錦町三　高柳こう子

月やく

月やくとまり御心配の方は三錢切手封入御手紙下さい

身體に害なく下りる良藥秘密に御知らせ致します

東京市神田區錦町三ノ一九　境田けい子

第九版

有効保険　前代未發

秘傳奇術

全壹冊正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

(目錄摘要　神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰〇の痢れを治する法●消渇を必治する法●禿癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛卽治藥製法●髭の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髮必生法●臭汗治法●白髮を染る法●髮毛の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび卽治法●ほくろを落す法●ビットル酒製法●夏日内室を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を卽治製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●抜毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず卽治法●五十の老婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顔はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顔はす神術●女に〇れらるゝ藥法●硬き毛髮を柔軟にする法●思ふ女を〇〇かす藥法●堅き女の氣を◎〇す藥法●陰〇を長大にする藥法●そばかす必治法●女を〇〇にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●格氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●卽座に男精を增ず法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ特効藥●避食の仙術●神速に精力を強む法●卽坐陰身術●人を眠らす秘法卽ち催眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を〇せしむる法●記憶力を增進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦観破の奇術●黒字夜光の奇術●老人終身皺取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする内服劑新法●寶丹の製法●腹痛速治法●芥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●腎臓を治する法●黃疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法●痳病の治法●月經の不順を治する法●痴氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る新法●頭髮を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の最新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして治す法●火傷卽治の秘法●シヤクリ卽治法●聲を能くする新術●白髮豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳たれを治する法●いぼを取る法●あざを抜く秘法●乳の出る妙藥●陰部の諸痔治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齢により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ鬚美ならしむる法●苛酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數十匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●疊の汚染を落す法●新らしき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下拾法略す合計壹百四十法あり着金卽刻送本す

専賣元　東京神田區五軒町拾九番地　日新館商店

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

報知新聞記者中村木公君編

好評

實地精査 **女子遊學便覽**

▲全一冊中判洋裝　賣價拾五錢郵税四錢

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸孃も之を讀め一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

出版元　東京市京橋大鋸町　**女子文壇社**　安捌到處書店
（振替口座東京壹七貳九番）

最も人にきらはれる

わきが

の病に罹られたる御方又永年慢性わきがにて色々の治療を施されても治らずに苦まるゝ御方の爲めに最もよくきく治療藥を御知らせ致します御望みの御方は御遠慮なく只返信料三錢切手御送り下されば御知らせ致します

東京神田區錦町三ノ三　**中村喜三郎**

三上歌子女史考案

新案教育用 登録反物紙 **裁縫早わかり**

●定價一組金五錢送料二錢（振替拂込壹錢増）

お孃さん方が遊樂中に知らず〳〵裁縫のお稽古が出來御婦人方にも仕立物の好參考となり、且つ一ト通りの仕立方が容易に解かる至極重寶の教育的反物紙です

申込所　東京市京橋區大鋸町十一　**女子文壇社代理部**
（振替口座第一七二九番）

安全用達

本社代理部にては地方愛讀者諸君の御便利を謀り東京市内にて販賣する諸物品を始め各種の印刷及び製版とも迅速誠實に御用辨いたしますから多少に不拘御申込下さい可成詳細に御書添を乞ふ照會は返信料付に願ひます

女子文壇社代理部
（振替口座壹七貳九番）



未來の立身を望む者は必ず見よ

催眠術通信教授

說明書無代進呈

不可思議なる幽理と靈怪學の幻術とを應用せるが如き方法にて我が心の儘に人々の身心を統御し得ると云ふことは、如何なる事業に於ても成功の捷徑である。諸子よ冷靜なる頭腦を以て、立身成功家の過去の行程を考へらるゝの時、吾人の斷定の僞で無いことをいなみ難いであらう。催眠術及心力波及術はこれが法則を研究する科學であつて單に人を眠らしむるに止まる術ではない。これを應用して疾病を治療し惡癖を矯正し得るは今や確固なる事實であつて進んでこの原理を應用し處生上大なる利益を得るは實に理の當然である斯術は正則完全なる本會の通信教授法により、僅少の學費と日時とを以て確實に習得する事を得べし斯術の說明及實驗、本會々則等を詳述せる書冊は、葉書にて申込次第送呈すべし

大阪市東區生玉町

帝國神秘會

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

水あふひ



本莊子爵令孃たづ子



陸軍技手内海勇太氏令孃せつ子



會社員磯部保次氏令孃文子



未來の立身を望む者は必ず見よ

催眠術通信教授

說明書無代進呈

不可思議なる幽理と靈怪學の幻術とを應用せるが如き方法にて我が心の儘に人々の身心を統御し得ると云ふことは、如何なる事業に於ても成功の捷徑である。諸子よ冷靜なる頭腦を以て、立身成功家の過去の行程を考へらるゝの時、吾人の斷定の僞で無いことをいなみ難いであらう。催眠術及心力波及術はこれが法則を研究する科學であつて單に人を眠らしむるに止まる術ではない。これを應用して疾病を治療し惡癖を矯正し得るは今や確固なる事實であつて進んでこの原理を應用し處生上大なる利益を得るは實に理の當然である斯術は正則完全なる本會の通信教授法により、僅少の學費と日時とを以て確實に習得する事を得べし斯術の說明及實驗、本會々則等を詳述せる書冊は、葉書にて申込次第送呈すべし

大阪市東區生玉町

帝國神秘會

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

水あふひ



本荘子爵令嬢たづ子



陸軍技手内海勇太氏令嬢せつ子



會社員磯部保次氏令嬢文子

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふくらむ莟

（本號名流婦人日記執筆者）



韓國興業會社取締役中山希賢氏令孃米子



福山和五郎氏養女春海子

ヤマ十印

最上醤油

銚子の犬吠岬と君ヶ濱より写



釀造元 千葉縣銚子港 岩崎重次郎

（電話銚子三〇番 振替口座五七二番）

人若し藥を需めんとせば須く撰擇を要す

清心丹の三大特色は

一効能の確實

二品質の善良

三價格の低廉



主治効能

心思鬱憂、頭痛眩暈、胸痛腹痛、過飲過食、惡心嘔吐、溜飲宿食、中暑中寒、下り痢疝痢、舟車不快、咯痰咳嗽、咽喉不調、齒痛口臭、

定價

壹圓箱入　五拾錢箱入　參拾錢罐入　拾五錢罐入

拾貳錢瓶入　貳拾錢紙包　拾　錢紙包　五　錢紙包

本舗 東京市日本橋區元大坂町八番地 高木與兵衛

新文林

第一卷 第九號

定價拾錢 郵稅壹錢

八月號要目

△文壇何でも屋と專門家……生方敏郎
△旅行の趣味……近松秋江
△あの男（評論）……小宮豊隆
△夏四題（俳句）……荻原井泉水

▲ある朝（小說）……田山花袋

△ルツソオ……（評傳）
△夕闇（小說）……水野仙子
△文藝閑話 △寄贈雜誌の評
△代表的歌人の歌（評釋）窪田空穗

▲口繪
△イレエネ、トリイシユの『ノラ』 —— △棕櫚の並木のピラミツト —— △ルツソオの肖像 △文學者の故郷 —— 高濱虛子氏、岩野泡鳴氏

▲文叢（投稿歡迎）
△小說（秋聲選）
△俳句（鳴雪選）
△短歌（空穗選）
△長詩（編輯局選）
△普通文（雨雀選）
△短文（編輯局選）

現代小品叢書

第四編

吉江孤雁先生著

砂丘

價各冊卅五錢 郵稅六錢

自然はそれ自分の生命であり藝術である。其の生命と藝術を體得する時に人間の生活藝術が生じて來る。孤雁氏が得意の近作二十五篇を集めた此の「砂丘」一冊は自然の生活であり藝術である。氏が從來の作品によつて自然を味ひ得た諸卿は此の書によつて一層の理解と生命とを得られる事と信ずる敢て諸卿に此の書を呈す。

第一編 田山花袋先生著 椿（三版）

菊半截判 三百餘頁美本

第二編 正宗白鳥先生著 青蛙（三版）

第三編 前田晁先生著 途上（二版）

發行所 東京神田今川小路 忠誠堂

電話本局四九六六番 振替東京二〇四三一番

萬朝報記者 涙香黑岩周六著

小野小町論

價一册六十錢
郵税八錢

此書ハ著者が明徹の史眼と愼密の研究とを以て材を當時の歌書に取り、更に時代の背景に照して、小野小町の出身より其戀、其閲歴、其境遇其臨終等を詳論し、容貌ハ花の如く才藻ハ玉の如き千古の佳人を紙上に復活せしめたる者にして、文章ハ拭ひたる鏡の如し、事の愴悽、情の痛切、一讀せバ生涯忘れ得ざる如き深き印象を留むべし、近來稀有の好讀本なれバ大方諸君、男女ともに愛讀あらんとを請ふ

發行所 東京々橋區弓町 朝報社

發賣元 東京々橋區弓町朝報社内 振替口座東京一万二千番 萬辨舍

毎月一回發行



▲武士道銘々傳 山縣大貳……寶井琴窓

△おとみ與三郎 玄冶店……蓁々齋桃葉

▲西遊記 金魚の怪物……一立齋文車

△翠泉寺仇討 褸袍の錦……一龍齋貞山

▲變化出没 續兒雷也阿梶……猫遊軒伯知

普通號金貳拾錢　郵稅金貳錢

講談世界

此の雜誌は何處の書店にも賣て居ります

▲新講談 此糸蘭蝶……歌川春輔

△落語 水屋の富……柳家小さん

▲探偵奇譚 妖婦の正體……搖曳樓

△慶長男士 平澤源八郎……旭山堂一光

▲浪花節 合邦ヶ辻……浪花小虎丸

●浪花の演藝界……いさ美

●『南部坂』の辰雄……孔雀船

●洒落の評釋……エス生

●芝居の立見場……むかで

▲新派悲劇 狂雄蝶……半痴生

▲浮世研究 濱町夜記……無腸公子

▲流行唄の變遷……近藤蕉雨

▲花柳小說 避暑地の寫眞……ちどり

文藝 俳句、都々逸、一口噺、冠句、へなぶり、物はづけ、川柳、編輯便り

挿畫 古洞、英朋、宗方、春帆、泣葉、の諸畫伯執筆鮮麗無比

（八月號發賣）

講談世界發行元　東京神田旅籠町一丁目　文光堂　電話（下谷）四八一九　振替東京一九五五

（最寄書店ニ品切ノ時ハ本社ニ全部取揃エアリ御注文願上候）

かたばみ



大竹工學博士令孃暢子



梨本宮家々令坪井祥氏令孃直枝



岡山陽氏令孃たづ子



吉田みさ子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

並木の風



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大好評の八月號出づ各號重版

うきよ

◉面白い浮世の娛樂恐しい社會の裏面◉

◉吉原仁和賀の解剖
◉橫濱カフエーの墮落女
◉下谷赤坂橫濱の魔窟
◉すかしぼり般若物語
◉大成功色魔退治
◉恩を仇なる乞食少年
◉吉原堤馬肉屋の內幕

其他『演藝欄』は辛辣なる批評と評論に滿され『浮世くらぶ欄』は全國各地方に亘る美談佳話醜聞惡行の記事を以て埋められ『讀者文藝欄』亦大に振ひ外に大懸賞募集あり、而して全記事總べて事實にして一つの虛構なく一々現場寫眞を挿入しあるは既に定評ある本誌獨特の特色なり

▲紫園に惱されたる少女日記
▲最近芳町藝者戶籍調
▲神樂阪藝者松龍 吉原女郎高尾 淫賣白首お鐵 三女告白

◉活地獄足尾銅山の秘密
◉變裝蠣殼町の女
◉縊死した脫艦者の秘密
◉電車々掌の惡手段
◉怪談血染の絹蒲團
◉下谷瘡守稻荷の醜聞
◉法科大學生戀の喜劇

▲有樂座女優物語
▲遊女を落籍せる獨逸人
▲想像も及ばぬ大悲劇
▲伊藤公の落胤と稱する女

◉淫風荒ぶ沼津
◉鮮血淋漓怨みの槍先
◉鎌倉藝者の暗鬪
◉諸國花柳界消息
◉東京大阪名古屋活辯界
◉大島の美女醜女
◉東都寄席藝人總まくり

◉本誌獨特記事悉く現狀鮮麗の寫眞挿入◉

定價 一冊送料共金拾壹錢 半年分前金六拾參錢

東京市京橋大鋸町 振替二四三七九番 樂文社發行 (電話京橋六〇七番) 賣捌 全國各地書店

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子文壇化粧顧問　藤波芙蓉先生實驗發明

毛はへ 拔毛止 強髪剤（きやうはつざい）

◎定價一瓶金九拾五錢　送料市内四錢、地方八錢

清韓臺樺各送料參拾錢づゝ

芙蓉先生曰く「これは自分が發明した良剤ではない、英國の有名なる侍醫ロコック先生が、毛髪の生育を促がし、脱毛を防ぐ常用御料として、故ヴイクトリア女皇の爲に苦心して創製された顯著なる強髪剤ですが、西洋人に適ずるもの其儘日本人によいとも限られないから永いとそが効否を實驗した結果、多少の改良を加へたに過ぎんので、主材には大した變りはないのであるから、之を使用して効驗を得た人は宜しくロコック先生に感謝するが至當です」。以て此強髪剤の非凡の選良化粧材たることが了解されるでせう。

艶肌剤（えんきざい）

◎定價一瓶金六拾錢　送料市内　錢、地方八錢

清韓臺樺各送料參拾錢づゝ

「艶肌剤」は顔のシミやオデキの痕を取り、キメを細かにし、皮膚のツヤを綺麗にし、化粧下にも、白粉下にもなり、而して白粉のノリをよくし、お化粧を落付かせる化粧料であります。

西洋式煉洗粉 トレートクリーム液

◎定價一瓶金七拾五錢　送料市内四錢、地方八錢

清韓臺樺各送料參拾錢づゝ

「植物性洗粉」は洗粉として理想的のものであつたけれど原料が時々需要を充たすと能はざるため、希望者の不便を釀すと少からず、如何にもしてこれに代るものをと遂に此純植物性洋式煉洗粉を皆様のお化粧の資料に供することゝなりました、それに先の植物性洗粉はアブラ性の人には極めて好適材でしたけれどアレ性の方には適せぬ缺點があつたに反し此トレートクリーム液は何れの皮膚の人にもふさはしく、白粉のノリをよくし、キメを細かにするのみならず、使用の簡便なる洗粉に比して使ひ心地よく、剃刀アブレするやうな弱き皮膚の人でも其アレを防ぐの力を有して居ります。

日やけどめ（ひ）

◎定價一瓶金四拾錢　送料市内四錢、地方八錢

清韓臺樺各送料參拾錢づゝ

此「日やけどめ」は季節々々に、朝夕郊外の散策又は海邊の漫歩の折、之を御顔に御つけになつて出られ、御歸りになり又御つけになれば、日に焦けることなく、又やけたのを綺麗に除ります、化粧水の代用としても結構です。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

化粧した　艶美水

◉定價一瓶金五拾錢　送料市内四錢、地方八錢

肌を美にし、白粉のノリをよくする最も優越なる化粧水として現時歐洲に稱讃されつゝある「女神の膚の色」を主材とし、これに芙蓉先生の權威ある學理と實驗よりの艶美料を合劑して調製されたる化粧水です。

從來の「化粧水」は啻に原料がこの艶美水より高價なるのみならず、肌膚を艶美ならしむる點も此艶美水に及ばざるを以て、撤回する事に致しました。

清韓臺樺各送料參拾錢づゝ

ゴールトクリーム

◉定價一瓶金壹圓　送料市内四錢、地方八錢

「コールドクリーム」の美顔料としての効用は、之をお化粧なさる前によく御顔なり、御手なりに摺込み、紙か軟かい絹で拭き取りますと、アブラ性の方は、アブラの出るのを防ぎアレ性の人はアレを直し、皮膚を艶麗ならしめ、光澤を出し、おしろいを翌日までも剝げずに落付かせ、殊にシワを延ばし、色を白くさせる力を持つて居ります。」但此クリームは美顔劑で、世のクリーム類の如く御化粧下用には立ちません、「艶肌劑」と「コールドクリーム」とは艶肌美顔の姉妹劑です。

清韓臺樺各送料參拾錢づゝ

クセ毛なほし　美髮劑

◉定價小瓶參拾錢、中瓶五拾錢、大瓶壹圓　送料市内四錢　地方八錢

「美髮劑」は十有三種悉く人體皮膚並に毛髮の滋養となる純植物性のものより成り、天性のチヾレ毛には些しも効能はありませんが、クセ毛なら何んなひどいものでも直ります、譬へクセ毛の人でなくとも、毛がやはらか過ぎてハエギハもビンも、タボも下り易い毛髮でも、之を防ぐことが出來ます、又毛髮が硬くも自由の利かない人でも、すなほな好い毛髮となります、加ふるに毛髮の色澤を美しく致します。

清韓臺樺各送料參拾錢づゝ

美髮香油

◉定價一瓶金壹圓五拾錢　送料市内四錢　地方八錢

「香油」は美髮劑の總ての効能を具有してある外に、一時的にチヾレ毛を直し、毛をフクラマス力をもつて居りますから、如何なる毛の薄い御方でも、これをつけて髮を御結ひになれば、フツクリとして澤山の毛のやうに見えます、又皮膚が剝脱してフケが出たり、毛髮が赤く細く枯痩するのを直す權威を備へて居ります。

清韓臺樺各送料參拾錢づゝ

注意

▲本品は世間にある化粧品と異なりワザと粧飾をなさゞる實用専一主義の責任ある無類珍品ですから、速に御試用あれ
▲本品は本社代理部の外一切發賣を許されぬ珍品なれば直接本社代理部へ御申込下さい

藤波式化粧料　專賣元

東京市京橋區大鋸町十一番地
振替口座東京第壹七貳九番
（電話京橋六〇七番）

女子文壇社代理部

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

好評 ◀女子文壇七月增刊▶ 定價金十八錢 送料壹錢五厘

新しき文藝

小說

夜の浪　水野仙子
執着　山田たづ子
疲勞　松井靜代
赤い柿　山田邦子
勝利　前島優梨子
水菓子屋の前　小笠原貞子

○溫泉に行く路……粒木つね
○地震の上の生活……長曾我部菊
○ダリアの前……原田琴子
○形見の日記……故山田篠子
○燈臺より……伊藤夕陽子
○つぶやき……みほ子
○結婚前後……
△待つ間の心……どり
△婚禮の夜……桂華
△幸福……鈴蘭
△十六……さみどり女

小品文

△武藏野の夜……さかえ
△眞珠……伊藤夕陽子
△テントの夜……町田靜江
△桐の花の頃……蔦紅
△白河へ……廣江曉子
△ひとり……森山路子
△郭公……葵の花
△飛行機……さみどり
△門……わくらば
△綠の丘……林口和歌子

○小品文選評……水野葉舟　澤村胡夷　河井醉茗
○『かへる花』を讀む……吉田常夏
○別るゝ朝……山路るり子
○櫻實の味……深雪
○下町の娘さんに……袖子
○和歌　須磨子、松並ひさ、九十子、花守る少女、白妙女
○店頭印象記……川島鈴枝
○牛のゆくへ……松並紫花
○帝都學生氣質……櫻木雪江
○婦人の歌集二種
△歌集『水仙咲く日』……山頭火
△『涙痕』を讀む……はなよ
○現代十婦人……紅子其他

東京市京橋區大鋸町
振替口座第一七二九番
女子文壇社發兌
△全國到る處の書店取次販賣す

U.C. BERKELEY LIBRARY
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



第九年第拾壹號

女子文壇

八月號



海邊の對話

「何のくらゐ深いでせう、此海は――」

「此處は淺いぢやありませんか、ほら、手さきが濡れるだけですわ、此でも海の潮水よ」

「全くね、深い海も初めは手さきほどの淺さで、それが一歩々々段々深くなつて、幾千尋の深さになるのですわね」

「深いところへ誘はれて行くやうに思はないこと？」

「見てゐるとね、能く動いてゐますわね、波浪は何うして斯んなに毎も自由に動いてゐるんでせう」

「遠くから見て居ると、海ほど靜かなものはなく、近くで見ると海ほど動いてゐるものはありませんわね、海の底は何んなでせう」

「屹度青い〳〵水晶宮のやうでせうね、海の底を歩いてみたいわね」

「蟹ぢやあるまいし、海の底を歩くことなんか出來ないぢやありませんか」

「空想よ、私の――。私は海邊へ來ると凡ての刺戟を忘れて了ふの、其代り誘惑されるの、何の抵抗力もなくなるの」

「考へる人つて別だわね、私は海も好きだけれど直ぐ飽いて了ふの、單調ですものねえ」

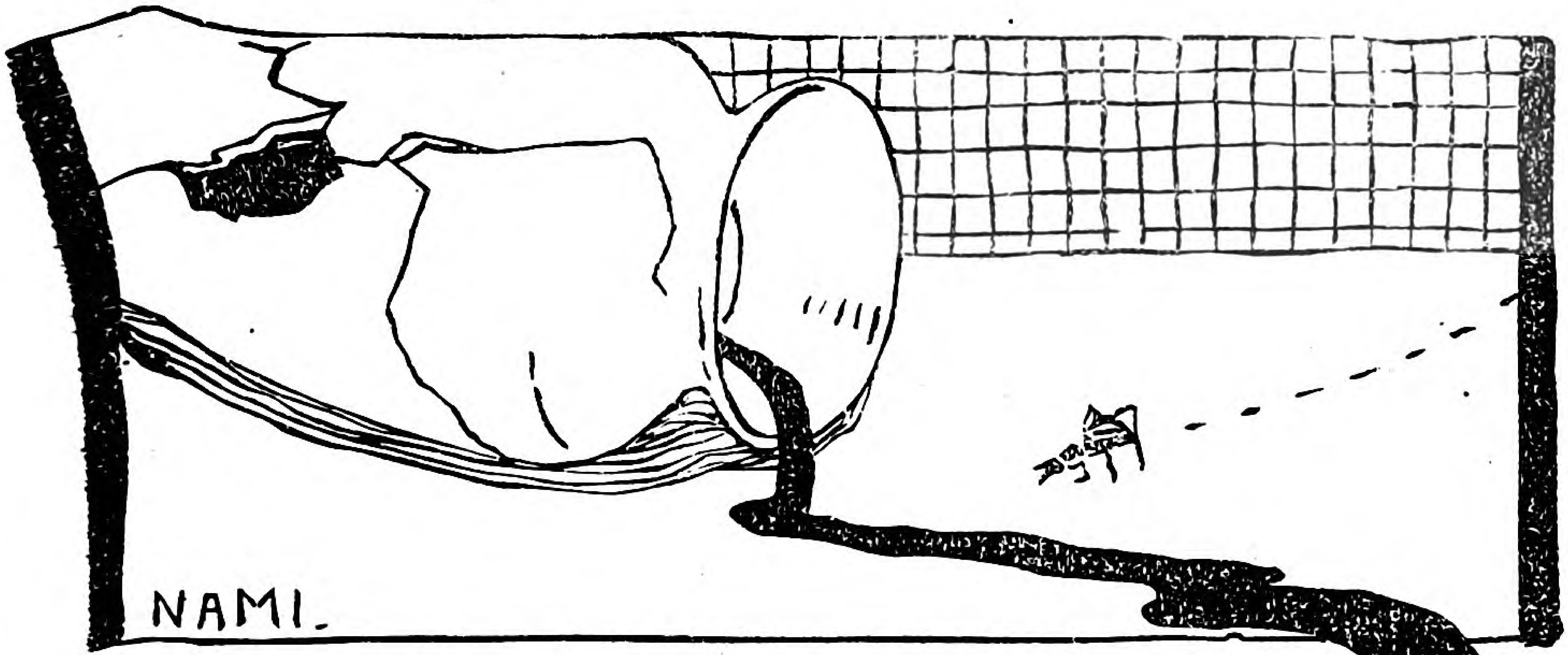
「えゝ單調は單調よ、だから海邊へ來る時は何か考へることか、想ふことを持つて來るのね」

「あなたはどつさり考へごとや、思ひごとがあるから好いけれど、私なんか何もないのだから――」

「あら、有つて宜いんでせうか、不可いんでせうか」

「可否は別として、單調な生活もつまらないものよ」

――すゐめい――



美人の毒殺事件

最も不幸なる生涯を送れる婦人
問題は七十年に渉りて解決せず

菊池幽芳

私は今「大阪毎日」と「東京日々」に書いて居る小説『百合子』の中の「毒物學」と題した一章中に、この春その再審問題が起つて、佛蘭西の新聞紙面を賑はし、今になほその議論の揭げられてあるラフアルジユ夫人事件と稱する、有名な美人の毒殺事件を引合に出して置いたが、この夫人はその事件當時から全佛國に亘りて非常な同情者を有し、佛蘭西中で最も不幸なる婦人の一人であつたと解釋せられて居るので、且つ全歐洲に非常な感動を與へた稗史的の事實であるから、今日

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は少しそのお話をしやうと思ふ。

歐羅巴、別ても羅甸民族の歴史には毒殺事件が隨分多いので、十六世紀ごろの羅馬には毒殺が一ツの流行を來し、トフアナ水など丶稱する、今日ではその成分の少しも分らぬ最も猛烈な毒藥が盛んに使用されて居たものである。その流行は次で佛蘭西に及び、ルイ十四世時代の宮廷や上流社會に大分毒殺が行なはれた。それは手紙の中や手袋の中、花束の中などに毒を仕込むといふやうな方法で、なか〱巧妙に小説的に行はれた。近代において美人で名高かつた國立劇場フランセイ座の女優アドリエヌ、ルクーブラールが花束で毒殺された事は有名な事實で、これは小説また脚本に仕組まれた事もある。

さて私がお話しやうとするラフアルジユ夫人事件は今日の問題とはなつて居るけれども、その事實は七十年も昔にあつた事である。七十年も昔にあつた事ではあるが、その後も絶えず問題となり、懸案となつて居たので、七十年もたつてからその再審問題で世上を賑はしたといふのは隨分珍らしい話と云はなければならぬ。それだけに此事件もまた興味が多いのである。



夏の並木道

ラフアルジユ夫人の本名はマリーカペルと云つて千八百十六年に巴里の眞中で生れたチヤキ〱の巴里婦人である。有名な美人で交際社會の花と唄はれた身が、事情に強られて田舍の鐵工場の主人、陰鬱で嫉妬深いラフアルジユなるもの丶妻となつた。ところが或日このラフアルジユが突然變死を遂げ

たのである。死體解剖の結果臟器内に亞砒酸を發見したといふのが基で、夫人は良人殺しの罪名の下に收監の身となるに至つた。この公判が佛蘭西は素より全歐洲の人心を騷がす迄の反響を見るに至つたのである。美人崇拜の歐羅巴では美人の犯罪といふ事がいつも驚ろくべき反響を持つ。私の滯佛中ステーネル夫人事件といふ交際社會に名のある婦人の良人殺しがあつて、これも非常な騷ぎであつた事から想像しても、この美くしく誰にも同情のあつたラフアルジユ夫人の公判の人心に與へた影響は蓋し少なくなかつたらうと察するに難くないのである。

此事件には徹頭徹尾秘密が伴なつて居るので、何人も眞相が分らぬために公判はいよ〳〵複雜を來し、犯罪無犯罪の二ツの議論が、寄ると觸ると到るところに火花を散らして爭はれた。それだけに人氣もます〳〵加はるばかりで、證人の陳述や何かゞ皆グラ〳〵と變つて行く。有名な化學家や裁判醫の檢證も、後でしたものが前にしたもの丶斷案を打消して行くといふ風で

事件はます〳〵五里霧中に迷ふのみである。果は法廷の庭に鍋を据ゑてラフアルジユの臟器の殘りを煮たといふやうな空前絶後の事實さへ行はれた。

悲慘なのは長いこの公判の間度々引出されるマリーカペルのラフアルジユ夫人で（此時夫人は二十五歳）氣力も根も盡果て、屢々公判廷で絶倒し、裁判長の審問に答ふる力さへなくなつた。夫人は絶望のために、全く沮喪しながらも、なほ生命のある限りは無罪を愬へて居た。

千八百四十一年九月二十日は夫人の云渡の日であるその前日夫人は自分の熱心なる辯護人パイエーにあてて左の三行の手紙を送つた。

私の貴とき救助者たる貴下、私は紀念の印として世界に二なき私の貴重な所有品—亡父の名譽勳章を貴下に差上ます。

これだけを書いて、夫人は半ば死せる如く寢臺の上に絶倒して了つた。翌日最終の公判廷には夫人は籠に乘せられてやつと法廷に運ばれた。辯護人の最終の辯

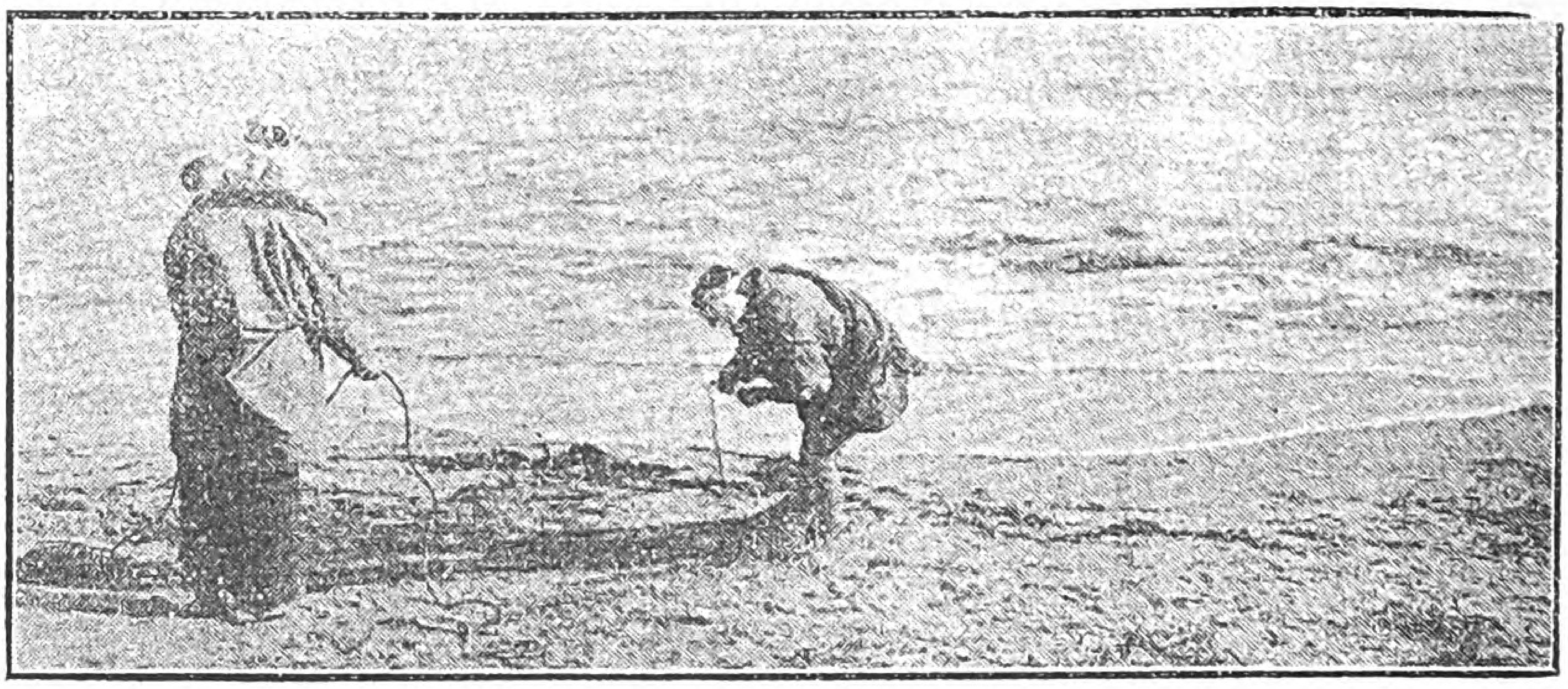
Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

護やいろくの形式があつて、辯論は終結した、傍聽人は此時喪の被布を着て、辛く立上る蒼ざめた不幸の美人が、血を絞るやうな聲で、

「裁判長樣、私は誓ひます、私はどこまでも犯罪者ではございません」

と愬ふるのを聞いて多くは皆泣いた。裁判長も感動されながら、事件の大體を説明した。いよく陪審官の合議に移される事となつて、陪審官一同は退席し、夫人は殆んど氣絶した身體をまた籠で運ばれた。それは夜の七時四十五分であつた。

鮓づめの如く重なり合つた傍聽人は最後の判決を聞くべく、一人も退散せず食事も取らずに、待構へて居る。一時間の後號鈴の音が寂寞を破つて響き渡つた。法官、陪審官、警察官などが續々法廷に表はれると、深き緘默が滿堂を鎖し、聽衆は片唾を呑んで控へた。此時誰の胸にも深刻な苦痛があつた。



海を家とする漁夫の生活

陪審長は立上つて陪審の結果を報告する。

「多數の意見に從つて、被告を有罪と認める事になりました。」

長き私語と、戰慄が傍聽席を風の如く渡つた。婦人傍聽席からは驚愕の叫びさへ聞えた。

陪審長は冷靜な態度で云ひ續けた。

「有罪と認めると同時に、多數は情状の酌量すべき點をも認めるのであります。」

此時一語を發するものもなく、身動きをするものもなく、また息を吐くものもなく、法官、陪審官、傍聽者あらゆるものゝ眼は申合はしたやうに、今しラファ

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ルジユ夫人の表はれんとする法廷の戸口に灑がれた。
けれども夫人は表はれない。
裁判長は命令を下した。
「憲兵、早く被告を出廷させい。」
十五分間はまた空しく過去つた、けれども被告は依然表れない。此時辯護人バイエーが額の汗を拭き／＼欄柵の前に表はれた。そして被告は氣力盡き正氣を失つて居るので、こゝへ運んで來る事は、生命に關係すると思はれるから、お見合せを願ふ外ないと述べた上
「此上は被告の缺席を許して、判決あらん事を希望致します。」
併し佛國の法律は被告の出席なしに判決を下す事を許さない。まづ檢事がこれに反對した。結局どこ迄も夫人の出席を待つ事となつた。
かゝる間に三十分はまた過去つた。この悲劇的な待受の長い間に、裁判所の門前に群集する無數のチユール市民の、夫人の無罪を要求する叫びが潮のやうに法廷に聞えた。

兎角する中執達官が入つて來て、調書を讀あげた。それは被告が床の上に寢て正氣を失なつて居るので、答辯の不可能なる事を證明したものであつた。
裁判長は乃ち英斷を以て、次の如く被告に對する判決を下すの止むなきに至つたのである。
被告ラフアルジユの妻、マリー、カペルを無期徒刑に附し、且チユール町の廣場にて曝物の刑に處す
この判決が傍聽者に與へた感動は非常なものであつた。
また此判決は、當時交通不充分の時代にあつたに拘はらず、驚ろくべき敏速の度を以て波のやうに全歐洲に傳はつた。そしてこの判決を一番最後に知つたのは却つて本人のラフアルジユ夫人であつた、夫人は熱心に自分を辯護して呉れる友や、驚ろくべき多數の同情者の努力によつて、自分の無罪となるべき事を信じて居たのだ。從つて夫人の友が夫人に判決の次第を知らせる迄には、いろ／＼の婉曲の手段を取つたのである
併し夫人は判決の次第を知ると同時にまた、皇室の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

恩典に依つて曝物の刑を免れた事をも知る事が出來た

ラファルジュ夫人は特典によつて辯論の開始以來、裁判所の門番の娘の室に寢る事を許されて居た。そして一日でも新らしい薔薇の花の差入物を受けぬ日は無つた。夫人はまた小兒の時から夫人に事へて居た侍女のクレマンチンをも伴ふ事を許されて居た。クレマンチンが夫人の最後まで忠實に事へて居た事は實に涙の種であつた。

かの判決の日から夫人はべつたりと床に就いたまゝで殆んど一ヶ月を過した。その間夫人はまだ判決の次第を知らぬのであるが、併し夫人は誰に向つても判決の模樣を聞うともせず。また知らうとも欲しなかつたけれども、いつか知らねばならぬ時は近づいた。

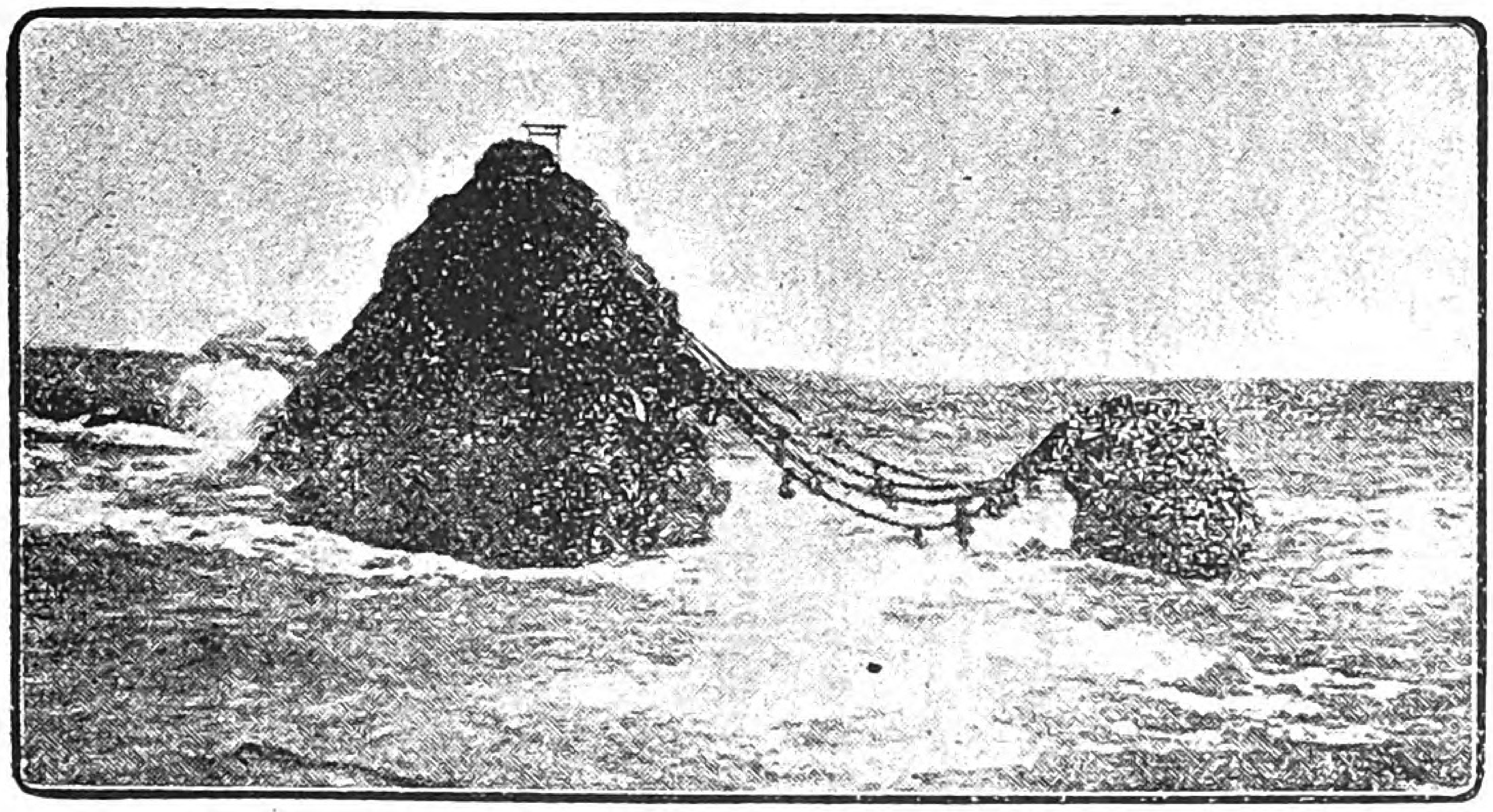
十月の二十四日熱心な夫人の辯護人の一人、ラショーが夫人の留置室に入つて來た。ラショーは無言のまま夫人の寢臺に近づいて、悲しげに夫人に一禮し、一語も發せずして只夫人の顏を見詰た。夫人はその刹那にすべてを了解したのである。

夫人の新たなる悲慘の歴史はこれから始まる。

夫人は今迄留置室に居たのであるが、これからはほんとの牢獄――恐らくは夫人の墓であるべき――へ運ばれるのである。夫人はラショーの顏色によつて自分の運命を知ると共に、辛く立上つて、卓子の上に置かれた花束を取り、靜かにその花を毟り捨てゝヨヽとばかり泣入つた。

この一日は殆んど無言のまゝ旅立の準備に費やされたので、夫人を取卷く人々はなほ兎に角と夫人を慰め強て笑顏を作りながら何かの準備を取急いだ。屢々夫人を見舞に來て居た醫者のセジエラルとヴントジユーの二人は、さま〴〵に云こしらへて、護送馬車の恐ろしい觀念を夫人の胸から取去る事に勉めた。知事は遂に好意を以てその恐ろしい護送馬車の代に、驛車を使用し、侍女のクレマンチンに同乘を許して、モンプリエーに護送さるべき許可を與へた。モンプリエーは中央牢獄のあるところである。

まだ夜明に間のある眞夜中の三時、マリエットと呼



伊勢二見の浦の女夫岩

ぶ、かの裁判所の門番の娘は、ラフアルジユ夫人の室へ、音も立てず影のやうに入つて來た。まだ一睡も取らぬ夫人はすぐそれと知つたのである。マリエットは日頃の習慣に從つて夫人の寢臺の前に跪つき、一言も物云はずに、前垂に入れて抱へて持つて來た一杯の花を、夫人の足もとに撒いた。夫人はそれによつて直ぐに出發の時刻の來つた事を知つたのである。

夫人は力なく立ち上つて室の中を見廻した。丁度窓の下の石の壁には、今から六十年の昔、矢張此室に拘禁され、罪なくして斷頭臺上の露と消えた無辜の罪人が、斷頭臺に上る前夜刻みつけた名がまだあり〳〵と殘つて讀れる。このものは殺戮の刑に處せられた後に至り、自身は全く無罪で、妻の父の犯罪を身に引受け潔よく身代りとなつて果たものと知れた。この男の名が不思議と夫人と同一のカペルで、夫人はいつもこの名に引つけられて、その窓の下に佇ずみ、石に刻んだ不格好の文字を見つめるのが常であつた。

今此室を立去り、カペルと殆んど同じ運命に導びかれんとする夫人の心の中は、そもどうであつたらう。夫人は鉛筆を借受けて、この殉教者の名の下に、マリーカペルとわが名を記し、今――入來れる憲兵にその身を任して、靜かに馬車の中へ導びかれた。

夫人がこゝを出る時、夜はしら〳〵と明渡り、あらゆる留置所の窓からは、ハンケチが振られて『善き旅と長き生』の餞別の詞がその口々から送られた。

あゝ長き生！その餞別の詞が夫人に取つて如何に殘

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

酷のものであつたかは、四人の何れにも解せられなかつた。

夫人の死後出版せられた獄中日記や追懐錄によるとチユールからモンプリエーの牢獄に送らるゝまでの長い道中の有樣が記されてあるが、如何なる記錄もそれ以上に人を惹つける力はあるまいとさへ思はれ、繪のやうな光景が彷彿として表はれて居る。



夫人の馬車がアルジヤンターに差かゝつたのは、眞夜中の十二時過であつた。それにも拘はらず、アルジヤンターの町は一軒も寢靜まる家がなく、皆起きて馬車の通行を待ち受けいよ〳〵馬車が來ると町民は悉く街路に出で馬車の通行を止て、夫殺しの毒殺者を見んと犇いた。中には脅迫の文句を用ゐるもの、殺して了へなど罵るものもあつた。そして手に手に洋燈、蠟燭、提灯のやうなものを用意して居た。馬車が無事に此間を通行する事は到底不可能と思はれたのである。

突然に夫人は馬車の戸口をあけ、自から顏を群集に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

表はして、

「みなさん、そんなに私が御覽になりたいのですか、それなれば皆さんの思召のまゝです。」

夫人はかうして群集に表はれるより外には道が無かつたのである。すると驚ろくべき効果が忽ちに表はれた。群集は感動され、夫人の姿に惹入れられて、一言の罵詈を試むるものなく、不敬の擧動を敢てするものなく、爭ふて夫人のためにその必要とするものを充さんと申出でた。澤山の藁屑を馬車の中へ持込んで、氷のやうに冷た夫人の足を暖めんとするものがある。干葡萄を持つて來るものがある。栗、胡桃等を持つて來るものがある。また聖像や禁厭の指輪などを送るものもある。かくて護送車の過去る後から群集はなほ追かけて夫人に力づけ、神の惠あれと祈りの聲を合はし、全町民悉く夫人の同情者となつた。

馬車は到るところかくして過ぎた。夫人の姿は行くところの途上において、無罪の確信を人々の心に蒔つけた。モンプリエーの牢獄に來てからもその通りで土地の尼僧達は殆んど崇拜に等しき同情を夫人に持つに至つた。獄卒等も出來る限りの自由を夫人に與へんと努めた。

夫人は此牢獄に七年の間といふもの、絶望と孤獨と病弱との爲めに惱みぬいた。千八百四十八年の一月に獄醫は夫人の掛念すべき健康狀態について建言したので巴里の大學から四人の醫學博士が夫人を診察すべく派遣された。彼等は診斷の結果夫人の健康を囘復せしむる唯一の途は、夫人に自由を與ふるの外なしと復命した。

この復命に對しては不幸にして何の詮議もなく空しく十四ヶ月を過した。夫人の健康はいよ／＼危險に陷いり、新たなる診斷はまた繰返され、こたびはセンルミの養生院に移される事となり、夫人は千八百五十一年の二月二十二日そこへ運ばれた。

ルイ、ナポレオン親王が特赦の恩典を夫人に下したのは、更に一年後の事で、この恩典は最早時期を失して居た。夫人はまだ生て居たといふよりは息の通ふ骸

骨に過なかつた。當年の美人も今はその面影だになく僅かに骨と皮のこの姿を、ウヰの溫泉場に運ばれたが二ヶ月の後には無殘にも夫人は白玉樓中の人となり、その遺骨はオルノラックの墓地に收められ、長くその幽魂をこの地に止めた。夫人の世に殘したものに、獄中日記及追懷錄があり、慘鼻にして讀むに堪へぬ。

あゝ夫人は果して有罪であつたのだらうか。それとも無實の罪を負ふて、かゝる慘の慘たる生涯を終つたのであらうか。

* * * * *

私は夫人の毒殺事件が七十年後の今日において、何故に再審問題を惹起するに至つたかを詳しく書たい、併しあまり長くなるから簡單に切上る。要するにそれは屍體解剖の結果發見された砒石の分量に異議があるのである。ラフアルジユの屍體解剖の結果發見された砒石の分量といふものは極めて少量で、普通毒殺の場合の三十分の一にも過ぎぬのである。これだけの砒石の量によつて毒殺と斷定する事は今日から見れば甚だ早計であるを免かれない。當時有名な化學家ラスパイユがこれに反對して、

「裁判長閣下、砒石は到るところにあります、裁判長閣下の椅子からも砒石を分析する事が出來ます」

と喝破したのは名言として今日に記憶されて居る。

砒石は人體に存するものであるか何うかといふ事は、夫人の疑獄以來今日まで研究されつゝあるところで、それについては有るといひ無いといひ、いろ〳〵の反對した議論が絶えず鬪はされたが、これについて最近ベルトランド氏は最も精確な方法により、或時はモナコ王の補助を受け、海底に潛みてまで研究する等最も忠實な科學的探求の結果、砒石は人體のみならず、あらゆる動物の體内に存在するものであるといふ事を證據立てた。ラフアルジユ夫人の毒殺の嫌疑は此爲にも甚だ薄弱になつて來たのである。若し夫人が加害者にあらずとすれば、恐らく夫人ほど不幸な生涯を送つたものはあるまいと、同情に堪へぬ次第である。

* * * * *

女子文壇八月號

翡翠

夜雨



二八誰家女　飄來倚岸蘆　鳥窺眉
上翠　魚弄口旁朱
八雲刺す出雲の兒等が黒髪は吉野の川の奥
に漂ふ
綠髮隨波散　紅顏逐波無　何圖逢
伍相　應是想秋胡
見津見津四久米能若子我伊觸家武磯之草根
之干卷情裳
我妹子が寢くたれ髮を猿澤の池の玉藻と見
るぞ悲しき
猿澤乃池四浦芽之我妹子我玉藻珂豆可婆水
曹火名麻死

「三寸と延び七寸とのびて五尺の髮にかへらば人の摑まむ」
「なゝたりの女やくしやに弄ばれてまだ懲りずまに君を見しかな」
にくきものに思ひなしぬる君なれど海に入れとは願はざりしを
鯛釣月十八日の明け明けに君が見し海は霧立ちけむか
南に伊豫が嶺見せて燧洋桃いろの海は君を吞みけむ
絲だゝみ吉備の鼻より敷き設けば落つとも潮は騷がじものを

百貫崎沼隈の瀬戸に入りしかばはしきやし海も君を忘れじ

羨やまし弓削の小島の白水郎一人海に入り行く君を見にけり

浪の穂に見えがくれせし亡骸を抱き上げしてふ白水郎とあらまほし

猿澤の池の玉藻やは君が爲し入毛の如く脫けて流れし

流れにし髪はもとより愛さまねど翡翠の簪何日か浮ばむ

嫁入を陸には爲じと曉の海に投げしやひすゐのかざし

尺にだに滿たぬ髪して海に行きし君が入毛の味氣無さかな

海が見し堆鴉のもとゞり海が見し舞鸞のびんは吾思妻

海憎し我が思妻のくちびるに浪の奴をきすせしめたる

わが見し日肌にまとひし樺いろの襦袢の襟も朽ちけむか潮に

白明欄より射し來君生くと天馳せ使わが夢に來し

鳧や天に呼びつる潮ざゐの流るゝなかに浮き出し君

しほれどもしほれども干ぬ髪に枕して脫れ來し海の鳴るを聞くらむ

よしや今は君を返せる賄賂なれば翡翠の挿頭海に遣るとも

海に入ると仄に聞きしも海ゆ出でゝ生くと聞きしもダリア咲く月

ダーリアの咲きし五月こそ嬉しけれ海の女のかへり來し月

今はわれ等ダリアの花の誇もて生きむとねがふ夏の靈し日を

夏の日は靈妙なる哉天に灼ゆる炎の中にわれ等を生かす

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

盆踊

農學博士　横井時敬

田舍の夏は四季中の最も忙しい季節で、田の草取りや、麥の取り入れ等で汗になつて働かねば追付かない位であるが、またそれだけ勞働の後で、涼みがてらの娛樂を樂しまれる季節である。昔は田舍も仲々娛樂が多かつた。村の祭には素人芝居であるとか、盆には盆踊であるとかと云つて、老若男女が打集ふて、樂しみをともにしたものである。然るに近來は甚だ淋しくなつて來た。田舍にいつても盆踊を禁じた處が多い。鎭守の祭りでも實にさびれてしまつた。田舍は元來が淋しい處であるのに夏は僅に二三度の樂しみまでも殺ぎ去つて了ふのは、あまりに心無いわざである。

都は元來が賑かである處へ、年一年と娛樂場が多くなつてゆく。帝國劇場であるとか、歌舞伎座であるとか、活動寫眞であるとか、浪花節とか落語とかと、あらゆる娛樂が供はつてゐる。その上近頃は娛樂の大切な事を主張して浪花節を通俗敎育の手段にしやうなどゝ云つてゐる位であるから、田舍の人の爲めには、猶更娛樂の方法を考へる人があつて然るべきであらうと思ふ。

云ふまでもなく娛樂ほど大切なものはない。胸にわだかまる邪念も娛樂によつて消されて來る。今はさう云ふことはなくなつて居るが、私の若い頃には寄席は晝も夜も開かれてゐて、勞働者などは、寄席にはひつて晝寢をしながらそれを聞いたものであつた。今は警察がやかましいからさう云ふ事はないが以前はどこの寄席にも枕が供へつけてあつて、閑暇さへあれば寄席にはひつて寢てろんで聞いて居た。此のやうに寄席にはひるのはおもに品行のいゝ職人とせられてゐたので疲れを忘れながら聞く話がしらず〳〵面白く、惡いあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そびなどはしなくなるものである。此の頃は寄席も芝居も大體夜が十一時十二時となるが、さう遲いのでは、翌日の仕事にさしつかへるから早く始めて早く歸れるやうになつたらいゝと思ふ。

歌や發句にあらはれると田舍の人の生活は樂しさうに見えてゐる。然しながら今實際に田植をし、草取りをする田舍の人になつて考へて見ると、決して樂なものではない。足や胴の痛い位は云はずとも、それは辛苦の多いものなのである。何によらず何のやうにいゝとおもふ仕事でも職業としてやるといやである。僅に慣れて來て厭でなくなるにすぎないので、さう〳〵都會人の思ふ程樂しいものではない。そこで益々娛樂が田舍の人に大切となつて來る。かりに田園から娛樂の分子を取り去つたならば、田舍の人は必ず田舍の生活を厭ひ、百姓は厭になるに相違ない、私は是非とも田舍の娛樂を、舊に復したいと思ふてゐる。

然し、時代の進步にともなつて、全然昔のとほりにする必要はない、出來るだけ改良した、いゝ娛樂を作り出すのでなければならない。其の一例として盆踊の事を云へば、昔の盆踊には、惡い盆踊も少くはなかつた。村の風俗を惡くしたり、よからぬ事をする機會に使つたりするのもあつて、昔の盆踊りそのまゝを復活すると云ふ事は一寸考へ物である。そこでその弊さへ改良すれば盆踊は村民の親睦を講ずるにはこの上もない娛樂の一つとなるのである。

一體昔の盆踊は下卑たやうに出來てゐる。田舍の樂しみであるから、都會のやうにハイカラになつてはこまるが、バンカラでも、下卑たところのないやうにしなければならない。それについてから云ふ話がある。兩三年前に山口縣で今まで禁じてあつた盆踊の禁をといた、どうも村の共同一致の精神は盆踊のうちに求めなければならぬと云ふので、その改良案を、當局者が樣々に考へた事があつた。

自分も丁度そこに居合して、自分の改良案をのべたそれは先づ第一に從來の盆踊は暗いところで、こそこそと踊るからよろしくなかつた。行燈をつけてその光

のよく當らない狹い場所を、頰かぶりなぞをして踊つたのは、幕府時代の、鄕士などが人目を忍んで踊ると云つたやうな譯もあつたであらうが、今は、さう云ふ秘密的な盆踊は面白くない。明るい處で、廣い場所を選んで公に踊るのでなくてはならない。

西洋には、どう云ふ村落にもダンスが催される。そのダンスが西洋では若い男女の結婚の手段の一つとされてゐて、男女互に選擇する機會とせられ、決して日本の盆踊のやうに暗いところで秘密的にはしない。ある人が日本には男女選擇の機會は要しない、日本の社會組織は、親に選擇の權利があつて、當人同志には互の選擇がされるやうになつてゐないから、西洋のダンスに類した事は要らないと云つたが、然し矢張り、田舍などでは、西洋のダンスのやうに、盆踊を、結婚の手段に利用しても差支はあるまい。たゞ、秘密にしないやうに、明るいところで盆踊的ダンスとしたら、結構である。かやうに盆踊を公の盆踊としたら實に面白いであらうと思ふ。

第二には盆踊の唄である。此れが從來はいけないのが多かつた。慣れてしまへばさうではないと云つてもやはり歌が惡いとよろしくない。唄を是非高尚なものとしなくてはならない。成可質朴な田舍に相當したもので文學的にも面白い盆踊唄が出來るやうになるといいと思ふ。

第三には村の若いものばかり踊らせて、他のものは高見の見物をするやうな事は不可いと思ふ。老若男女一つの環を形作つて、共に唄ひ、共にをどるやうにしてはじめて弊も少い譯である。私は山口縣の盆踊には右の三ヶ條の改良案を出したのであるが、その後の成績はいゝやうである。

盆踊を嫌ふと、百姓が嫌になる。盆踊は禁止する必要はない、これは却つて改良して、益々盛んにして老若男女共に唄つたり踊つたりして樂しんではじめて、一年の耕作の苦も忘れる事が出來る。

娯樂は人生に最も必要だ、遊ぶことをしない人間は伸びてゆかない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（月島の渡し）



街頭に見たる

女五十人

東京ほど複雑した都會はなく、現代ほど複雑した時代はない。其複雑した都會の印象を表面的に書表はして見やうと云ふ企圖が記者の間に起り、最近先づ街頭に於て見たところの女五十人を此處に集めてみた。之を書いたのはT女、N女、M女の三婦人記者と、K、Sの二記者である。元來風俗服粧を描寫することを主としたので、斯う云ふことになると婦人記者の方が勝利を占める、上手に書いてある記事があつたら、婦人記者の手に成つたものと思へば間違ひはない。それから一人の書いたものを一ヶ所に集めないで、五人の書いたものを、彼方此方に混合してあるから、讀者諸君も其つもりで御覽を願ひたいのである。

――七月十五日――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

朝がほ

雨上りの朝、軒に出て朝顔を選つて居る女が有つた。
縦に太く藍と紺と白の三すぢを暈かして染め分けにした上へ一層濃い紺色で萬筋を浮かせたうづら縮みに白博多の伊達卷が嬌かしく、きりつと絞つたたすきのとき色、半ばほつれた鬢の毛に、水色の鹿の子が淋しく覗いて居る。素足の白さ、唇の紅さ。
「是れが好いでしやう、ねえ」格子の中を覗くやうに振返れば、手にした淺黄絞りの鉢の大輪がちらりと搖ぐ。

紅緒の駒下駄

「如何しても紅緒で無くつちやいけないつて云ふのよ二十先にも成つてねえ」言譯がましく間の惡想に自分の駒下駄をさしのぞく品子樣、成程薄納戸の綾絽のコートのくすんだのには似もやらず、茗荷屋の白足袋に喰込むだのは紅無地の細緒。
「でも似合ふから宜いわ」と云へば「厭だけれど」と手をあげて、白鹽瀬地に北海翁の筆になる墨繪の水蘆の半襟をなほす、着物は金透しの横じまに松葉を散らした清涼御召で、羽二重の丸帯の紫がゝつた霞がうすく透いて見えるのが一寸人の眼を引く、いつもの無造作な束髪がたゞ寂しい。

お浚ひに行く

紀の國屋に總ざらひがあると云ふ日、家の前を十二三を頭に小さいのは五つ六つ許りなのが二三人固まり合つて通るのを出てみる。朝がほのメリンス友禪に緋博多の小帶をチヨキンと貝の口にむすんで、かつら下地に引眉毛の道具屋の姉娘、近い内に伯母さんの居る葭町に行くのだと云ふ、お勝ちやんは荒い紫の銘仙に淺黄の兵兒帶、も一人の元祿袖にかぶきりのがお染になるのださうな、此暑いのに、めい〳〵何やら半巾包をぶらさげて、「おぢやの塊りエッサッサ」と組み合つて行くある夜の夕暮。

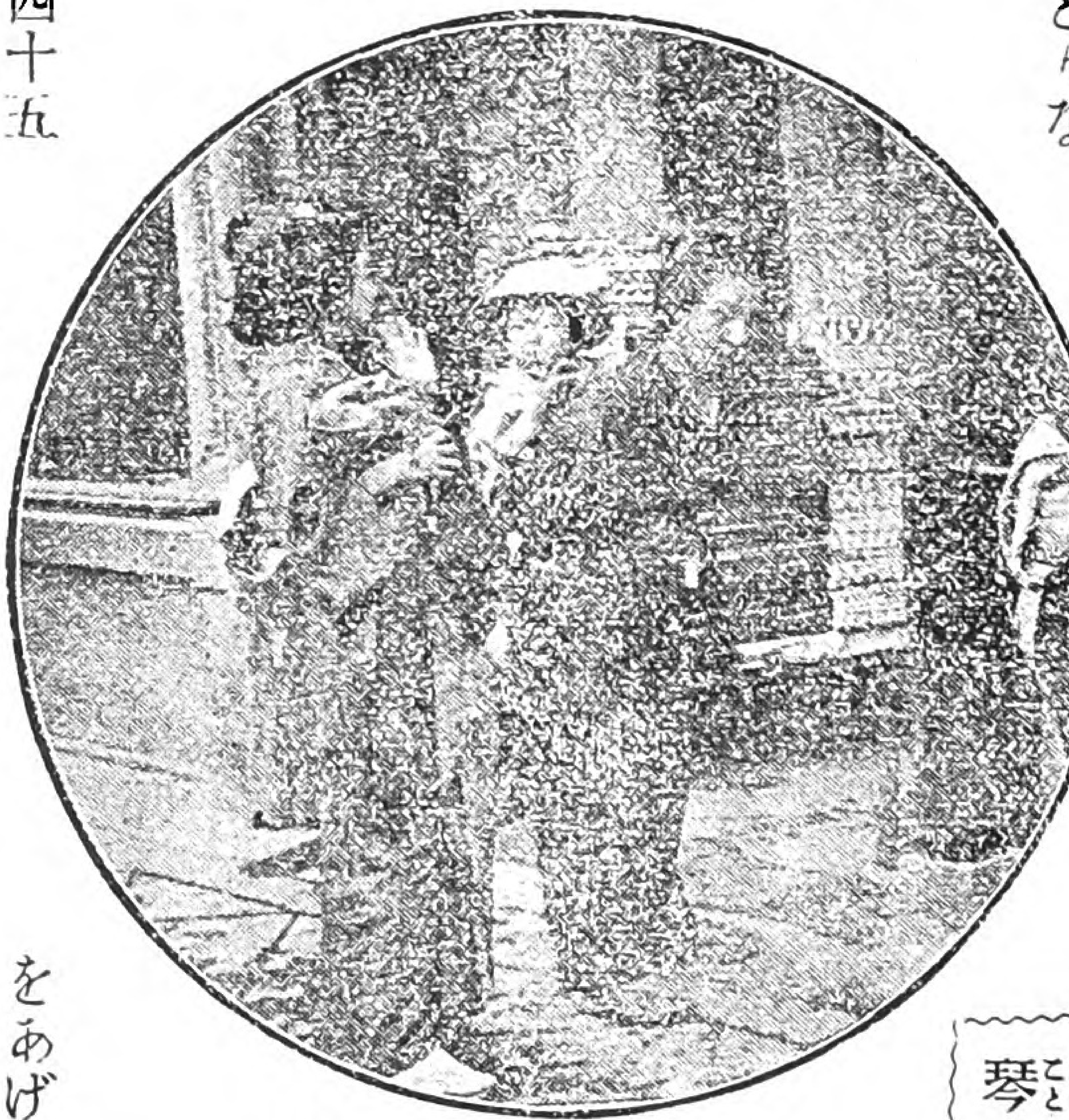
日本橋邊

少しは染めたらしい、つや髪に小さく乘つた髷の簪はしたゝるやうな翡翠の色、艶消しの蒔繪の櫛、角ばら

ぬ鳴海絞りの縮緬のゆかたに無造作に羽織つた焦茶の三つ紋、鼠絽うづらの襟の澁さに、帯止の紺絞りが只嬌かしい。吾妻下駄の黒塗り迄が飽くまで凝つた好みやう。年より澁い、どこか應揚なとりなしは何れ日本橋あたりの大商店の内儀と知れた。それでゐて、わざと金ぴかの指環を抜いた心がなつかしい。

願掛け

餘り波のつかぬ髪を根下りの丸髷に結つて、眉の青い、歯を染めたきりゝとした顔で、襟の掛つたお召の着物に、幅の廣い紐のついた前掛を締めた四十五六の女が、三崎町の停留場から電車に乘つた。乘ると直ぐ一番先端の處まで行き、其處に席を占めて居た二十前後の學生に對ひ、「私は電車に乘ると一番先に坐る願掛けをしてありますから、貴方の席へ掛けさせて下さい」と命じるやうに云つた、そして學生の起つのを遅しと言はぬ許りに待つて居た、學生は遂に苦笑して起つた。



街頭の女（呉服屋の前）

琴のお稽古

朝十時半頃、私が曙町を歩いてゐると二三間前を十七八の令孃が行く。黒つぽい紅梅お召の單衣に白い地に芭蕉の翠色の葉の鮮明な帯をもの涼しく低く結んだ後姿が實に好い、黒い髪の毛が多過ぎて重さうに見える。廂髪の凸線に光線が觸つて、薄白い光りをあげてゐるのが眼に浸み入るほど美しい。ゆつくりとした歩調で、ある家の生垣の前の道を通つて少しゆくと左に曲り七八間ゆくと又右に折れて五六軒あるいた頃、琴の音がその家から洩れて居た娘はその門の前に一寸立止るやうにして戸をあけて中

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にはひつた。自分が門の格子になつてゐるその戸の前に來た時には、娘は玄關にゆく石疊の上を寛かに歩いてゐた。一寸した日光の射しやうで娘の身體から白い陽炎が燃えるやうに見えた。門には琴曲敎授、山勢門人、豐島きよと札が掛つて居た。

酸漿ならす女

淺草ゆきの電車に竹町から乘つた。私の腰をかけた席の正面に斯様云ふ女が身體を斜めにして、嫋小な足を右と左に捻るやうにして居た。粋な黑人の女でなければ似合はない程はでな白と黑との辨慶の浴衣の上に黑縮緬のチリチリした露の垂るやうに光澤のある羽織をさらりと着てゐる身でなしの好さ。浴衣の下には青く見える程白い素肌がちら〱と見えてゐた。

此の女は脣の上に桃色のなぎなた酸漿を鳴らせてゐたが、銀座交叉點から京橋までの間は脣と酸漿とがなづまないで、ヴヰツヴヰツと云ふ響を立てゝゐた中橋に來た頃は鋭くリ、リ、リと鳴るやうになつた。私は電車を降りてからも、小さな酸漿が薄い脣にもまれて、リ、リ、リと云ふ強い音を立てゝゐたのが耳からはなれなかつた。

天主敎の尼

富士見町の濠端であつた。土手の小松と膏藥を貼られたやうに廣告を持つた電柱とか寂しさうに並んでゐる××官邸裏には、人通りが絶えてゐた。青山ゆきの電車がその土手の小松に沿ふて走つてゆく窓から私はちらと白い布の群を片端だけ見た。そしてのびあがつて見ると、そこには天主敎の尼が六人ならんで歩いてゐた。白皙の女が三人と、日本の女が三人と脊丈に從つて並んでぼと〱と歩いてゐた、くすんだ黑の襞の多い尼服を着て、白い布のかぶりものを頭にいたゞいて虛な疲れたやうな歩調で歩いてゐた。一番脊の高い白皙の女が電車のすれちがふ時、ひよいと瞳を上げて自分を見た。窪んだ眼窩からもれる薄い眼の光りがうら淋しい印象を私にのこした。

若奥樣

帝大の正門前の停留所で電車を待つて居た時、その門

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

から丸髷の女が白に刺繡のあるパラソルを斜にかざして出て來て、一緒に停留所に立つた。一番の丸髷に水淺黃の手絡をかけた新婚の人であるらしい。年に二十歳そこ〳〵に見えた。白と藍との濃い微塵縞のモスリンの單衣に埃及模樣の黃色の勝つた帶を圓く結んでゐた。揚負揚の緋の色がダリヤの花の樣に覗いてゐた。皮膚の白い顏は鼻柱あたりの中高なのが一寸混血兒を思はせてゐたが、溫和な表情を見せてゐた。電車が、赤門前に來た時一人の書生がのつて、その女を見ると笑ひながら近よつて會釋をした。女が唇をあけて、『そう』といつた滑な聲が聞えた。書生は無邪氣な聲の人で麥藁帽子の横に、大學の帽章をつけてゐた。

女學生の型

荒い白絣の衣服に、海老茶の袴の太い紐を前にだらしなく結び下げ、半襟は白のメリンス、襦袢の袖は桃色のメリンス、髮は廂にしてある、紫の風呂敷包は書物四五冊のかさがある、風呂敷包の下に別に一冊の雜誌を持つてゐる、電車内で腰掛けることが出來たら讀まうと云ふわけだ。これが殆ど一般の女學生のタイプ。

赤い帶の印象

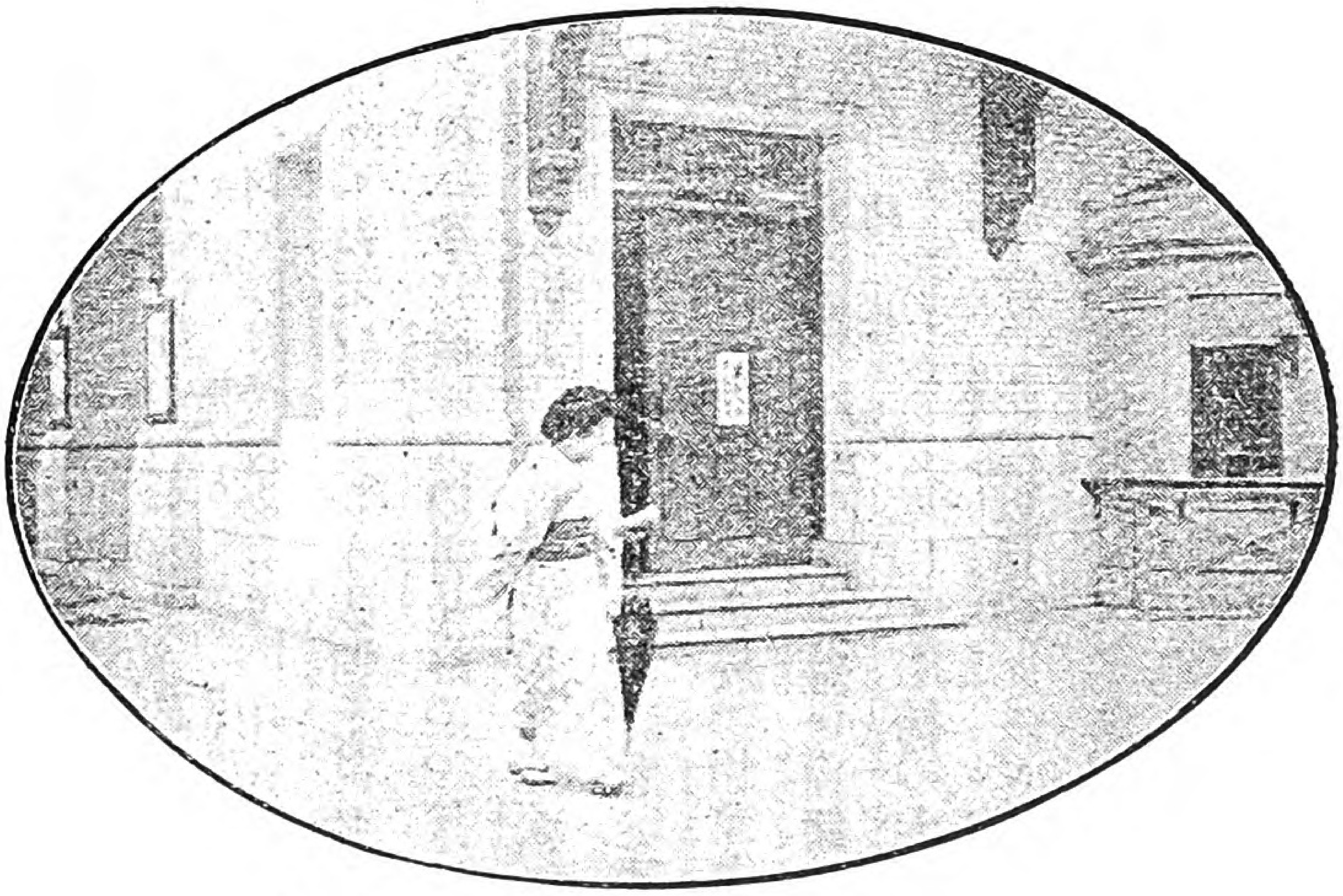
妙齡は十六七、桃割に結つた下町娘の、白つぽい浴衣に、赤い帶、赤い帶と云ふのは全く赤いので、僅に白い模樣がある丈け、地はメリンスかも知れぬが、眞白なやうな衣服に、眞赤な帶を締めてゐるのは、夏の女の姿としては非常に刺戟的であつた。

白い帶の印象

二十七八の奧樣盛り、衣服はお召縮緬か絽ちりめんか能く分らぬが藍がゝつたすてきに意氣に見えるもので其帶の白いのが水際立つて涼しい。博多であらうと思ふが雪白の地に、黑の縱橫の縞が絣のやうに斷片的に織り出され、縞の間に同じく黑で葵の葉が大小三つばかりくつきりと浮出されてゐる、帶だけの好みで、全體の服裝が甚く引立つて、高尙に、又涼しさうに見えた

旦那のは此次

一寸三越へ行つて、ある奧樣の買物振を見て居ると、御自分のお召用にとて、これは柄が惡いの、それは地



街頭の女（帝劇の前）

味だのと、散々御批評御選擇の揚句、やつと御氣に入りのお召ちりめん一反、お買ひ上げになりました。番頭はお坊ちやんのはと伺ふと、坊やのは何でもいいから、そこらのを、單衣になる丈、切つて下さい、旦那のは又この次に買ふから今日はこれでよろしいと、お立ちになる。

ハンケチの中

小川町の停留所で、例の入替りがあつて、新しく乘客の視線を一つに集めたのは、こゝで乘込んだ二十歳ばかりの婦人であつた。自分で結んだ廂髪も、これは大分念入で、櫛といひ、笄といひ、よく配合を得た色取である。縞お召の上品な柄の單衣に、絽縮緬の羽織、帶は繻珍でもあらうが見えぬのは、帶の前に兩方の手でハンカチーフを持つて居るからで、そのハンカチーフには何を包んであるか、見ては笑ひ、見ては笑ひ、さも嬉しさうに見える。丸髷でないから、奥樣とも令孃とも、ちよいと見分はつかぬが、美しい顏に奥床しい所のあるのは、何れ身分のある人に相違はない。けれどもそのハンカチーフのうちには、何が包まれてあるか、殆んど顏の相格を崩すまでに、嬉しさうな顏をして、頻に笑を通はして居る、戀人の寫眞でゝもあらうかと、乘客がお互に目と目とで評判して居つたが、ハンカチーフを除けたところを見たら、可愛らしい仔犬であつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鏡花好み

士官學校の横町から、家路へでも歸るらしく、足を早めに來かゝつた十七八の娘さん。水際立つて美人といふ程ではないが、久留米の十の字絣、肌衣には緋ぢりめんの襟をかけ、唐縮緬の帯をし〆、薄い鴇色の帯上げも唐縮緬、髪は品のよい桃割に、白い丈長をかけ、花櫛をさし、黒塗の木履を穿いて居た。色は白く眼鼻立のそろつた品格もあり、愛嬌もあり、名家の令嬢といつても恥かしからぬ風采を備へて居た。鏡花さんの好きな女といふのは、こんな女をいふのであらうと姿が見えなくなるまでふり返つて見て居つた。

お内儀さん

觀音様行らしい、四十格好のお内儀さん、毛手柄の丸髷。おぼろしまのお召の單衣に、絽と繻子との晝夜帯をしめて、小粋な女であつた。乘ると直ぐ、「切符をおくれ」と車掌に渡す、車掌は金を受取つて鞄の中に入れ、回數乘車券のお客があるやら、一時にどや〳〵乘車したものがあるやら、その方へ氣を取られて、お内儀に切符を渡すのを、グズ〳〵して居ると、お内儀は血眼になつて「何んていふ横着な車掌だらう、金を取つて切符をくれぬ」とブツ〳〵いつて居る、車掌が「ハイ切符」と差出すと、この横着者奴がと言はぬばかりな顔付をするのであつた

あらお京さん

鐵砲洲のお稲荷様の晩だつた。「あら、お京さん」と若々しい女

街頭の女（愛宕山の石階下）



の聲に氣を引かれて振向けば、十七八のさつぱりとした洗ひ髮、銹色にスッキリと白で拔いた枝垂れ柳がなよ〳〵と、高く背負つたメリンスの友染は、紅の勝つた亂菊模樣、白い頰に片靨を寄せて兩の袂をかついだところ。カンテラの油煙にまみれた植木やがジッと見惚れて立すくむだまゝ、「オイあつちのダリヤは幾何だい」と背を叩かれたも無理ならぬ。

居眠り

私はじつとうつむいて雜誌を讀みながら時々眼を擧げて前をみる。恰度私のまんまへに腰かけて居るのは二十二三の髮を無造作なローマに束ねた女で、紫がゝつた明石縮の矢絣りに鼠地のゴブランか何かの帶を胸高にしめたのは宜いが、先刻から頻りに居睡りをしてゐるので、クリーム色の絽の半襟のかゝつた胸がだらし無くしだれかけて、あたら白い肌を惜しげもなく埃にまみらせ、帶にはさんだ金側の十三形がだらりと鎖でとぶら下つてゐる。透いてみえるとき色の長襦袢も汗のためにベタリと足にまつはりついて、ぐたりとくづほれる度に持つてゐる包みを落しかけるのを狼狽てゝ押へる見ぐるしさ、電車の中で、居睡り丈はしたくないと思つた。

茶色の風呂敷

新富町の停留所に電車を待つた夕方の事、七八人も荒くれ男の其中に只一人交つてゐた十五六の娘があつたおとなしい桃割れに目立たない程の薄化粧をして、浴衣は白と藍のだんだらに紺の蕨を置いたもの、お粗末なメリンスの片側も濃紫の雪形に匹田をきかせたのさへ飽まで優しく、片手に下げた中元物らしい砂糖袋の風呂敷も地味な茶色の更紗形なのが却つて嬉しかつた

青鞜派の一人

資生堂からふいと出て來た二人連れ、何氣なしに見ると女は青鞜派の一人何々女史だつた。目立たない薄色のうすものに靜波織の青磁色なのをピタリと結んで、細そりとした肩、なよやかな足どり、心持首を傾げてコンクリートの銀座の町を行く、地味な束髮に二三本こぼれた鬢の毛、暗に光る中止めの眞珠白木の駒下駄

絣上布にセルの袴をつけた人と并んで左程悪びれもせず、靜かに微笑むで行く後すがたは忘られぬ一つである。

梅の春

道玄坂の植木屋を素見して歩いてゐると、蓮つ葉な調子で、「梅の春」か何か口吟みながらもぶら／＼してゐる女をみた。潮染の麻の葉に淺黃繻子の中幅物をしどけなくだらりとさせて、根下りの銀杏返しに團扇のかんざしが半分抜けかゝつてゐる。突かけた麻裏草履の紅い鼻緒に何やら印のついた所を見れば、此女何れ只者ではない、連れの男を振返つて、大きな聲をあげて笑ひながら其咬へた煙草を引たくつた。

夜更の二人連れ

夜更であつた。宮



街頭の女（淺草觀音堂の欄干に凭れる）

益の終點でおりて道玄坂下の方に歩いて居た。十二時に近かつたので通りの店は戸をおろして、冷い夏の夜の風が頰を撫でた。私の降りたと一緒に男女五六人の人が降りたのであつたが、とぼ／＼と、前後になつて、歩いてゆくうちに、私は二人づれの女に目がついた。女中らしい一人の女は包をもつて從いてゐる。三十五六歲の奥樣と見えるのは髮頭を額から二つにわけて、後は三つに編んだのを襟足に垂れるやうにむすんで、ちかちか光る玉入りの束髮櫛二枚でおさへてゐた。襟足にもたれた髮の毛の高さがいかにも格好のいゝ。此二人は店をしまはうとしてゐる鯛燒の夜店の前に立つた。夜店の翁が十枚ばかりの鯛を新聞につゝんで女中に渡した。それから二人は宇田川横町の闇の中にはひつ

て行つた。

淺草の人涙

淺草の夜の八時頃活動寫眞の六區の方は戰爭の樣にさわがしかつた。仁王門に入る仲店の前を人の肩と肩とにもまれあふやうに歩いてゐた。歩いてゆくといふよりも後から來る何百人の人の勢で押し上げられてゆくやうな時、私は光りの閃くやうに年増の女の白い顔を意識した。たゞ一瞥する間に女の姿はもう濁流にのまれてゆくやうに消えてゐた。慥に男女連れであつた。

あの粋を見せた髪の櫛あとの水々しさ。あの襟足のビイドロのやうに白く光つて見えた事、濃い藍の浴衣の襟をぬいた胸の好さ。長い髭の見事な形、私はさうくりかへしおもひながら觀音堂の前を歩いた。その夜幾千と云ふ女を見たが、それほど私を驚かした美しい女はなかつた。然し藝者とは思はれなかつた。下町の女！たゞその型であつた。

滿員の電車

電車が車坂に來たとき、騷騷しく四五人乘つた。その四人連れは十六七と、二十四五の姉妹と、姉妹の兄らしい三十四五の美髯の人と、姉の女の夫らしい二十七八の敎師風の男とであつた。時は日曜の午後二時頃。

妹娘は濃化粧に、赤い半襟の京都の舞子のやうなつくりをしてゐた。姉は瓜實顔の頤の二重にくゝれた豐滿な身體の女で、薄い單衣ごしに身體のそこゝの膨脹を微見せてゐる程肉感的であつた。四人は何か今見た事らしい話をして陽氣に笑ひ聲を立てた。人が混雜でゐて、吊皮さへも足りなかつた。ふと見ると、姉はそのむつちりした白い手を、自分よりも脊の低い夫の肩に掛けて、喋舌つてゐた。曲線路のところで、車がひどく動搖した。そのとき、女は長く腕を顯出して、夫の袖をつかんで、自分の身をさゝへて居た、溫順さうな男は無神經な顔をして外を見てゐた。此の一群は上野廣小路でのりかへた。

太陽閣の女

向島には太陽閣と云ふ旅館兼浴場がある。私が其の前を始めてとほつて、始めてさういふ女を見た。入り口

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の廣場に交番のやうな札賣場？があつた。その中に紫の服を着て、白いエプロンをかけた女が小鳥のやうにはひつてゐた。女は網のやうな窓から外をきよろ〳〵と見てゐた。暑い正午の頃で、女の見てゐる前に小犬が二疋で戯れてゐた。女は犬の遊ぶのを見て、笑つてゐた。白粉の頬の色が十間ばかりも遠い道路からきはやかに見えた。

そこを通りすぎて二三町いつた時、一臺の自動車が埃を上げて走つて來た。中には三人の盛裝した女が見えた、私には何故となく太陽閣と、その女とを結びつけた。

盛粧

芝公園の中をぶら〳〵話しながら來る二人の令孃、一人はお下げ、年は十六位で、顔付は申分がないが、支那人にでも評さしたら、顰の字をつけるであらう。縞ちりめんの二尺袖の單衣に、茶色に金絲入の本國帯を矢の字に結び、他の一人は髪はローマで、年は二つか三つ位上で、小紋ちりめんの單衣に、繻珍の帯を太鼓に結んで、二重甲斐絹の洋傘をなゝめに、人目を遮ぎる風情は、眠い眼さへも覺るばかりに思はれた。

田舎娘

泥のついた裾の短い手織木綿の單衣の上に、唐縮緬の半幅帯を締めて頭に汚れた手拭を被つた、二十前後の娘、大八車の後を押して行く、打見たところ決して綺麗ではなかつた。然し、世の中には表から見ると如何にも立派に飾つて美しく見える人が多いけれど、一度その裝飾一切を取除いて了つたならば、玉の肌に傷があつたり、腫物があつたりする。それから見れば此娘の方が何んなに自然で、汚れがなからうと田舎娘の姿を見送つて居た。

西洋婦人

其帽子から大げさだ、齢は取つてるらしいが、其帽子は黒の紗のやうな透いた編物で鍔の廣さは七八寸もあらうかと思はれ、又其上に捲いたリボンが大變で、牡丹色の幅は一尺もあらうか、それを大きく結んでゐる宛で子供の帯を頭上に載せてゐるやうだ。服は腰から

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

下は黑、上は白いシヤツのやうなものでしつくりと肌に附いてゐるが、それが夏のカーテンのやうな切地だから模樣が透いてゐる。テニスでもやると見えて恐ろしく肉づきの好い腕をしてゐて、其カーテン的の細い筒袖がこの腕までしかない、あとは全く露出してゐる最も膝の上には、上から被る上着のやうなものを持つてゐた。電車から降りやうとする時、胸の上部に吊してある金色の頸飾がキラリと閃いた。

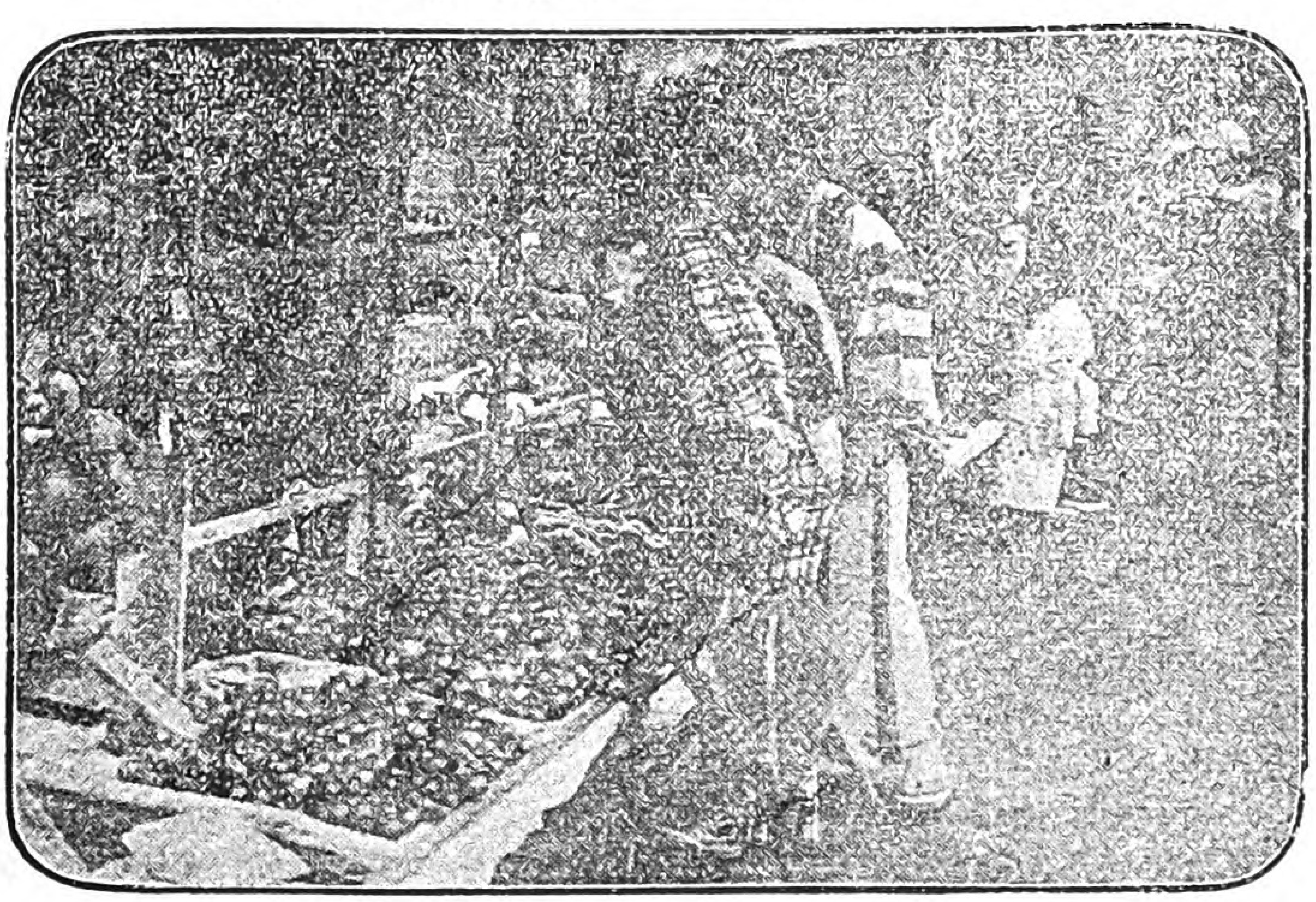
女の土方

大きな建築をしてゐる、鐵骨が組立てられて、上の方や、下の方に數十人の大工が働いてゐる。一方に十人足らずの人足が輪になつて、萬力の綱を引張つてゐる其中に交つて塵まみれの髮を束ね、丸に伊の字を大きく染め拔いたはつぴを着て、紺の股引に紺の脚胖、草鞋穿の女が居る、エンヤラサー――と掛聲の度に體に力を入れて一團の人が綱を引くと重い鐵の錘が上つて、ドサーーンと落すと杭が地中に入つて行く、女はエンヤラサー――と掛聲と同時に綱を引くと脊中に負んぶして居る嬰兒がグタリと仰向く、ドサーーンと鐵の錘が落る度に嬰兒はまたグタリと俯向く杭が地中に入つて行く

墨色の眼

新橋の板新道を歩いてゐると、或る家では呼出しが掛つたと見えて、二臺の新しい車が表で待つてゐる、少し行くと摺れ違つた五十格好の女細かい辨慶縞の浴衣に細い帶を締めて、手拭を提げて

街頭の女（瓢簞屋の前）



居る、湯歸りらしい。此の世界に見る年取つた女の特徴は其眼である、墨色の眼！といへば宜からう、眼のふちから一帶に暗色が漂ふて居て、眼の中まで薄墨色をしてゐる斯ういふ墨色の眼は決して他の社會の女にない。

街頭の女（小間物屋の前）



平凡な藝妓

洗ひ髪の銀杏返しは亂れんとして亂れず、さら〳〵涼風になぶらせてゐる。櫛も、根ざしも金づくりだが、何金だか分らぬ、根がけは翡翠の珠、紺と、納戸と、鼠色との横縞の縮緬の單に、黒とも鐵色とも云へる絽縮緬の羽織を被て、紋は雪輪に菊か何かの花。上野から新橋までボギー車の隅の空地に立つて窓から外ばかりを見て居て、一度も車中を振りむかぬから顔が分らぬ、色の白い、少し頬の痩せた二十五六の平凡な藝妓だと云ふてとだけは分つて居た。

いろは浴衣

初め見た時は普通の白地の中形で、細い花の模樣だとばかり思つてゐたが、能く見てゐると花ではない、いろは四十八文字を一字づゝ縦横無盡に隙間なく模樣に描てあるので、文字の外には何もないのだつた。着て居た人は云はぬ方が可い。

キモノ

子供の買ふ繪本を并べた縁日の繪草紙屋の前に立つて花咲爺や桃太郎をあれかこれかと選つてゐる四十餘りの一婦人、脊の高い大柄な姿で、鼠つぽい單衣に、帶

ばお太鼓にきちんと結んでゐるが、其金縁眼鏡を掛けてゐる鼻の高い顔と、無造作に捲いた金髪とを見ると日本人でないことが分る、英人か、米人か分らぬが此れだけ日本の衣服のきこなしに熟れるには餘程長い間日本に住んだ人でなければならぬと思はれた。

入湯の歸り

湯上りと見えて、滴りさうな洗髪を、簡略に束ねて、一寸櫛をあしらひ、白地の飛白の單物を、素肌に着て黒繻子と萠黄博多の帶に、緋ぢりめんの帶揚をかるくしめて、右の手に蘆柄の團扇を持つて、左の手にふるしきのたゝんだのを握りながら、天下堂へ入つて行つた。

帝劇の幕間

「何故、貴女には左樣私の心が解らないんでしやう。這麼に私は貴女の事を思ひ續けて居るのに。そりや私が斯うした浮草の女だから嘘だと思つてらつしやるかも知れないけれどもみいさん、考へて見て下さい、戀人は一生の中に幾人得られるか知れないけれど友達はたつた一人の友達は貴女きりぢやありませんか、だのに、だのにあんまりだ」アントニーの煽動が濟んだ幕合を帝劇の廊下で泣いた花さんは白地に紺で亂れ忍を染め出したメリンスの浴衣に、茶博多の帶を締めて居た。帶留のクツキリと白かつたのまで覺えて居る。

露芝の浮織

是れも同じ夜、青白いアーク燈のまたゝきに蔭をみだす堀端の柳の下に、人待ち顔に佇むでゐた奥樣姿、御納戸の金沙お召に腰から下のシツトリと透いて見えるは絽縮緬か、水に紅葉の龍田染、帶は白茶地に銀絲で薄を散らせ細かく露芝を浮織にした素振らしく粋なもので、何織かは知らぬ、細い撫肩の襟を取巻いたのは青磁に小さな撫子を五つ六つ縫つた極く地味なものだつた。鬢のほつれを掻上げやうと櫛を持て振り上げた左の薬指にキラリと光つたのは夜目にもしるき白金の細環、金足の玉簪がハタリと落ちた。

やつこ島田

あ、つうちやんが家の前を通つて行く。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今でもよく「おしいちやん」などゝ聲を掛けられて面喰ふ幼馴染のつうちやんは例のくづした奴島田、紺地に藍の市松格子に黒繻子の晝夜帶を引かけに結んでわざと素足に粹な塗下駄、鶯茶の鼻緒が白い甲にキッと喰込んで痛さう胸には相變らず紫の紐でかゞつた舞扇をさしてゐる。

「又御稽古ですか御精が出ますね」と云へば、心持吊上つた眉をピクピクと動かして、

「此の暑いのにねえ、嫌な商賣でしやう」と柔かく笑ふ。無論蹴出しは屹度水色に定まつて居る。

水色の服

ある日の四時ごろ築地から着た電車で歐米の若い女の學校歸りを思はせる二人連れを見た。一人は顔の細々した、眼の色の黒



街頭の女（シヨーウインドーの前）

みをもつた女で年の頃は二十四五、一人は十五六の少女で、水色の服を着て、ブロンドの髪を下髪にしてゐた。二人は甲の強い聲で喋舌って居る。「オー、ライ、…」と云ふ發音が高く上がる。じつと見てゐると少女の水色の服は多い襞の所は色が重なつて緑の露をふくんだやうに清々しいとても日本服ではかう云ふ淡色の水色だのオリーブ色だのは着られはしないと思ふと、羨しかつた。二人は青山學院の中の洋館にでも住んで居ると見えて、七丁目で降りた。

逍遙

大井町の伊藤公爵邸の裏を垣にそつて長く長く歩いてゐた時、花崗石の正門のあたりの路を、毛の深い西洋種の大きな犬

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を連れて、犬の首環につないだ鎖を手にもつて散歩してゐる女があつた。どこかの別莊にでも避暑の令夫人とも見られる。伊賀とらのゆつた束髮と繪葉書などに横顏の見えてゐる型の女、――さう云へば想像がつくであらう。薄い鼠色の道行コートを着て、空氣草履をはいてゐた。年の頃は二十七八の脊の高い女だつた。

畑には夏の日影が朝の涼しさを照らして居た。

ダリヤと女

高田豐川町の路次、初めて訪ねる家をさがしわびて同じ家と家との間を二三度も歩いて前にとほつた垣の曲つた角に再び出たとき、ダリヤを手にもつた女が小さい子供二人連れで目の前に歩いてゐて、思はずたちどまつた。その女は十七位の女學生らしく見えた、撫子の花をコバルトの色で出した白地のモスリンの着物に縮緬の紅い友禪の帶をしめて、薄化粧をした顏は、湯上りのやうに匂つてゐた。

『それからどうして……』から私の顏を一寸見た眼を笑はして、小さい子にむけて何か話をきゝながら歩く

黃、紅、白、五色のダリヤが重たさうな首を美しく垂れてゐた。四五間いつて、ホヽヽと女の笑ふ聲が聞えたので、思はず振り返つた。

金の指環

線の細々しい顏の硏きあげた白さをもつた頰の形がす、らつとも涼しく見える。眼の才走つた女であつた。黑い髮を髷の長い櫛卷に、粹を見せた襟のぬきざま、並の女とは見えなかつた。五六圓臺ともおもはれる靑磁色に白の總刺繡の花模樣の半襟からはつやくと光りを放つて見えた。

白魚のやうな柔かな左の指には純金の指環を一つ、その上に紅寶入りのを重ねてゐた。もみあげに落ちた毛をかきあげるとき、キラくと閃いた。電車が銀座に來たとき、二人の新橋女が乘つた指環の女の聰い眼が食ひ入るやうに二人の裝りを見入るのであつた。下山京子――さういふ女がゝうもあらうかと思はれた。

帶の透き影

道玄坂の通り、富士見橫町を、肥つた紳士に伴はれた

女が町の方に出た。丸顔の柔順げな人で、左の足の不自由な人であつた。財産家の一人娘、見るとすぐかう云ふ想像が、私の胸におこつた。お召の單衣に、立派な丸帯をしめて、紗のやうにうすい夏コートを着てゐた。紗のやうなコートは遠くから見ると薄絲りに見え太く二筋かたまつた縞と縞との間の地は、下の帯の模様の花菱に織り込みにした金絲の強い光が、透いて見えるのであつた。夫婦であつたであらう。肥つた紳士は待ち合せるやうにして歩いた。

『こゝが道玄坂でございますか』と云つた女の聲は弱々しかつたが喜びにみちてゐた。

讀書のゑみ

朝八時の電車は滿員であつた。外には小雨が降つてゐたので乘降りの人はわづらはしい思をしなければならなかつた。丁度私が濡れた傘を持ちなやんで、吊皮に手をかけて搖られてゐるのと斜向に、腰をかけた事務員らしい女の横顔が見えた。銀杏返しにゆつた前髪には癖があつたけれども、顔は底白い、切の長い眼をしてゐた、深く首を垂れて膝の上に開けた雜誌をよみふけつてゐる。行を走る眼が繁く動いて、我れを忘れて書中の人になつてゐる。その雜誌は演藝畫報で、女は歌舞伎座の替り狂言の批評をよんでゐた。それとなし女の表情を見入つて、自分の無聊を慰めてゐると、女はある時につこりと笑つた顔をした。何が面白いのであらうと思ふと自分もさそはれて頰で笑つた。

女は尚熱心によんでゐた。



街頭の女（新橋驛前）

脚胖菅笠

かつと夏の暑さが銀座の空にも充ちた。カフエー、ライオンの前に何十人となく立ち止つて電車を待つ男女は、白い扇をはたくくと動かしてゐる。アスフハルトの上に反射の光が煙りのやうに上る。午後二時頃であつた。黒い脚胖に草鞋ばきで、白い菅笠を頤にむすびつけた、色の淺黑いがつしり肥つた身體に、絣の木綿の單衣をきて、裾をはしおつた女が二人、すたくくと男のやうな大股で歩いて來た。嫋な都人士の中にこの强健な女の肉の生々しさを見た時は、胸が晴れるやうだつた。房州の女だらうか、――それとも遠く伊豆大島あたりから來たらうか。二人の女は田舍の土を蹈んでゆくやうな大股で店の飾窓を見ながら歌舞伎座の方に歩いていつた。

混血種の女

日比谷の交叉點の午後四時頃、日比谷美粧倶樂部の前邊から二人の女が停留所に來た。一人は普通の令孃であつたが一人は混血種の女であつた。横濱あたりで見ればさほどに見る人はないと思はれるが、この女を見返る人が多い。赤髮の柔い縮れ毛を額から二つに別けて花帽でもいたゞかなくては見られないと思はれる程髮がベッタリしてゐた。縮緬の友禪の單衣に、羽二重の帶を高く結んで、白い洋傘をさしてゐた。可成多くの人に眼を注がれる中を惡びれもせずに、電車にのつて巣鴨の方に去つた。

風呂敷包

新婚らしい丸髷の人であつた。けれども質素な服裝をして銘仙の單衣の袖を膝に重ねて風呂敷を置き伏目勝につゝまやかに電車にのつてゐた、豐かな頰をした溫かい眼元の優しい女であつた。此の女の隣りには勤め歸りのやうな十四五の少女がその營養不足の血色の惡い顏をガックリと垂れて居睡りをして居つた。だんだんに少女は身體を支へきれずに、となりの女の肩にしなだれていつた。丸髷の女は、じつと耐へてそれを負ふやうにして、五つ六つの停留所を、密着いたやうにしてゐた。終點についた時、少女は眼をさましたが、

丸髷の女には氣もつかずにヒョロ〳〵しながら降りてゆくあとから、風呂敷包を抱へて、靜に女も降りた。

涼しい聲

紫地の小紋の袷に、蝶が澤山飛んで居る形の襦袢の袖を連ねて、褪紅色の地に黒つぽい、筬が出て居る帶を締めて「私、團の娘でございます」とふつくりした頭をお下げになつた時、細い白金のピンが一寸見えた色白の眉の美しい方で、お聲がはき〳〵としてゐらつしやる。お母さまは、華奢骨細の愛くるしい、服裝は至つて地味な木目形の大島に、繻子と博多との派手でない色氣の晝夜帶を小さく涼しさうに結ばれた姿、爽かな何處となく品のあるお聲で、ものを仰有る。

熟睡

納戸地の浴衣に、赤の鹿の子絞りの兵兒帶を猫ぢやらしに結んだまゝ、窮屈な乳母車の中で、眞うつむきになつて熟く睡つてゐる。車の中には人形のさすやうな洋傘が一本ある丈け、木蔭の多い靜かな邸町の朝で、周圍には人が居ない、此子供は恐らく盜まれても知らぬやうに熟睡てゐる、當年二歳ぐらゐな此も街頭に見たる女の一人。

孔雀の如く

日比谷の交叉點で巣鴨から來た電車から三人の女が降りて、線路を横切つて帝國劇場の方に歩いていつた。一人は女中と見え、何かの包を手に載せてついて行くその先に二人は並んで何か話しながら笑つてゆく。脊の高い女はコバルト色の葉の模樣の白い友禪の單衣の上に藤薄色の透綾の道行コートを着てゐた。髮は髱の長い女優髷か何かで水色の羽毛のやうな簪をさして居た。一人は肥つた肩の廣い女で黒つぽいお召に白い羽二重の帶をしてゐた。藝者でもなく令孃でもない。矢張女優と見るより外はない、警視廳前の廣小路をこの二人は孔雀の歩くやうにしてゆく。

新橋前

新橋カフエーでアイスクリームを飲んで、橋を渡つて驛の方に歩いて居た時、私の側を、子供を連れた若奥樣が矢張停車場にゆくらしかつた。別に用がないので

この二人連れを見送つてあげてもいゝやうな氣持がして、私も驛に入つた。

夏でも構内は薄ら暗いプラットフオームに今丁度横濱からのがついたところで、何百人と云ふ乘客が押し流れるやうにプラットフオームを通つた。脊の高い外人の觀光團らしいのが七八人もキヨロ／＼としながら來る。その群の女などは水色の夏服に、雪よりも白い花帽の姿で改札口に近よつて來る。

私が一緒に來た丸髷の若奥樣と海軍帽の男の子とは手をひいて改札口に近いところに立つて居た。この二人は主人の歸京のお迎へであつたのである。改札口を出る人が殆んど盡きた時、洋服の若い紳士が微笑しながら來るのであつた。此の樂しげな家族はやがて驛を出た。話をしながら町に出て新橋勸業場で玩弄品を買ひ求めて上野ゆきの電車に乘つたのをそれとなく見送つた私は、ウオーサイドを歩いてゑり治にいつた。店には三四人の娘が流行の半襟を選んでゐた。

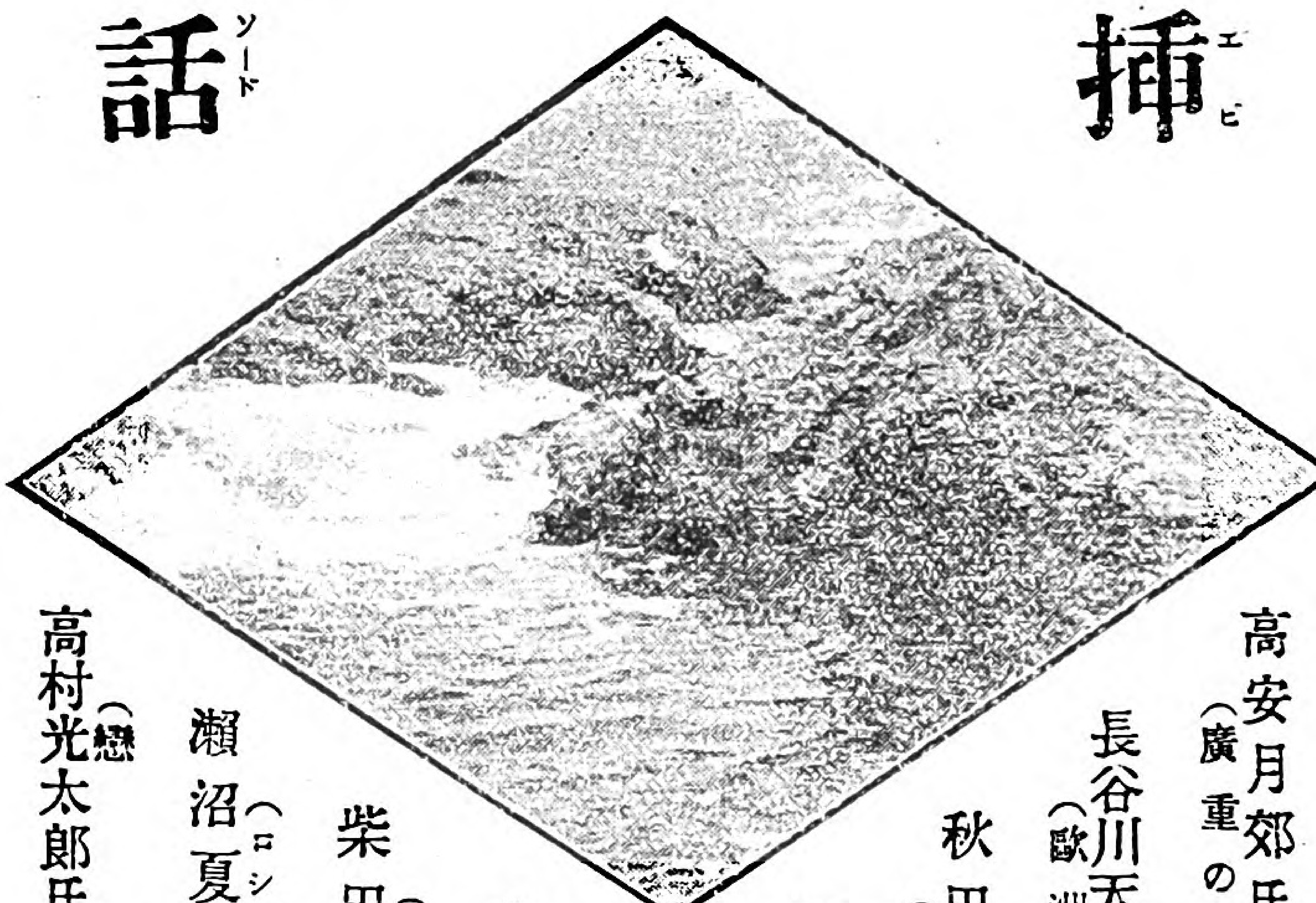
〜〜〜〜〜〜〜〜 女五十人終 〜〜〜〜〜〜〜〜

巷の涼風

▲女の夏羽織が流行すると、今度は女の紗のコートを着る人が出て來た▲數寄屋橋公園は八月中旬に出來上るさうだ▲品川砲臺には女四十八人男五十一人住んでゐる▲新橋停車場に發着する旅客汽車の數は毎日各四十六回だから發着合せて九十二回の汽車が出たり入つたりしてゐる▲又此乘客の數だが、七月十六日一日の分が乘車客一萬四千五百十四人、降車客一萬五千四人、ざつと三萬の人が乘降してゐる▲本年七月に入つて第一の暑氣は十六日で八十六度九、但し東京に於て、▲東京で募集した松竹會社の女優試驗に應じたものは八十三人▲東京の電車は一時間八哩の速力しか出して居らぬ、大阪は十二哩だ▲松蟲鈴蟲ちんちろりんと啼く蟲のころ／＼を賞翫する爲め東京市中で賣れる蟲の數は一夏に凡そ四千萬疋、此金高四萬圓に上る▲全市で女髪結の數は約七千人ある、其内一千人は淺草だ、淺草が女の巷であることは此を以ても分る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

挿話（エピソード）



▲廣重の繪――海岸の話　（高安月郊氏）

『高安』と電燈の出て居る邸宅の門を這入ると、入りがしらに九歳位の絣の單衣を召した坊ちやんが同じ年頃の子達二人と一處に遊びに出やうとする處、樂しさうなニコ〳〵した顏で門を外に出ると、一人が『高安さん』と呼びかけて何か無邪氣な御相談をはじめてゐる聲を後に聞きながら呼鈴を押した。

　應接室は涼しく清められた前栽を前にして簾がそよそよと動いて見えた。右の方の壁に沿つて大きいピヤノが備へ付けられ、楣間には大小の額がいくつも掛けられてある中に、もつとも大きい額には、伊太利の花賣少女の清艶な立姿が、室を見おろして居た。

　初對面にも拘はらず高安樣は、いろ〳〵お話をして下さつた。丁度京都の夏のお話をと思つていつたのであるが、それは中央公論に書いたから別の事がよろしからうと云はれた。それで京都の女、京都の郊外の風景などから伺ふ事が出來た。

私は京都には殆ど十年間暮して居たので、今では京都は故郷の感がします。京都にゐた頃は友人とよく京都の近郊を歩きました。然し夏は京都に入る人よりも須磨明石の海岸に行く人が多いから、淋しいと云ふ程ではないが、京都は春や秋のやうな事はありません。今は雑踏する海水浴場となつて明石も舞子も、その海岸は日ましに昔の趣が失はれてまゐりますが、然し矢張東京附近の海岸とは比べものにはなりません。東京附近の海は汚くて不可ないやうです。一帯に關東は海が綺麗でないやうです。私は一度伊勢の津の海岸に遊んだ事がありましたが、其處でもゝう海の水は汚なくて、入ると身體に砂が附着いて心持が惡かつた。どうしても日本で海岸の綺麗な處はあの内海の淡路を沖合に眺める明石あたりであらうと思はれます。

明石で見る淡路島は實にいゝ色で、京都の東山を眺める風景よりも、眞の山紫水明は明石からあの島の朝の色を眺めた方であらうと思ひました。あのあたりが漁村ばかりであつた時はさぞよかつたゞらうと思ひま

すが汽車が出來てからは人家が立てこんで折角の海岸を昔のやうに見る事が出來ません。

斯ういふお話の間に玄關の開く音がしたので、手をお叩きになつた。やがて下女が薄い二封の紙をそこに置いた。封ごしに木版らしい下の繪の色彩が見えた。

『是れは涼しい夏むきの繪です』

と云はれて二つをお開きになつた。それは、盆栽を見る美人の繪で歌麿のであつた。今一つは、廣重の品川の宿の風景であつた。その繪を見ながら木版畫のお話にうつり、廣重の藍色や、歌麿の畫の線の美しさなどをうかゞつた。

かう云ふ人の畫いたものは畫いたそのまゝの繪よりも木版にしてからのがいゝやうです。日本の木版はさういふ處にすぐれて居ります。と云ふやうな事を語られた。

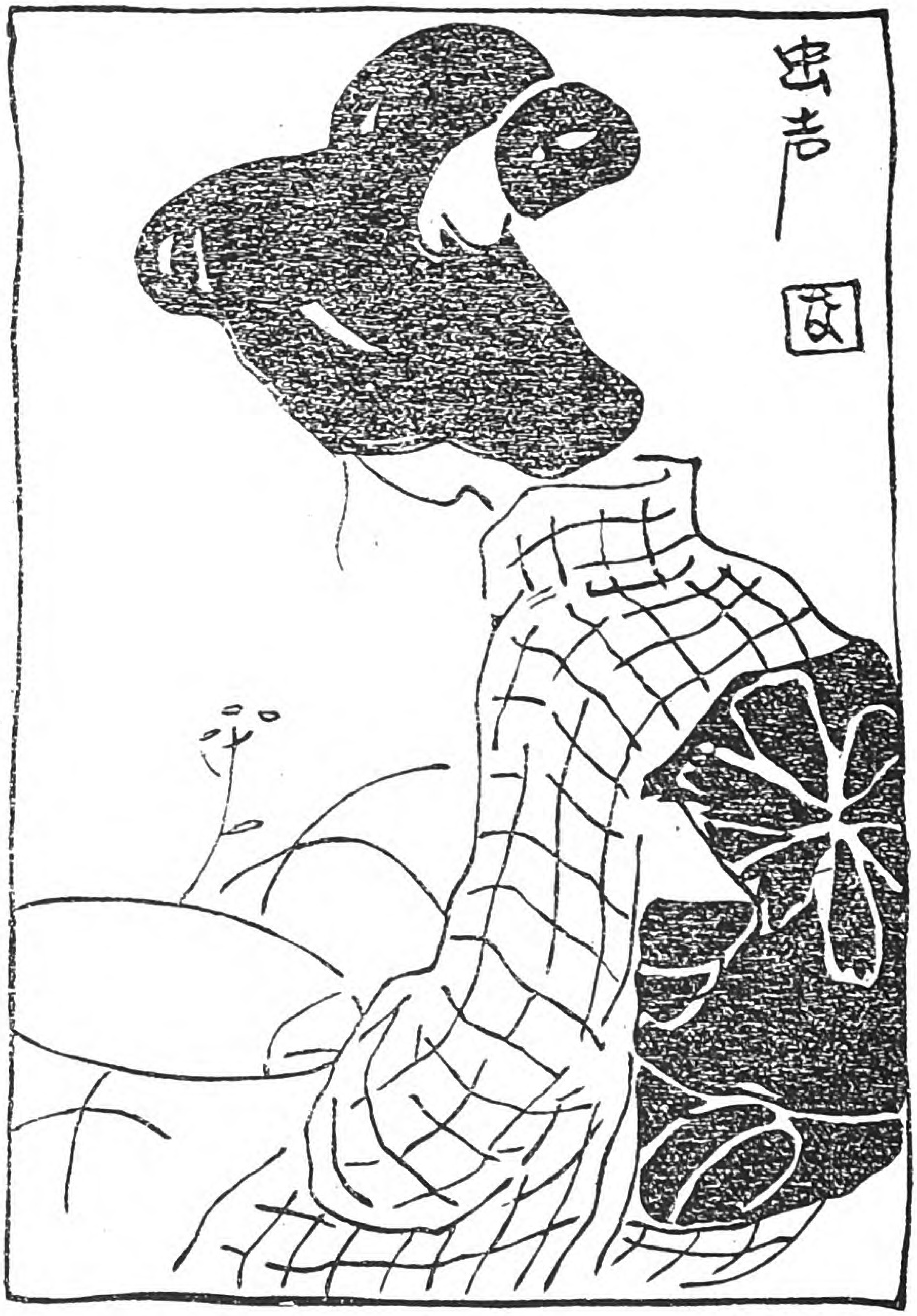
▲歐洲の夏――ヴェニスの話　（長谷川天溪氏）

歐羅巴の夏は日本のやうに暑くはありませんよ、英

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

吉利でも獨逸でも、夏中丁度今日位な氣候であつた。それで夏だからといつて日本人がうすい單衣を着るやうに暑くはない、日本だと一年には三種類の衣服が必要であるが、歐洲人は夏でも同じ洋服で通す事が出來る。自然衣服萬端は歐羅巴の方が經濟です。日本で夏に着る衣服だけではあちらの夏は寒い。

然し歐洲人は夏になると氣の早いものは五六月頃から避暑に出かける、避暑といつても實は遊びに出て行くやうなものであるから、九月頃になつても、これから避暑にゆくといつて出掛ける人もある。



然し避暑地は決して日本の避暑地のやうなものではない。娯樂機關も備はり、避暑地の町といつても、銀座の通りよりも立派である。歐洲には便利のいゝ事が多いが避暑にゆくにも亦便利に出來て居る。多くの避暑客の集る瑞西邊では、一家をあげて避暑に出かけて來た人が其處で一戸を借り受て、更に避暑客を宿泊させるやうに出來て居る、かう云ふ人達をあてこんで、夫婦に下女、旅客二三人をいれる位の頃合の家が多く建てられてあるのを見た。知つてゐられる通り瑞西は山と湖水の風景にとんだ國で隨分名高いが、私

は瑞西よりも、蘇蘭土の田舎が好きであつた。瑞西も普通の旅客としてゞはなく登山の仕度でもして、高山を分け登つてみれば、仲々よからうとも思はれるが、私の漫遊した程度では蘇蘭土の方が古風がそのまゝ殘つて居るのでよかつた。川を遡る舟なども、隅田川に見るやうな小さな蒸汽船であるし、馬車も、馭者が赤い服を着てゐたりして、すべて文明式になつてゐないところが氣に入つたのである。

水の都と云はれるヴェニスにゐたのはさう長くはなかつたが、こゝも中々面白いところである。ヴェニスは昔、侵略された人種が逃げて來て、天幕生活をしたのが始めであつたので、家の下は岩層であるからそれほど水に腐蝕される虞はない。家と家との間は路次のやうな水面を、ゴンドラが通るのである。ゴンドラは四人のりも六人のりもあるが普通は小さい二人乘りでそれを漕ぐのは一寸日本の舟の櫓と似たものを使つて軒下につける。

お話の多い長谷川樣に、歐洲の夏、ヴェニスの話を伺つたばかりではない。英吉利、佛蘭西、亞米利加を漫遊中の見聞、白皙人種の中で、一人一人見ると日本人はさう色黄くないが五人十人と集ると色が重なると見えて、まつたく黄色く見える。歐洲人が yellow と云ふのも無理はないと云ふ事、また西洋人の皮膚や頭髮や、唇についての樣々の感想を伺つた。

▲戲曲『林務官の子』―能狂言の話（秋田雨雀氏）

家が建つ建つと云つても雜司ヶ谷鬼子母神の邊はまだ〳〵森に圍まれた村との感じが深い。なだらかな丘の上に建つてゐるヌーボー式の別莊らしい建築や、少し遠くはあるが女子大學の晩香寮の玻璃窓が白く見える等、何とはなく腦の靜肅になる景色である。あの『幻影と夜曲』の作者秋田さんのお家は、その雜司ヶ谷の奧の靜かな木立の中にあるのであつた。

愛嬌の好い奧樣が二階の窓を開けて下さる。それは丁度私が戶外を見晴したいと思つた時で、椅子を進めて下さるので、そこから眞直に見える鬼子母神裏の寺

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の棟、森の頭を眺めて快い心持であつた。久しぶりにお眼にかゝつた秋田さんはお變りもない。近い頃にお書きになつたものを伺ふとその筋書を話して下さる。それはかうであつた『林務官の子』と云ふ題で、北國の溫泉宿で、林務官の子息が、溫泉宿の若い娘と戀におちて、情死をとげる。二幕物で舞臺面は溫泉宿の二階はかう見えるやうに、山や谷がかう見えるやうにと手をませて説明して下さる序に、一幕目に出る溫泉宿の溫泉祭りの踊の事からその唄の話になつた。其の時秋田さんは『鳥城誌』と云ふお國の鄕土雜誌を出してその唄をさがし出して見せて下さる。

唄の話がいつの間にか文藝協會の問題、新劇團の事先達、牛込の演藝館であつた試演の話などに移つていつた。二三日前ホトヽギス主催の能を見にゆかれたさうで、能狂言の「ぬけがら」と云ふ筋を話して下さる。太郎冠者がねむつて居る間に鬼の面をつけられたのをそれとも知らず水鏡を見て、いろ〱狼狽する等、見るやうに話して下さるので聞きながら何度も笑つた。

家の前に長唄の師匠の家があつて、止み間なく三味線がさわがしい。あの三味線を聞くのだから神經衰弱になると云はれる、歸りは御家族で玄關に見送つて下さる。

▲旅のアルバム―赤城山の話（阿部次郎氏）

阿部樣は聽き上手の方であるとおもつた。何かうかがはうと問題をきめて、可成り遠い大井町へ半日がゝりで行つても歸りには何一つ伺はずに却つて自分がいろ〱聽いていたゞいて歸つて來るのであつた。東京の南の明るい氣持のする森のそばのお家で、枝折戸を内からあけて下さると、庭には赤い西洋草花の鉢があつた。木の多い庭は自然陰が涼しく落ちて、しんと晝でも靜かな一日を讀書にお耽りになるには恰好な處と思つた。哲學書の多い部屋の机の上には獨逸の雜誌が二冊、それに今月の『藝術』『劇と詩』『白樺』などがつまれてあつた。雜誌のお話をうかゞふ。うかゞつてゐるつもりで自分がいつか聽いていたゞいて居た。話の何

かでアルバムをお出しになつて旅の繪葉書を見せて下さる。前年の赤城の旅のお話をうかゞふ。本を讀まうとおもつていつたのですが。さわがしくて駄目でした。部屋の間に壁がないので話聲がきこえて靜でありませんと云はれる、赤城旅館の二階の端の窓をこゝに私がゐましたとお云ひになる。山裾のおだやかな野に、牛や馬の放し飼の繪葉書を開いてこのあたりにこの宿がありますと云はれる。數多くの繪ハガキを一々短い言葉で説明して下さる。平塚明子さんは此頃赤城にいつてゐられる。きつと此の繪にある長い草の生えた野の牧場をあの袴の姿であるいてゐられるのであらうと思つた。

鎌倉、高野山の旅、比叡山の數日をうかゞふ。四時間ばかりおじやまして、歸りは東京に用のある序といつて、一緒に家を出られる。宏大な伊藤公爵の邸宅を左に見て、田圃の路を立會川に出た。電車にのつても樣々のお話がつゞいたが、矢張、私が話をするのを聽いて下さる事が多かつた。

▲凝念法――髮上の話　（中村春二氏）

二階の客間は開け放つた欄のむかふに、秩父の連山を薄紫色に見るのであつた。晴れ切つた高い空の下に、雪を離れた綠塊の富士が秀でゝ見える日を思ふと羨しい程いゝ郊外生活であつた。かういふ處で成蹊實務學校と云ふ少年養成の一風かはつた學校を經營してゐられる池袋の中村樣を訪問した。

御挨拶がすんで樣々の話にうつる。新しい女の問題もあつた。中村さんは、私は今の新しい女に贊成はしないものであるが、眞の新しい女、また眞に自覺しやうとする女の方には味方とならうと思つてゐると云ふお話であつた。

私にはかういふ意見があるのです、昔は女の子には男の子の元服のやうに髮上の式があつた。此の髮上の式のやうなものを、今の女學校の卒業生に行つたらいいであらうと思つてゐます。女學校を卒業した女の人は髮上の式のやうにこれで家庭にいつでも入る事の出

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

來る女と云ふ祝をして、今までに學んだ事を、習字なり、作文なり、また談話なりをその席で見てもらふやうにする。さういふ會が年々方々に開かれて、其の會が結婚する人々の選擇の機會に使用されるといゝと思ひます。

　と云ふやうな意味を語られた。お話しの後で凝念法の事をうかゞふと中村樣は、それでは手をあげてかうするやうにと云はれる。云はれるまゝに兩手をまつすぐに、二寸ばかりの間隔を保つて延ばしてゐると、その手が段々合つて來ますと云はれるので、さう云ふ事もあらうかと三四分の間つゞけてゐると合つて了ふ。今度は同じやうにして、手を延ばしてその兩手が開いてゆくと云はれるので、それ程の事もあるまいと思つて居ると、二三分で、からりと開いてしまふ。其の次は兩手の指を開いて接近させて、だんだん指が組んで離れませんと云はれるので、見てゐると指がぐん〳〵と組まつていつて、離さうとしても離れない。もう離れますと云はれて離して見ると本當に離れて笑つてしまつた。



一番後で心を丹田に据ゑると云ふ事を私が云ひ出して、靜座させていたゞく、五六分もしてゐる間に下腹部が快ろよく重く据つて、上半身が微動してたまらなく樂しい氣持がした。かう云ふやうに身體を落付け、心を練つて實生活とたゝかつてゆけば決して元氣を失ふ事はあるまいと思はれた。

▲簡易生活――新しい女の話（柴田流星氏）

番町の武者小路實篤氏の黒い門の前の路を左に曲つて數間ゆくとさらに右に折れて、柴田樣のお玄關を伺ふ。その時は丁度五時少しすぎた日曜の午後であつたお客來のやうで談話の聲がもれてゐたので、名刺を通すだけでもと思つて訪ふと、奥樣が見えて、晩方にと御傳へ下さる。

其の間大橋圖書館で時を消して七時になる頃に伺ふ十一二歳の坊ちやまの案内で御部屋に通つて初めてお眼にかゝつた。若い女の讀書と云ふやうな事をおねがひをして見る。直ぐ樣と云ふ譯にはゆかないので、簡易生活について伺ふ。文明の壓迫に對していかに生活しやうかと考へる人は、どうしても簡易生活を思はずにはゐられない。簡易生活の飜譯は最近に文部省から出版されて居るものがある。あの書物は若い婦人が讀む良い書物の一つであらうと云はれる。

新しい女の問題は如何でございませう？と流行の座談の問題を出した時、柴田樣は笑を浮べながら語られた。私も亦世間の人と同じく新しい女は厭です、しかし本當の新しい女は嫌ではありません。女の使命を知つて、女でなければ出來ぬ仕事をするのが本當の新しい女である。さう云ふ新しい婦人が日本に出る事はいい事であるから、どうかさう云ふやうな女が出て來てほしいものです。

らいてう女の『圓窓より』に對する感想もうかゞふ、二時間ばかりでお暇をした。

▲露西亞の菓子――猶太の女の話（瀨沼夏葉氏）

露西亞の若い女と申しても一樣には云へないので、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

元來露西亞は人種が樣々になつて居ります。純粹の露西亞人はスラヴ人種で、征服されたポートランド人種を始めに猶太種もあれば、アリアン人種との混血種もありますから、人種によつて樣々その氣風もちがつて居ります。スラヴ人種の婦人にも日本の婦人にあるやうな、それは〳〵内氣な小膽な、顏も得あげないと云ふ女もあります。私が滯露中にも、田舍から來たと云ふばかりの下女が、一日うつむいてものもよく云はない、何か問はれると赤い顏をするやうな女であつたので、露西亞の田舍娘も、日本の田舍娘もよく似てゐると思つたりしました。



　數年前に首相暗殺の事件があつた時、若い婦人でそれに關係したのもあつたと傳へられて居りますが、さう云ふ過激な婦人はいつでも猶太の女であります。これは露西亞ばかりには限りませんが、殊に露西亞には猶太が多く住んで居て、猶太と、スラヴ人種との間は永年の暗鬪があります、猶太人が露西亞でどういふ待遇をうけてゐるかと云ふと、同じ五錢十錢の金を拂つて電車にのつ

ても猶太人は車の外に立たせられます。もつとも猶太人も輕蔑せられるになれて、服裝も汚いのでありますが、劇場なども、國立劇場などは猶太人を容易に觀劇させる事がありません。路を通つてゐても追ひ退けられたり、唾をかけられたりしますが、猶太人は、默々として、唾をふいて何も云はずに通ります。しかし猶太人は金持で、金から爭へば決して、スラヴ人種にさうおくれはとらず、殊に音樂などにはすぐれた大家が猶太人から出て居ります。

かう云ふ事情のもとにある猶太人は折さへあると過激な事をするので、從つて猶太の女も其の陰謀に加はるのがあるのです。小說や劇には猶太の女と、露西亞人との事などを書いたのもありますが、一旦露西亞人と猶太女とが結婚すると、女はその親から永久に見離されて臨終となつても面會をしない事となり、男は一般の露西亞人からとほざけられると云ふ譯になります此の頃『靑鞜』に譯してゐるチエホフの『イワノフ』がその狀態をよく現してあります。

猶太の女の顏はよくわかります。はじめて露西亞にいつたものでも二三ケ月でどんな立派な服裝をしてゐても區別します。顏の輪廓が中高で、鼻の形が一種特別に尖つて、一寸鷲鼻のやうに曲つてゐるので、一見して知れます、髮が黑く、瞳の色も黑い、日本人に似たところがあります。

瀨沼樣を中野にうかゞつて、露西亞人の生活、猶太人の女、露西亞の文壇、浦鹽に住む日本の女の事などを伺ふ事が出來た。卓に椅子を添へた應接室の床の間にはギタルラ(露西亞の樂器)が立て掛けられ、室の隅にはピアノが置かれてゐた。チヨコレートに似た露西亞の菓子を、これはあちらから送つて來ましたから召し上れとおすゝめ下さる。芳香のあるいゝ味のお菓子であつた。これも露西亞から來たものですからと、露西亞の反物サチン、バチスト、さう云ふ珍しい布を見る。露西亞染めの裂けるまで洗つても色の褪せないと云ふ更紗に似たその布の紅い色はきはめて鮮明だつた二時間ばかりで歸りにはわざ〳〵柏木の停車場までお

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見送りをうけた。

▲戀愛――結婚の話　（高村光太郎氏）

戀愛の本質に對しては、到底一寸云へない。たゞ極く要點をお話するだけである。戀愛は本來の眞を持つた其人が異性にあつた時、異性が自分に或る影響を及ぼす力、自然に發する自然力であるから、人間の手でどうする事も出來ない。昔から人工的な道德や、今日から見れば罪惡でゞきてゐた世の中にも拘はらず、どの時代にも戀愛に對する物語が殘つて居る。其の時代の道德に反してまで戀しあつた人達の話がどつさりある。如何なる世にも戀愛だけは眞であつた。またさうでなければ存在しなかつたに相違ない。世の中のすべてが戀愛の如く、動けばいゝ。戀愛だけには人工的な理性が加はらない。昔からたつた一つ、人間の姿が生き〱して出て來るものは戀愛である。戀愛と云ふものは罪惡だとか、人間の精力をつぶして了ふとか、危險なものだとか、盲目なものだとか云ふ風に解釋するのは皆功利的な解釋の仕方である。戀愛は毒害だと云ふ女が亞米利加にあるが、これなども亞米利加式の考方である。すべて人工を貴んで晝間でも日光をさへぎつて電燈を喜ぶ位な亞米利加の家庭では、そんな考が起りさうな事である。太陽をよろこぶ人間のある間は幸にして戀愛はいつまでも美しい。自然力の暗示を持つてゐるのは戀愛である。

だから若し眼をさましたと云ふやうな人が自分にある影響を與へる、滿足し得る異性に逢つた時、そこに純粹の戀愛が成り立つと云ふのは當り前である。

戀愛と云ふ事を結婚に終るとか結婚すれば戀愛はなくなるとか云ふ人があるが、それはもう昔の世の中には通じたが、僕等の魂には、自覺しない言葉と思ふ。戀愛はくづれる時にはくづれるかも知れない。然し望がかなつておしまひになるとはバイロンだの、シエレーだのゝやうなローマンテーストの生きてゐた時代の事で今の時代の人にはあてはまらない。むしろ戀愛は結婚すれば猶更強くならうと思ふ。消えるなどゝ云ふ

事はある筈がない。然し其の結婚は單に世間的の形式に從はなければならないと云ふ譯のものではない。外に現れる形式等は個人の便宜にある事で、問題となすべきではないと思ふ。

高村様を畫室にお訪ねした。右の話は、其の折にうかゞつたものゝ一部分である。外國の朴野を見るやうなとある人がこの新築の畫室を形容してゐたが、然しどう云ふ文字を使へば、あの畫室の感じを、見ない人に傳へる事が出來るであらう。壁は明るい心持のする鼠色であつたストーヴにつけた太い管が天井を横に延びて外の方に出てゐた。赭熊にゆつた遊女の顔の油繪若い男の石膏の胸像、さう云ふものが、多くの器具とともに棚に並んでゐた。見廻したところには紅い色のものは見えない。畫室の掃除が中々大儀ですよ。今日は少し片付いてゐます。見習に來た下女が掃除をしたのですと云はれる。室の隅の瓦斯にかけた湯が音を立てると、持つて來てお茶を入れて下さる。夏には御旅行をなさいますかと伺がふと、いや今年の夏は、多分出ないで、出來るだけ仕事をしやうと思つてゐますと云はれた。

〜〜〜挿話終〜〜〜

片はしに

花世

お訪ねをすると直ぐ逢つて下さる時は、いつまでも忘れる事が出來ないと思ふ程嬉しいのでありました。此の次の何時の日の何時頃にと返答をして下さるときは、その日を賴みにして待つ心がたのしうございました。自分の仕事と、自分の生活とを一緒になひませてゆかうとする私は、私が心から崇拜してゐる人達をお訪ねして、二時間、もしくは三時間の間、私の心に、大きくいへば私の生命に影を投げて下さつた事を感謝しないでは居られないのでありました。親しくお眼にかゝつて、直ちに耳や眼に、日頃畫いた幻影が眞實に光つて見え、心が震へるやうに興奮した幸福を思つて來ると私は、「挿話」にその光る影や、快よい話に震へた心持を、僅かも表し得なかつた事が思はれて殘念でならなくなります。私はたゞ談話の線だけをたど〳〵しく書きうつしたばかりでありました、書いたものゝ上にあらはれた人格に觸れる——それ以上に親しくお眼にかゝる事は、何と云ふさいはひでありましたらうか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

曇つた日の林

水野葉舟

林の中に入らうとする前に、小さい植木屋の苗畑がある。その垣根際に、前から自分が見馴れて居た太い幹の厚朴が立つて居る。自分は第一に、この木の前に立止つてしまつた。厚朴は白つぽく鞣された柔かい皮が強い彈力を帶びて光つて居る。この曇つた乳色の重い明るさの中に、薄く廣い葉は黄を含んだ爽かな淡綠色をして際立つた「白」の感じを見せて居る。何處迄も靜かな優しさを慕つて居る。

　この木を見て居る中に、自分の心はすつかり昂奮して、目に見えるものに一つ一つ鋭く觸つて行くやうになつた。足が踏まうとする道には草がある。身體には極く緩い氣流が重つくるしく觸る。林はこの道をはづれた處から、すぐ接して立つて居る。

　林の中に入ると、自分は、目に見える木と草とで、靜かに考へる事が出來なくなる程であつた。自分は無數の目が一時は、この一つの身體に集つて來て、心が波立つて來るやうであつた。

「總てのものは美しい。」自分は贊嘆した。自分は心を一つに集めやうとして、林の中を一條通つて居る道を歩きながら、兩側に群立して居る木に言葉をかけた。

「總ての生は美しい……この總て違つたものが幷び立つて居るのが美しいと同時に、その一つ一つの姿が如何にも立派だ。何と云ふ立派さだらう。どれにも生の力が充ちきつて居る。どの小さい草でも、その生命を力一杯抱いて居る。その目はこの宇宙と、自己の內とに向つて開かれて居る。實に純粹な淸らかな力が漲つて居る。私はこの一つ一つを贊嘆して見ずには居られない。」

　斯う呟いて來ると、自分の心の中には研ぎすまされた目がはつきりと開かれた。自分は少しあえぐやうに口早に心で見るものを言葉に出して行つた。

「或ゆるインディヸデュアリティと言ふ者は美しく、光のあるものだ。凡てのものが宇宙に對して無限の意義を持つて居る。私はこゝで槻を見ても、厚朴を見て

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も、杉を見ても、櫟を見ても、その中に溢れる程、一杯になつて居る、その木の生を見ることが出來る。この力は何れも同じ意義の力だ。しかしその現はれて居る姿は、夫々の特別な形を持て居る。だが、これの爲めにその價値の差を決めることが出來るか。少くとも、吾吾人間は、自分の私心でそれを思ふ事が出來るか。私は今はこの群立した生の一つ一つに對して、心一杯の贊嘆を發せずには居られないではないか。」

自分は昂奮して居る。自然と歩いて行く中にその林の中を出ぬけてしまつて、東南から西北に走つて居る徑路が一條、その出はづれた處について居る。自分はその道に立つた。それに向つた處は、武藏野の到る處にある柔い圓い丘で、その土は深く柔かく耕されて居る。その先は若葉のざわ〱と茂つた櫟林である。それを自分は望んで見た。すると深い感激が心に湧き上つて來る。

櫟の若葉は、厚朴の葉の白さに近く、少し黒味の交つた淡緑である。また柔かい若葉は自分が伸びた水々しい力で、さも重さうにふつさりして居る。その色の中に底から、溢れ上つて燃え立つた力が集まつて、この曇天の下に薄いが強い光になつて居る。

「あゝ綺麗だ！……何とも言葉が出ない程だ！」と自分は叫んだ。

自分の心には如何してもものを言はずに居られない……しかし、如何しても言葉になつて來ない。だが……自分はその力で彈ね上りさうになつて居る。自分は生命の伸び上つて行く力と姿とを見て居るのである。「自分はこの個性の姿を見て、わけもなく悲しみ涸れてはならない。」……自分は何にも計算する必要はない。

自分はたゞこの内から溢れて行く力を考へるより外はない。その力に依て起る飢ゑを充すより外はない。そして茂るより外はない！

自分は今、決して自分の生を計算してはならないと思つて居る。この木達はそんなことはして居ない。只内に力が充實して來る事を望み、それをたのんで伸びて行く。それより外はない。自分はこゝに立つて居てこの木達に向つて自分の心を傾け盡してものを言ひたいと思つてる。しかし、一言も口から言葉が出て來ない。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

故山田篠子の傳

前成女高等女學校幹事　小野吉勝

一

山田篠子の名は雑誌「向上」愛讀者の外は未だあまり世間に知られて居ない。けれども彼女の名は今後當然世間に知られ認めらるべき價値あるものと私は確信して居る。

彼女が一種の宗教的熱愛を以て渇仰し、隨喜し、信頼してゐた其母校なる成女高等女學校の宮田校長は左の如く稱揚して居られる。

予が女子の教育に身を委ねてより、爰に十數年、贄を執り來り學べる者、既に千餘、才媛淑女各其長處を發揮して、美名を世に負ふもの決して鮮きにあらざる也。

而も學ぶところ謹厚に、行ふ處莊重に、聊かも輕浮の態度なく、沈着質實よく教育ある婦人の面目を有せし君の如きは、蓋し稀なりと謂ふべし。

君の我校に在るや、攻學淬勵考案緻密、常に嶄然として頭角を顯はし、未だ人後に落ちざりしは、其同窓生と教師との共に認めて敬愛措かざるところ、將來を期して私かに囑目せるもの、ひとり予のみにあらざりし也。云々。

と。日本女子大學校麻生學監も亦次の樣に讚歎愛惜して居られる。

才あるものは輕く、重きものは才に疎く、智あるものは冷かに、暖きものは智に乏しいのが世の常である。山田篠子は才に長じて而かも重く、智あつて而かも暖い女性であつたことは、その遺稿の上に歷々として顯はれて居る。その然る所以は、天性にも因るであらうが、一つは幼少の折から、しみぐ\と人生の眞味に觸れたからでもあらう。

——(中略)

篠子が人と親むよりも寧ろ人を避けて、自然と親しみ、天地を友とした樣な跡のあるのも、亦人世の無情の風波の影響ではあるまいか。靜かな、淸らかな天地を友として、深い深い冥想に耽るのは、古來達人の往々好んでした所である。天地を友として、深い冥想に耽らないものは、淺い薄つ片な人間である。さりながら、天地を友として親しみ、冥想に沈むのが、最上の境地で、それ以上に超え進み、再び肉あり、血あり、而かも靈の高潮に達した人間其物に還らねば、未だ上乘とは云へぬのである。篠子は人間を離れて自然に親しみ勝ちに見えるが、併し人間に對しては、何時も熱い深い僞らぬ同情を注ぎ、さうして、その爲めに活き、又活きんとして居つたのである。それと云ふも、唯外部に現はれた自然の形骸に憧憬するのみでなく、その奥の奥に秘んで居る或偉大なものに、多少なりとも觸れて居たからではあるまいか。

世の常の娘と違つた眞心で親を思ひ、恩師の恩を慕ひ、心友に暖く、深く世を憂ひ、さうして深刻な觀察力に富み、鋭利な思考と筆力とに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

長じ、而かも天地人生に觸れて響きあるハートを具へた、前途有望の篠子は、芳齡僅に二十有一の春を迎へ、母と師友とを後に殘し、梅の香の如き床しい性情思想の香ひを遺稿の上に留めつゝ、櫻の花の散るが如くに、永劫に逝き去つて仕舞ふたのである。云々。

これ死者に對する世の常の如く徒らに誇張し過稱せる虛禮だと速斷するものあらば、そは世の敎育者の眞面目の風貌を解し、其僞らぬ眞情を掬むの熱誠なき輕薄者流との謗を覺悟せねばならぬ。

二

更に見よ、女子大學文科主任下村文學士が彼女を悼むの歌を、

故郷の無人の島へあこがれて御魂かへらぬむくろかなしも

その力命の力今いづこ流れ行くらむ奥つ城どころ

予亦彼女を弔ふの歌に曰く、

盡すべく成すべきおもひいだきつゝさは君などゝいそぎ逝きけむ

不退轉の向上心を胸に秘めて渇仰やまぬ君に在しけり

第一の榮のかむりをさゝげんの君が御靈に涙手向くる

はたとせの君が努力をかへりみてほゝゑみもすれ惜しくも思ほゆ

予が歌未だ調を成さずとはいへ、その僞らぬ眞情の流露である。而して又彼女が其高等小學の或幾月かを伊豆の新島に修め、再び上京の別れに臨んで、太田寬三先生が彼女に送つた。

いかなればまだ日もあさき別路にしのびかねたる涙なるらむ

といふ歌に見ても、如何に其印象深い敎へ子であつたかゞ窺はれるではないか。短日月しか居なかつた小學校で歌を貰ふ位に印象が深かつたといへば、無論學力操行の勝れたことを連想し證據立つるものではあるまいか。

宮田校長、麻生學監、下村主任の各先生方が以上の如く稱揚せられ痛惜せられたのは、決して誇張ではないことがわかるであらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

故山田篠子君小傳

齋賀琴子

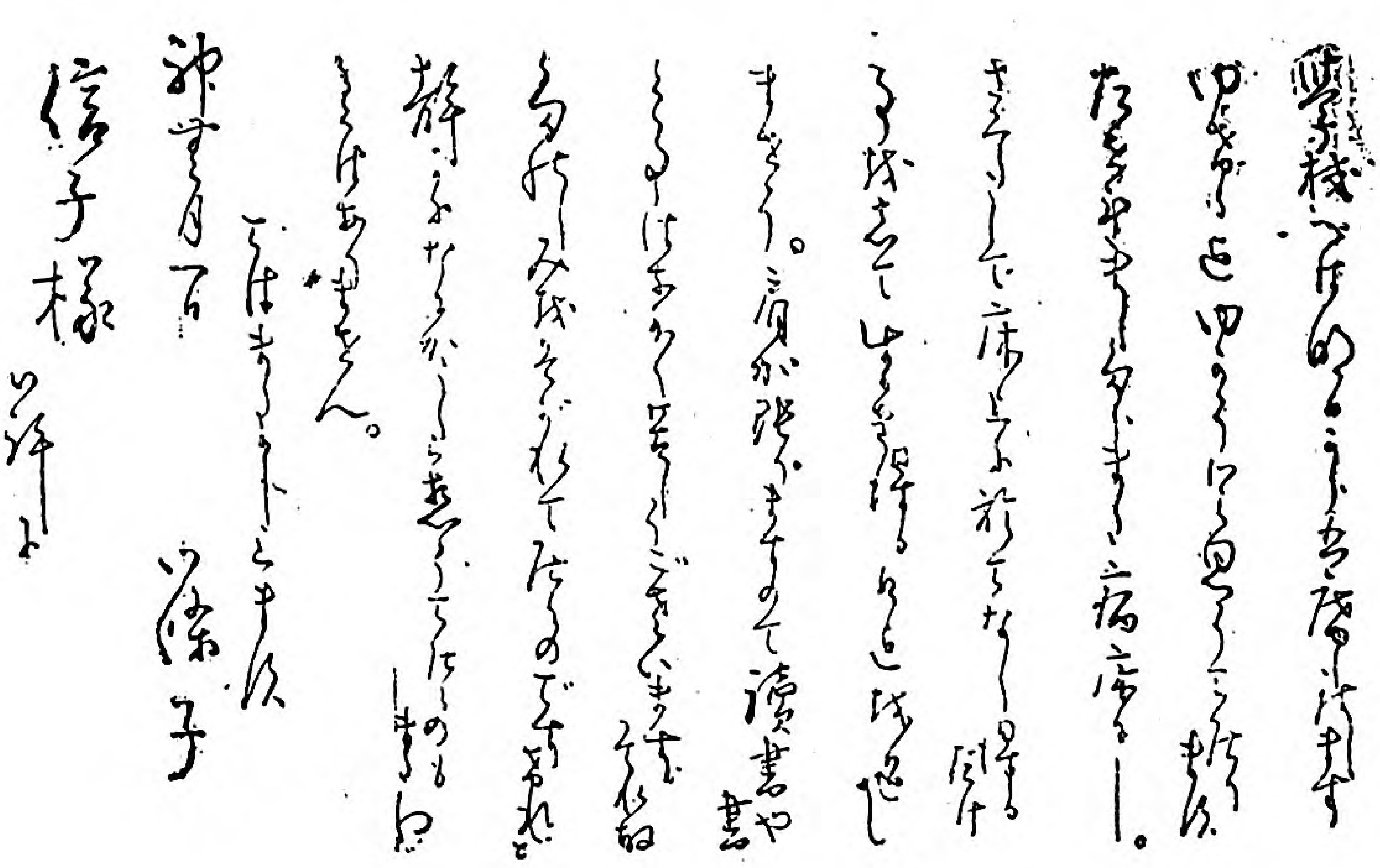
故山田篠子の君は、山田多惠吉氏の長女、明治二十六年一月三日、豆南の一孤島鳥島に生る。七歳にして島内の小學に入り、高等小學に進むに及びて、父母と共に上京して、京橋區鍋町小學に學べり。卒業後三輪田高等女學校に入りしが、一年にして校を成女高等女學校に轉じ、明治四十三年三月卒業せり。それより更に進んで日本女子大學國文科に入り、研鑚一年有半に及びしも、宿痾の爲めに或は自宅に、或は茅ケ崎に靜養せしこと屢々にして學業意に任せざること多かりき。四十五年の春、百華將に笑まんとするの時、固疾尙癒えざるに急にリヨーマチスさへ加りて、彌生七日、遂に赤十字病院に入れり。是に於てか、二親は常に其枕頭を護りて平癒を祈る。師友亦君が一日も早く輕快退院せんことを俟ちしに、何事ぞ、同二十九日午前七時、突然心臟痲痺を發し、賴りなき双親を殘して溘然として逝けり、時に歲二十一。



▲上の寫眞は山田篠子の肖像▼

噫々、君は幼より羸弱にして健康勝れざりしも、天資聰明、七歲にして能く日本外史を誦し、十一歲の頃より一家公私の書信は總て之を一手に成せりと、又學窓に在りし日も、勉勵群を拔き常に健者を凌ぎて優等の成績を以て進めり。されど啻々學問に於て秀でたるのみならず、性溫厚にして人と爭はず、而も意志頗る鞏固にして思想亦健實、實に現代婦女子の模範なりき。されば、君を知るものは皆君の將來に瞩目し、他日必ず爲す有るの人として期待し、敬仰する所多かりしなり。然るに一朝此の易簀に遇ふ。誰か慟哭せざるものぞ。嗟々今にして短かゝりし君の生涯を追想すれば追慕の念いよ〳〵深く、痛惜の情更に長し。

我は生前君と親交最も厚かりしを以て、爰に蕪文を草してその小傳をものする所以なり。



▲右は山田篠子の筆蹟▼

三

其様に得難き才媛は、何時、何處で生れ、其生ひ立は如何であつたらうか、そして進んで其懷いて居た抱負や覺悟や、その文才思想が、如何樣のものであり、如何程までに達して居たかを知りたいのも、亦抑へ難い人情の要求であらうと思ふが故に、聊か之れを紹介して見やう。

下村文學士の輓歌に「故郷の無人の島へあこがれて」といふて居られるが、無人の島！あゝ無人の島！然り彼女は無人の島に生れ、無人の島で生ひ立つたのである。これ既に彼女の短き生涯が全く數寄なる運命の手にあつた序幕を示してゐるではないか。あゝ無人の島何ぞ我等の好奇心をそゝることとや。

四

彼女の父は山田多惠吉氏といつて、東京は京橋區の玉置商會の開墾事務長として先代半右衛門氏の代から前後三十年間、身をも家をも忘れて唯一事に無人島開墾に從事して居られたのであつた。彼女が書き遺した感想や日記の中に、玉置商會が今日の如く實業界に頭角を顯はし得たのは、父の此犧牲的熱心に負ふ所が多いと云つて居るのを見ても、其努力の樣が偲ばれるのみならず、彼女の父がまた至つて高潔な敬服すべき信念を持て居たことを窺ふには、彼女の感想錄の中に左の一節があるのを見ても、其人格が略々察せられるではないか。

彼女が「あの豐かな廣いお胸の中には、自分と云ふ二字の宿る一點の空地もないのである」と評して居る位に其父が、玉置家の爲に盡したゐるに拘はらず、同家の「父に對する待遇」や「自分の家に對する處置」に就いて、「悲憤の涙を揮つて」「あまりといへば……」と父に訴へると、父は、

「言ふな、言ふな、父さんは國の爲に働いて居るのだ、國民としての當然の義務を盡して居るのだ」と超然として些しも怨む御樣子はない。私はいつもお父樣の此淸いお心に對して恥入つた事は一度や二度ではない。馬鹿正直と人は云はゞ云へ、私はお父樣を偉大な人格の一人と信じて居る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼女が後年悲憤復讐などの妄念、從つて今に見よといふ無理な努力、苛立つた苦學心の爲に、元來弱かつた彼女の身體が一層傷み、二六時中この心身の惡戰苦鬪に惱みは絕えず、終に不幸短命のあの最後の悲劇を演じたのであつた。

又、彼女の母はきん子といつて、慈愛に富んだ溫雅貞淑な婦人である。彼女篠子は父のこの不退轉的努力心と、母のこの慈け深い溫雅の性とを受けて、彼女の父が探險開拓した豆南の元は無人島であつた鳥島に生れたのであつた。時は明治二十六年一月三日の旦。

五

鳥島といへばあの十年程前の大噴火の事を連想させるが、それは何百年かに偶々あつたことで、いつもそんなに凄い所ではない。否、却つて非常な樂園である然り、彼女の故鄕は實にこの「幾千年かの昔太平洋上に噴出した絕海の一孤島」であつた。絕海の孤島！嗚呼、絕海の一孤島！。彼女はこの孤島を。

絕海の孤島と云へば、多くの人は屹度昔の物語本などに見える鬼界ヶ島を想像して、其の形容に凄絕とか寂寥とかの字を以てするであらう。併し是等の字を彼女の故鄕に對する形容詞と思ふと大なる誤である。詩趣に溢るゝ山野の自然！壯麗なる太平洋の態！是等は四季に渉つて著しい變化はない。唯其の季節々々のものが自然美を添へるばかりである。

と說明してゐる。尙今少しく此島の人情風俗の如何樣なものであるか、彼女をして說明させるのも亦一段興深いことであらう。

野に山に充滿してゐる自然の富！之れを獲んとして周廻三里の小島にふさはしい數を以て人が移住した。それは彼女が生れたる三四年前であつた。さうして彼女は其の事業の支配者たる人の暖い家庭に生れたのである。南洋の一孤島に神の惠と人の情とに包まれながら彼女は呱々の聲を揚げたのである。

移住者の作つた部落はもとより一つである。其中には內地のそれに比して遜色のない小學校があつて、常に二十人に滿たない醇朴な可憐な兒童を收容して敎化に努めた。又勞働によつて傷ついた愛すべき彼等移住民の肉體を醫せむが爲には、比較的完全なる醫院が設けられ、此孤島の美はしい大自然の懷に抱かれて其の餘生を樂まうと思つて來た尊敬すべき老練な醫師があつた。其他內地に於てはどんな一小寒村にでも施政上必要なものとなつて居る役場警察署郵便局等はこの島にてはなく、一般の島務は彼の支配者に依つて處理されて少しの不都合をも感じなかつた。郵便物は折々此の島を訪ふ船に依つて內地と往復せられ、而して殆んど一家の樣になつて、太古の民の如き生活をして居る是等島民の爲には、警察署の必要はなかつた。不幸にして死せるものは、日頃一家族と親しんでゐた島民の心からの念佛によつて葬られた。布施の多寡に由つて其の讀經に斟酌を加へる僧侶から不誠實な引導を授けられるよりも、麗はしい心から唱へられる念佛に依つて葬

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

られる方がどれ位よいか知れない。死者も亦瞑すべきである。よく働いてよく食し、而してよく眠る島人には罪惡の行はるべき時もなく、又煩悶もない。從つて僧侶の說敎も敎會も要らぬ。唯彼等の周圍を包む自然美に依つて醇化された處の心に、神を敬ひ人を愛して安穩な日を送つてゐる。

斯樣にして成り立つてゐる此一小村は、三方を青山に圍まれ、家の下は直に海となつて、前は一灣靜に小波を浮べてゐる。此山の上と其の四圍の海には、島人が神から授けられた富が充ち滿ちてゐる。民家の下の海岸には四時溫泉が湧出してゐる。島人は其處に風呂を設けて一日の勞れを袪醫するのである。……(中略)……そして子供も大人も悅ぶ果物は、木を植ゑる種子を播きさへすれば、あまる程とれる。魚類も糸さへ垂れゝば捨てる位取れる。或年の夏內地から遊びに來た知名の人が南洋の一仙境と讃へたのは決して過分の讃評ではない。

彼女山田篠子は斯樣な風光人情共に掬すべき平和の樂園に生れ、そして十歲頃迄こゝに生ひ立つたのである。後年(終焉の二年前、則日本女子大學在學中)彼女が或機會に觸れて其故鄕烏島を偲んだ感想中に、次の樣な一節がある。

(明治四十三年一月六日)夜は風もやゝんで靜かである。併し今日は寒の入の日とおもへば、殊更寒い。入浴の歸りに手拭が凍る。暖國に送つた自分の前半生を思ふと、まるで夢の樣な事實である。私が產聲を擧げた烏島、唯生れ故鄕と云ふのみでなく、如何に私にゆかりの深い島であらう。恐らく故鄕と云ふものが、斯く密接の關係を有するのは烏島の自分に於ける樣なものは、他にあるまい。二十年の年月此間の凡ての事實は皆この烏島の二字にまつはつて離れない。

あゝ怨恨、奮起、敵愾心、淚、皆烏島と云ふ二字を離れては孤立するをゆるさぬ私の境遇である。あゝ此怨恨、敵愾心、淚、皆私に依つて實現されて居る。其結果を收めるのも亦自分である。結果!美か醜かは私の努力如何にあるのだ。復讐心!今の世には禁物かも知れぬ併し、一時も此心から離れて立つ事は出來ぬ。美なる結果をと願はずにはどうして居られやう。

あゝ烏島よ、私の生涯にまつはつて、さうして自分を奮起せしむるの力となれ。烏島と云ふ每に、無邪氣であつた幼時の樂しみ、神仙の境に等しい風物、越えて覺えたる悲憤の情など忽然として現はれて來る。併し、過去の歡樂も普通の人のそれとは違ふ。自分を奮起せしむる悲憤、此二つを有する私は寧ろ幸福であらう。冷罵、嘲笑、皆私の結果をして美ならしめんと努むるの燃力となるかと思へば、また身に取つての尊い賜ではあるまいか。何にせよ、私の今迄は平坦の生涯ではなかつた。今後は尙更さうである。それと戰ふの覺悟を今新年に當り殊に固くして置くの必要があるのである。あゝ自分は努めたい。自分の敵であつたもの皆が、自分の最終の日に靜かに振返つて見て、皆それが自分の恩者であつたと感謝の出來るやうな美なる結果を望む、あゝ努力又努力!眞に私の生涯は努力を以て築かねばならぬ。

——「日記」より——

之れを見ても、烏島は彼女に取つて如何に忘られないなつかしの故鄕であつたか、其なつかしい故鄕の風物が彼女の全生涯に如何に深き干渉を有し、感化を與へて居るかゞ偲ばれるではないか。麻生學監が彼女を評して、自然と親しみ天地を友とした樣な跡がある云云と言はれたのも尤もな事で、畢竟幼時斯の樣な故鄕の自然美に感化を受けてゐた賜であつて、所謂「三つ兒の魂百までも」といふのであらう。

結婚の心理描寫

外島泿之介

女の一身に變化を及ぼすものは結婚である。紅葉の三人妻に二十四迄琴の師匠をして獨身で暮した人が結婚を勸られて「固より身の形附を願ざるにはあらねども、不仕合にして緣遠く、又心に拶ふ方も無くて、うかくと今に獨身の、習覺えたる琴の絲より細き煙の活計となれるに、緣を急がぬ心にもなり」。又或時は、「友白髮迄苦樂を一つにする人なれば、隨分見立て添ふが肝心なり、されども身を思ふ餘り、彼此と選び過ぎて緣を遠くし其間に齡長け、花嫁ながら女房の姿となりて、賣損ふもの世間に往々あり」とも考へ遂に「二十四迄緣無く、此上にも諦めて、一生男持たず、氣散じに暮さむとまで、一時は固く思ひ込みけるも、寡居は不自由といふ理屈が知れて、夫婦といふ事人の身にせずば濟まぬ契と心着く廉々ありて、稍動き初めたる心」になり、扨て結婚となつた。「始終俯きて物は口に入れども、胸塞りて喉を通らず、冬の夕にも汗かきて、二十四の處女理は無しに男を懼れぬ」不言不語、（紅葉）にも昔風の娘が結婚を諾して後の心持を「我は係る密事を惡事の一種とは念へるなり、努々浮きたる心ならねば、末こそ契れ、今を窘み神懸て汚れたる事ありしにはあらざれど、親の知らざる男を我と見立てて思ひ通はせ、心を許したるをぞ、吾は疾しく思ふなりけり」と書いた。無意識な結婚は鏡花の化銀杏に、「何だか知らないけれど御婚禮をした時分は、嬉しくもなく、恐くもなく、まるで夢中で、何とも思やしなかつた」と、今迄の平凡な女は然もある可きである。紅葉の八重襷に「些も嬉くはないわ、不見不識の他人の中へ入つて難しい機嫌を取つたり、つまらない氣兼苦勞をしなければ成らないのぢやないか、それよりは一生悉して娘で居て親の傍で我儘を言つて、氣樂に暮して居る方が、幾許可いか知れはしない」。年をとつての敗惜みか、他に戀人でもある娘の結婚を強ひられた時であらう。

別に安樂な生活よりも愛情に重きを置いての心配は

春葉の縁の絲に「お前も私も遠からず人の妻になるんだけれど、男の愛情と云ふ物が一生續く物だか奈何だか、若し捨てられでもしたら今の處女の時代が屹度戀しくなるだらうと思つて……」、段々内面描寫に傾いてくる。白鳥の微光に「あんな否な御亭主に何時迄も連添つて、戀もしないで、何か面白い人だらうと、其氣樂さうな様子を愚かしく思つて默つてツンとして居た」とか「一時凌ぎだと思へばこそ、こんな男と、何で一生の縁を結ばれやうぞと、不斷の信仰を力強く述べた」とか「いつそ身を賣つちまはうか知ら、私は操を立てる男が此世界に一人だつてあるんぢやなし、好きでもない男一人に喰付いてるのも、もう懲々した」と云ふ樣な書き方になつた。

　結婚の序に少し貞操に就いての描寫を探つてみると紅葉の伽羅枕に「女人は貞操にあるべきものを、白銀に甜られ黄金に抱かれ、大事の／＼戀と情を散々に玩弄ばれ、砂糖の甘味なく、茶の香氣なく、魚にしては脂膏ぬけたる三月比目魚、形はあれど其性なきは、其物にして其物ならず、女にして女にあらず」とある。操を褻された後の心持を三人妻に「愧つゝ懼れつ悔いつ陋みつ胸の紛亂に、目も眩み耳も聾ひて、他の言を分解くべくもあらず。かゝる折にぞ涙ばかりは礙げられで限無く流れける。又「褻されし後の所爲無さは、紙に墨を塗りたるも同じ事。其痕を滅さむには紙を引裂捨てむ外に術無く、身を殺すにあらざれば、此汚點の去るべきにあらず、命あらむ限りは褻されたる身なり」とある。貞操を何とも思はないのは柳浪の羽ぬけ鳥に「幾人と限無き男に肌を觸れ、幾度かの出戻には慣れ、縁を組むにも別離れるにも、世の人の恐るゝ樣に大事とは思つて居らぬ。」こんな女も少くない。之は捨鉢であるけれど、紫被布(柳浪)のお若の樣に「親切に云つて呉れる人だと、誰でも彼人の樣に思はれてねあの人に可愛がられた時の樣な心地になつて、何だか其人が可愛くなつて了つて、もう夢の樣な心地になつて、つひ其人と夫婦になつて見たくなる。」之は只何のわけもなく愛に没入して貞操を何とも思はないのであらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

戰爭の後

町田靜江

亞米利加のあの名高い南北戰爭が畢つて、まだ間もない或年の夏のことでした。

北軍に從つて勇名をうたはれた二人の年若い士官が避暑の爲めに連れだつて、或る大きな汽船に乘つて出かけました。

船は港を出てから幾日、みゆる限りは只水の一色の大洋を、靜かに進んでゐた或日の夕ぐれ、二人の士官は甲板のベンチに腰かけて、無言て日の落ちるのを眺めてゐました。

不圖、一人が手にあつた小さな本（其れは聖歌集でした）を開いて、開いたまゝに、

『吾がたましひを愛する耶蘇よ』

と云ふ歌を唱ひ初めました。他の一人も其れにつれて靜かな眠つたやうな海の上で

『浪はさかまき風吹きあれて――』

と後を續けました、甲板の上には他の人影もなく、二人の聲は美しいハーモニーを爲して、際涯ない海を吹く風にはこばれてゆくのでした。

と、其第一節の終り頃、誰か二人の後に近づいて、靜かに聲を合せる人がありました。士官等は、其まゝ誰とも知らぬ人と共に、四節の終りまで歌ひ畢りました、すると一人の士官は俄かに振りかへつて、

『私はあなたの聲を知つて居ります』

と言ひました。其人は驚きの眼をみはつて、士官の顏をみつめながら。

『さうで御座いますか、然し私は夢にもあなた方を存じませんけれど』

と答へました。二人の士官も改めて其人に對つて見れば、矢張り見知らぬ顏でした。三人の會話もしばし絕えて、涼しい夕の風が思ふまゝに吹き渡る。

やゝ暫らく默つて何をか思ひめぐらしてゐた初めの士官は、再び斯う問ひかけました。

『あなたはもしや南軍の方に從つてゐらしつたのではありませんか』

『仰有る通り南軍でした、あの恐ろしい戰爭にあなた方はどちらでした』

其れには答へず。

『あゝ矢張り私はあなたの聲を知つて居ます、あなた

は某地の對陣のとき、あの烈しい會戰の前夜かくれる木かげも無い草原に、前哨としてお立ちなすつた事がお有りでせう。』

『有ります。月のよい晩でした。』

『左様、月のよい晩でした。そしてあなたは何をか歌つてゐらしつたでせう。』

『何を？』

『歌を、今歌つたあの讃美歌を。』

『あゝ然うでした、然うでした、餘り月がよいのでそして私一人で餘りさびしかつたので——然しどうして其れを御存じなのです』

士官の顔にはなつかしげな色が浮びました。

『私はあの晩北軍の斥候長として、あの邊の偵察に出てゐました。あの直ぐ前面の小さな林を脱けやうとした時、あなたの姿が月に向つてはつきりと見えましたあなたは帽子をぬいで手に持つて、少し空を仰ぐやうにして、何か歌つてゐました。私はすこしの猶豫もなく、装塡の出來てゐた銃を持ち直して、其引がねを引かうとしたせつな、ふとあなたの聲が耳に入りました〝Cover my defenceless head with the shadow of Thy wing〟私は叉銃を下ろして其儘反對の方面に向つたのでした。其れは今私のきいた聲でした。あなたの額は何の覆ふものもなかつた、けれど——』

『けれど、神の翼は私を覆つてゐました』

と其人は結んだ。

『左様、神の大能の御つばさはあなたを覆つてゐました』。

から云つて、士官は兩手をさしのべて、其人の手を握りました。南北、敵味方に分れてゐた二人は、かうして親愛する友となつたのでした。

是れはキリスト教會に名高い美しい物語です。恐らく此の歌のうたはるゝ限り、この物語も共にいつ迄も傳へらるゝ事で御座いませう。

聖公會の古今聖歌集の三百十六番、メソヂストのさんびかでは二百十七或は四百四十五番。

〝Jesu lover of my soul〟と云ふのですけれども、この話しの中の最も大切な詞は「賴る方なきこのたましひを委ねまつれば、みいつくしみの、翼のかげに守りたまひね」と譯されてあります。譯語の似合しくないのが殘念に思はれます。



婦人年中行事

八月

▲八月の魚▼

子持鮎。いぼ鯛。かます。鯉。こはだ。はも。小鰹。いわし。鮭の子。いなだ。さはら。鯒。せいご

▲八月の野菜▼

茄子。ずいき。新くわゐ。芽うど蓮根。小人參。冬瓜。西瓜。白瓜甘薯。なた豆。しめじ。夏大根。枝豆。十八さゝげ。

▲八月の花▼

萩。桔梗。芙蓉。木槿。蜀葵。女郎花。夕顔。茉莉花。ゑぞ菊。サフラン。百日草。水葵。紫苑。秋海棠。薊。白粉花。向日葵。ブロックス。

▲登山地▼

富士山(駿河)。筑波。淺間。日光赤城。妙義。榛名。八嶽。甲州御嶽。大山。白山。木曾御嶽。身延武州御嶽。高尾(以上東京附近)

比叡山。愛宕山。笠置。山上。多武峯。高野。金剛。信貴。生駒。箕面。武庫。麻耶(以上大阪附近)

▲八月の暦▼

七日。庚申。
十一日。甲子。
三十一日。天長節。

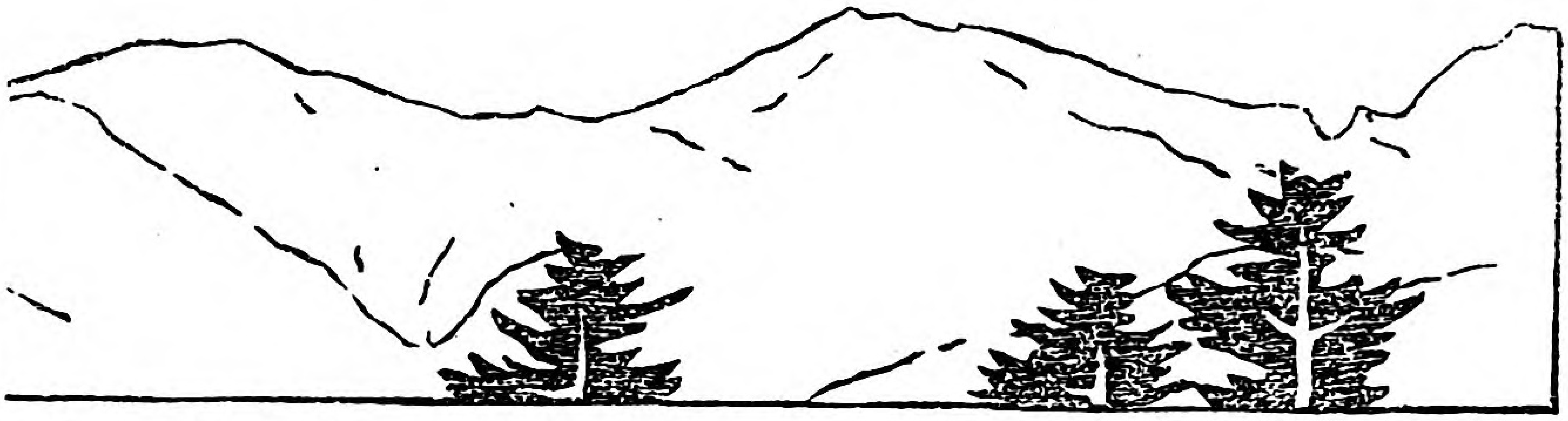


七曜表

日		3	10	17	24	31
月		4	11	18	25	
火		5	12	19	26	
水		6	13	20	27	
木		7	14	21	28	
金	1	8	15	22	29	
土	2	9	16	23	30	



十疋の
馬のくさめや
夏木立
一茶



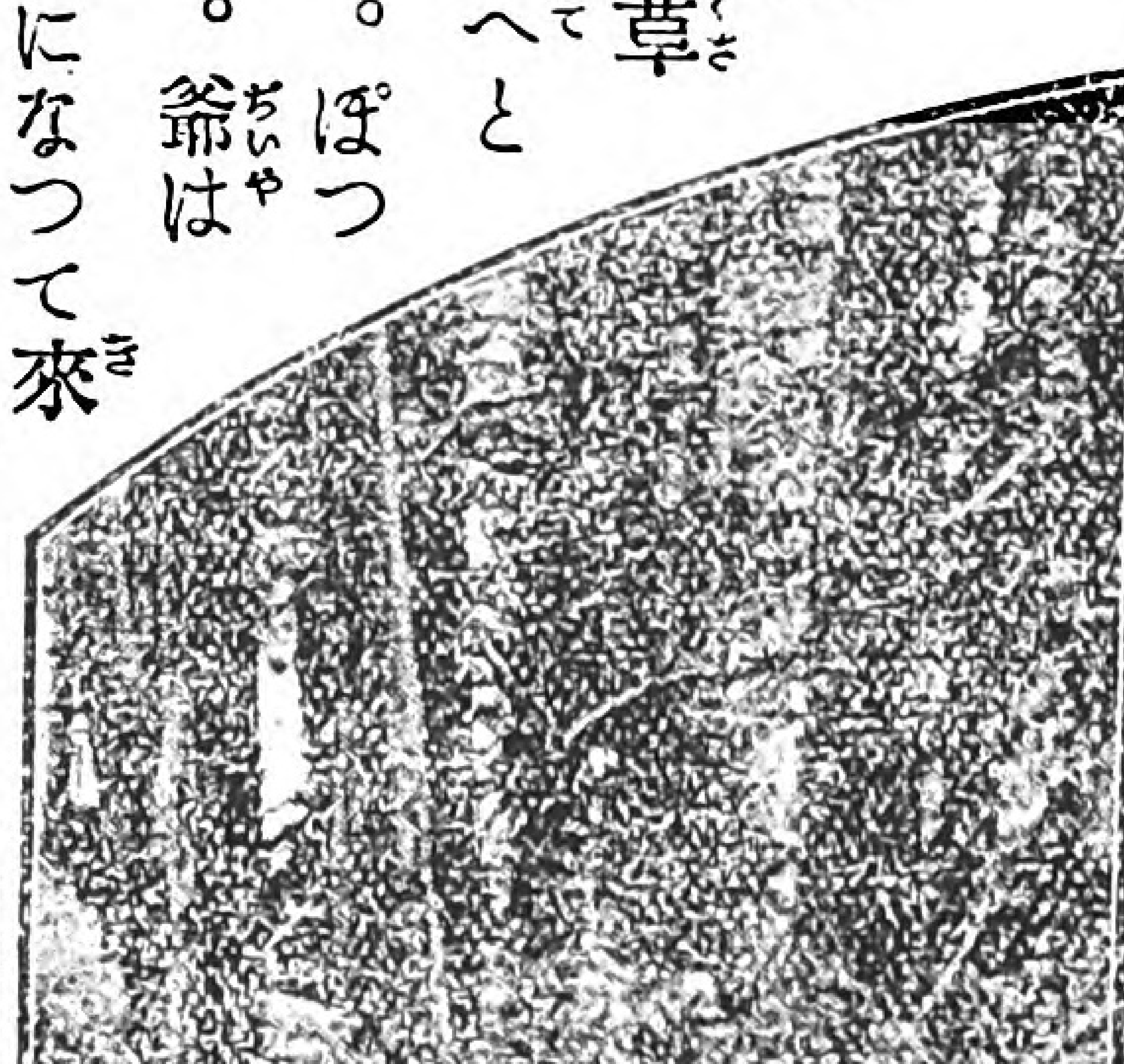
山之巻

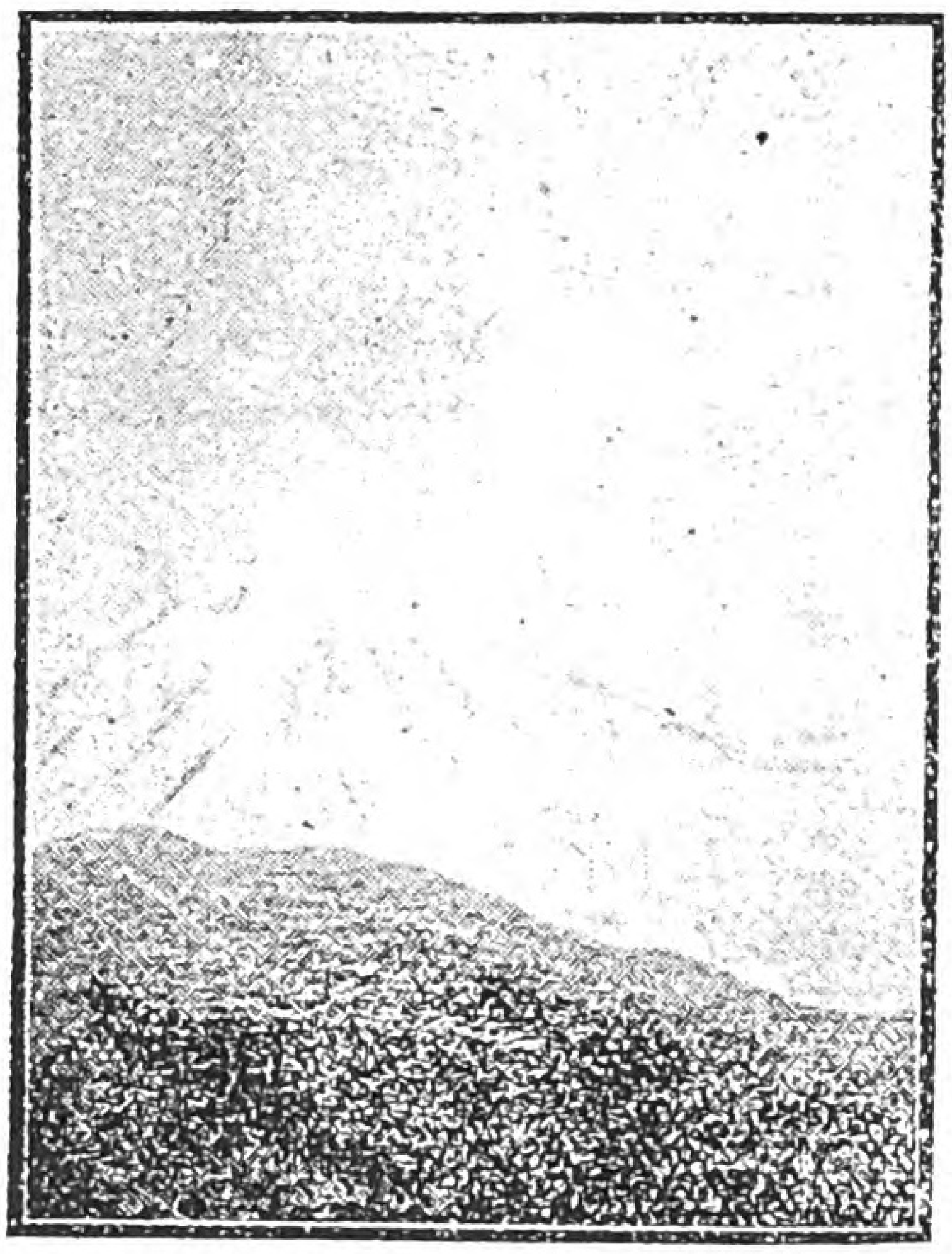
嶺の原は草山、木山、木は黒松が多く、落葉松も稚いのが少しは交つてゐる。女郎花や、溝萩や、秋の草花が黒い土の膚に茅萱の青氈を衣せた上を裏から表へと刺繍してゐる。土の香と茅の生臭いのが、鼻を衝く。ぽつりと頬に當るものがある、黒い雲が舞ひ下つて來る。爺は喘ぎ〳〵後れて上つて來て、旦那あやかましい天氣になつて來ましたぞいと、情なさゝうに言ふ。この中で一村雨の來るのを待つてゐるのは、草花であらう。草花の中でも螢袋と桔梗とであらう。殊に此原の桔梗の瓣の大きさよ。瑠璃色は水に似てゐる、凉しい點に於て似てゐる、透明な感じがある點に於て似てゐる、桔梗のふくらんだ大きな蕾を明ければ、中から紫水晶が出て來さうだ、螢袋の小さい締まつた蕾を放てば、中から飛び出すのは螢に違ひない。（烏水）

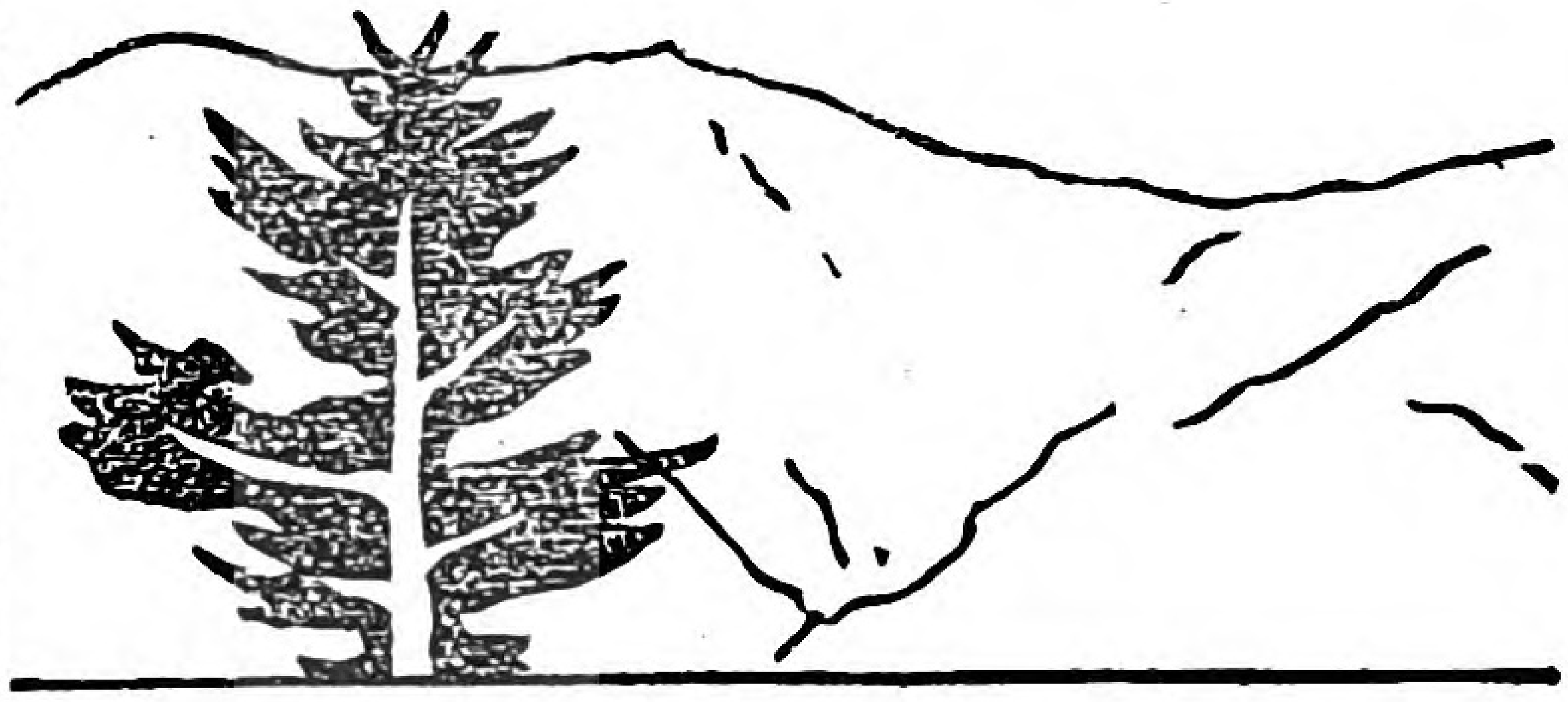
アルペン一帶の連山が重疊して皚々たる白雪を戴き、谷間々々を流るゝ大氷河と、その麓に湛ゆる明媚の湖水とに成れる瑞西の國は、實に歐洲大陸の銀冠と稱すべきものである。（黒板博士）

見よ、如何に美しきや。越の白山の名は解けて、山陰に月の隱る









る時も、此處には雪の色を湛へて、芙蓉の花の湖一輪、朝は醒めたる高士の如く、夕は醉へる美人に似たり。（鏡花）

上州境の連山が、ちやうど屏風を立て廻したやうに一帶に連り渡つて、それが藍でもなければ紫でもない一種の色に彩られて、ふわ／＼とした羊の毛のやうな白い雲が其絶巓からいくらも離れぬあたりに、極めて美しく靡いて居る工合、何とも言へぬ。（花袋）

雲の翼は、初めは徐々として遠山を覆ふやうにして擴がつて來たかと思つてゐると、忽ちに、谿からの怖ろしい風が一陣、どつとばかりに絶頂の劍が峯の岩角に突當つて來た。小石がガウ／＼音を立てゝ深い谿底へ落ちて行くと、岩の間に隱れてゐた雷鳥が、スツと風の前を突切つて飛んだ。（孤雁）

車を驅りて白羽坂を踰えてより、囘顧橋に三十尺の飛瀑を踏みて、山中の景は始て奇なり。之より行きて道有れば水有り、水有れば必ず橋あり、全溪にして三十橋、山有れば巖あり、巖有れば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑、地有れば泉有り、泉有れば必ず熱あり、全村にして四十五湯、猶數ふれば十二勝、十六名所、七不思議誰か一々探り得べき。（紅葉）



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

婦人年中行事

八月の運勢



▲八白の人(廿一、三十、卅九歳等)不如意の月、精々注意、百事控目にせざれば人の誹りを受思はぬ疑を受る事あり。御婦人破談病難有、暗剣 丑寅 大凶。

▲七赤の人(廿、廿九、卅八歳)等目上の人の引立に會ふ大吉月、婦人縁談、懐姙等有、求職旅行金談吉。吉方西、暗剣同斷。

▲六白の人(十九、廿八、卅七歳等)漸々進むべき道を見出す吉月なり、御婦人優遇を得、心地よき事度々有、縁談纒まる、吉方辰巳、暗剣 丑寅 大凶。

▲五黄の人(十八、廿七、卅六歳等)此月は物事半ばにて妨害有、出しやばると困難起る、最も争論慎むべし、縁談旅行凶、吉方東、暗剣同斷。

▲四緑の人(十七、廿六、卅五歳等)木尅土にて凶月なり、八九分迄進みし事を突然破亂滯り有、不平を愼むべし、婦人病難注意吉方西、暗剣 丑 寅大凶。

▲三碧の人(十六、廿五、卅四歳等)約束に反き易き月、萬事強て進むときは災害有、先づ有の儘を守るに吉、色情を愼むべし、暗剣 丑 寅大凶。

▲二黒の人(十五、廿四、卅三歳等)本命鬼門に在る月故、冒險的意味する事進むべからず、諸事九十月を待つ吉、暗剣同斷。

▲一白の人(十四、廿三、卅二歳等)失敗多き凶月、身内に不幸有、婦人他人の口に乘らぬ樣、悔む事多し、控目肝要、暗剣丑寅。

▲九紫の人(廿二、三十一、四十歳等)百事和合して好都合に進行する大吉月、目的通り進んで利あり、御婦人縁談成る、尚生計上に利益を得る事有、吉方南北、暗剣 丑寅 大凶。

京橋區南傳馬町一ノ三
人相見 本清堂

歴史上の八月

▲一日。ネルソン佛國艦隊を全滅す(一七九八年)▲二日。家康江戸城に入る(天正十八年)▲三日。全國を八大學區とす(明治五年)▲四日。後藤伯死す(明治三十年)▲五日。伊藤公大勳位を受く(明治廿八年)▲六日。幕府品川に砲臺を築く(嘉永元年)▲七日。十返舍一九死す(天保二年)▲八日。ポーツマスの會合(明治卅八年)▲九日。斷髮脱刀を許す(明治四年)▲十日。黃海大海戰(明治卅七年)▲十一日。哲學家ヘルバルト死す(一八四一年)▲十二日。富山市大火(明治卅二年)▲十三日豐臣秀吉死す(慶長三年)▲十四日。蔚山沖の海戰(明治卅七年)▲十五日。ナポレオン生る(一七七二年)▲十六日。後醍醐天皇崩御(延元四年)▲十七日。フレデリック大王死す(一七八八年)▲十八日。七卿長州に落つ(文久三年)▲十九日。ワツト死す(一八一九年)▲二十日。哲學家シエルリング死す(一八五四年)▲廿一日。第一回內國博覽會を開く(明治十年)▲廿二日。岐阜大洪水(明治二十六年)▲廿三日。英國と條約を結ぶ(嘉永七年)▲廿四日。陸奧宗光死す(明治三十年)▲廿五日。函館大火(明治四十年)▲廿六日。江戸開府三百年祭(明治廿二年)▲廿七日。明治天皇御卽位(明治元年)▲廿八日。トルストイ生る(一八二二年)▲廿九日。韓國を併合す(明治四十三年)▲卅日。越後洪水(明治三十年)▲卅一日。今上天皇御降誕(明治十二年)

一年間につゞく

名流婦人日記

六月一日より十日まで

福田和五郎氏令孃　福田春海子

六月一日。晴天。七時起床、茶の間座敷の掃除をすませ、御祖母上のかはりにけふは一日なので神棚へお洗米を供へ、花を挿かへ、のちなんとなく眠いので横にならうと思ふたなれど、早起の女中の前も恥かしいので、みんなが好まない便所の掃除をすませ、十二時がなつたので、晝食の仕度、父上の御來客もあり差上る（鯛のテリヤキいかとふきの煮しめ玉子三ツ葉の椀）午後から庭の土俵へ近所の小供達を集めて、實さま先達て角力が始る、隨分とにぎやかなこと、自分は裁事にかゝる、四時頃小供達もかへる急に靜かになつた縁がはの汚れるには女中達に氣毒、珍らしくも父上お歸へり、市村座へ若丸をきゝに連れて行くとの仰せ、增さんが留守なので自分はやめ、實さまは大喜び、御出合せの大野さま、御殿町の兄上誘ふて四人御出かけ、姉上淋しからうとの御祖母上の思召しに依り、自分はイチゴを持つて伺ふ、十時御暇申す、父上實さん御かへり、急に大粒の雨降り出て、若丸、樂遊の評で一時床につく

六月二日。けさはあめでうれしい張物は澤山に御祖母上から言ひつけられて居る御祖母上三四日前から女中を相手に解き物、それにこの天氣では全然悄氣ておしまひの御樣子、御氣毒に思ふた。幾ら雨がふつたとて、ぼんやりも出來ないので

明けはなしの窓のそばにすゑてある机に坐る、何だかむやみにねむいやうな恍惚としてしまふ、よみさしの椿姫を取りあげて見ても、あんまり興味も湧かないので、書棚の整理に取りかゝる。亂雜にしてあつた寫眞箱をかたづけると、仲に目に立つたのがあんまり美しいのでよねさまから拜借した御寫眞、ほんとうに美しい、幾度見てもあきのしないお顏、其内でも御目が一番氣に入つた、たしかに人をチヤームすると云ふ御目寫眞程美しくないとの事でも、この間のお島田の御寫眞だつてお美しかつた、お肩などない樣でもお目量が十五貫もおありのよし林田さまの御親類の方も一處にうつして入らしつたのも、お心持お眉を細く遊ばしたらとよけいな事を考へた。江木の奥さまが宮本のお孃さんより自分の方が若いとおつしやつたのは、此の方かしら、幾分お美しいだけも此方の方がお若く御見え遊ばす、米子さまとおなじ位かも。お茶の間からお聲がかゝつた、又寫眞いぢりかと大叱られ、お晝のお仕度、午後から夜十一時迄仕事、品川の増さんまだかへらず手紙出す。

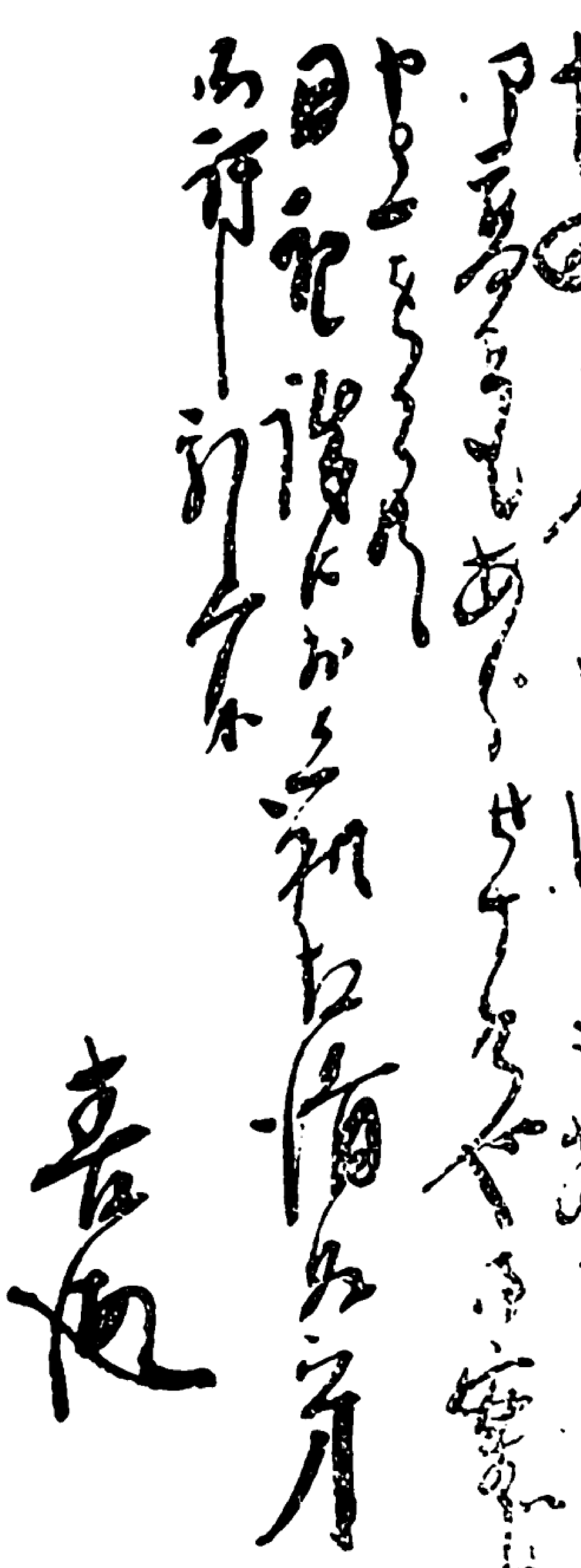
品川の海の景色を眺むればなに古里へ足はむくまじ

六月三日。晴天。六時起床、けふは三越へ買物に行くお約束があるので、二時間かゝると笑はれる髮も三十分で結上げ、みしま樣へ向ふて、一高の前から電車にのる。日本一の三越も、こんなに淋しい時もあるかとうたがはるゝ、三反ばかり求む、新聞にある通り、今年は帶地までにシヤが流行、眞に美しい羽二重へ入れてこしらへたら、定めし美しく涼しからうと思ふ、三階で（おすし、アイスクリーム）頂く。須田町まで歩み、角でお子供樣方へボン〳〵宅へのおみやげ整へ歸宅、實さんの友達見えられたので、お夕飯のお仕度にかゝる（コロツケイ、キヤベツ巻）をこしらへて皆々さまで頂く、夜雨がしきりに降つて來て物靜か、新刊雜誌など見て十二時床につく、米さまから便りあり、近頃おかはりなくうれし。

六月四日。曇天。いつもになく早起きし大好な黄ばらをながめた、あはれ夜の雨につやてこそ美しけれども、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うなだれてしまふた、昨日の樣子思ひ出すと何となく心かなし。戸外に出れば涼風脇から入つて心地よい、近所の家まづ戸締、只松下さまのみ新二階の南窓の戸一枚あけてある、いつのまにか六時になつた。臺所で民のガタコト朝飯の用意して居る、歌を相手に雑巾掛をすます。午後から御出でになるとのお知らせがあつたもの丶、まさかと思ふた龍江樣が御見えになるほんとうに嬉しい御心がけのお方、身分あるお家に育ちながら、世の逆境に立ち、親の犠牲になつて御苦勞なすつて辛くも幸の御身の上となつた。種々御話しに花が咲き、五時すぎお歸りになる、御苦しみの當時、御慰め申した以上の事もしない、自分を御忘れなく、三年振りにお尋ね下さつた上、御主人までも御厚い御傳言、御世辭もあらうが言はれて見れば心の底から嬉しい、御土産に美しいもの御歳暮を戴く。



福田令孃筆蹟

六月五日。雨天。けさは靜かな雨で心地よく來客もなし。午後から寺田樣御見えになり、お目にか丶るやすぐかへり升のよとの御言葉、御忙がしい御身とは言ふもの丶、まへからの御約束日なのに思はせ振りもうらめしくも思ふた、おもてなしがよかつたのか御かへりの御樣子なくうれし。梅月のお豆、珍らしいと召し上る、米さまも入らつしやつたので、御一所に御夕飯差上る（はんぺんのさいの目の汁オムレツ、ビフテキ）寺田樣八時半おかへり、米さまと隔ない御話しで十時半御むかへあつて御かへり、寺田樣は男氣のある方、けふの御話し伺ふて感心してしまふた。米さまから竹の模樣の帯戴く、外は雨やみ靜か十二時床につく。

六月六日。雨天。けふも小やみなく雨ふりうつとうし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



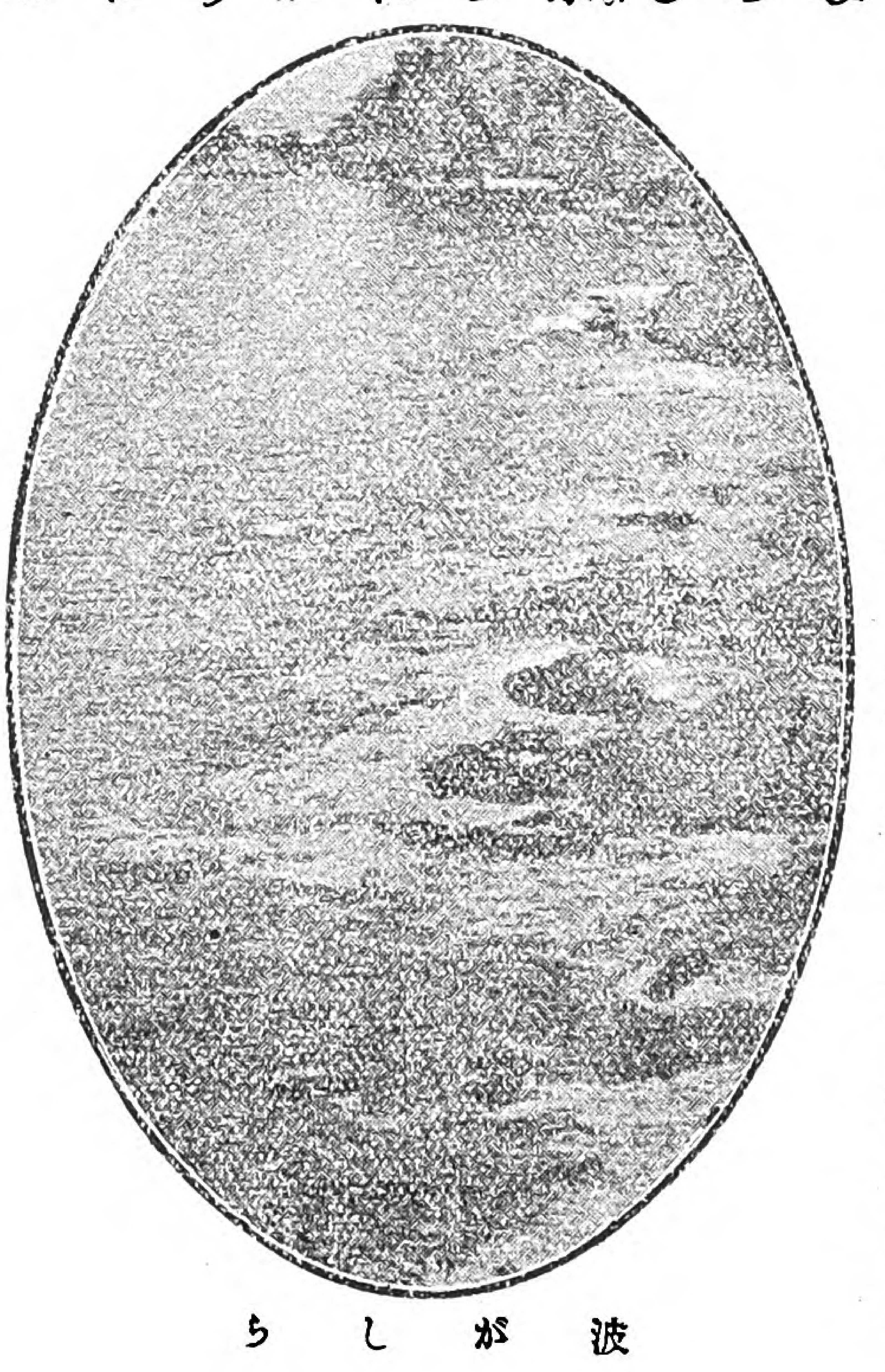
行かず歸らず浪のまゝに

く、御掃除すませてお仕事にかゝる。靜子さまより御招き狀あり別に用事もないので御祖母上の御赦しを得て、よし子樣への御返事をし認める。近頃筆を持たないので字も亂れる、手紙を持つて外へ出る、ポストへ入れる、芳子樣がなにを遊ばしての處へ屆くかなぞとくだらぬ事を思ひつゞけながら、白山御殿町下へ出る。思ひ掛けない時子樣に久々でお目にかゝる、かげながら伺へば、背の君を失ひ給ひしと伺ふ。然し御慰め申すさへも氣まりあしく、つひに何事も言得ず御別れ申す。靜子さまいつもながら御待ちくたびれてよと御迎へ下さつた、こゝでもしばらく時子さまの御身上にうつる。やがて御主人大學校よりおかへりになり、久しぶりで御主人の尺八、鶴の聲、根引の松をお合せ申し、御夕飯にあづかり七時歸宅。靜子さまの幸に引きかへ、時子さまのおいたはしさの樣も察しられる、日記を認め、十二時床につく。

六月七日。 晴天。きのふに引きかへ、けふはうす絹をはきしやうな好天氣、けふは實さんの誕生日なので、心ばかしの御祝、常から心のあつた方を御よび申す。午前の內、なにくれとかたづけ、風呂をすませ、御祖母上の髮を結ぶ、黑油をあまり塗りすぎおてゞと、父上御用にて祐助來る、御出かけ。御祖母上小窓のそばで、はさみをならし、やがて枝ぶりよき處々、床の間に生け、神棚佛壇に供ふ、先登に入らつしやつたのが實

さんの一番親しいおせいの高い眞樣、けふおまねぎに預かり、恐縮ですといつもにない御口振り、何だかをかしくなつて臺所でふき出してしまふた。御祖母上から御諒闇ですから御かまひも致しませんといふて入らしつた、やがてYさま、Sさま、Mさま、Tさま、御見えになる。白井の奧樣五つになるリンゴのやうな頬をした坊ちやんを連れて入らしつた、皆々樣に紅茶を御すゝめして後、書生流に皆々樣一所に大きなテーブルで、赤飯でかまぼこさいの目、三ッ葉玉子汁、ゑびのフライ、ビフテキ外三種ばかりで御酒は禁物なので、サイダー、アイスクリームを差上げる。餘興としてMさまの錦御旗、心持御こゑがお高かつたならば永田にそつくりとの評、あとの方々は浪花節、實さんのが一番上手にきこえた、毎月雜誌に評論をかくだけに浪花節には明るい。そろ〳〵白井の坊ちやまねむけがさし「もうかへるベツ」には皆々大笑ひした。しばらく田舍に置いたのでほんとうに困ると奧樣おこぼしになる、無邪氣で愛らしい、皆々さま電車から一處なので御かへりになる、急に大波のあとのやうに靜か、あと片づけを濟ます、民も、歌も、居ねむり、あさからのつかれ無理もなし、十二時日記をしたゝめ床につく、勉强所まだ瓦斯の光りが見える。

六月八日。晴天。けふは縫ひかけの袷を仕立上げ、襦袢のえりをかけかへた處へ、實さんの友達早稻田の横見樣御見えになる。實さん留守なので、お茶の間へ御通しゝておあひてす、序から禿山さんで通つて居らつ



波がしら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しやるので、失禮ながらよく見れば、御うはさにたがはず、お歳に似合ぬ前の方がスベ／＼をかしいやら御氣毒にも思ふた、御話しの面白い好い御方、實さんもかへつて來たので、失禮する、花先達からお賴まれした御富久紗に畫をかく、御祖母上はそれに添ふお歌をおつくりになられた、父上御かへり、十二時床に着く。

六月九日。晴天。けさも心地よく晴れ渡つた日、お掃除もすませ、かみもすんだ。日本橋迄買物にゆくので江木樣から頂いたおはんえりをかけ、お召しのあらい格子を着てうちを出る。歸途電車の內で紅吉さまにあふ、いつぞや月岡さまの御宅で御目にかゝつたぎりなので、紅吉さまの方では御わすれの御樣子、あんなおせいの高い方は、自分はわすれない、いつ見てもさつぱりした男のやうな方、あの橫むきで御連れの方と御話して入らつしやる處、ほんとうに可愛い、五色のお酒だの、遊女屋で遊んだのと云ふ評判の方とは思へない。新らしい女だの自覺した女でやかましい世の中に、裁縫だの、花だの、琴だの、料理だのより外に考へ

る餘裕のない自分も、女の一人、古い女の部類とでも云ふのかも知れない。此間或る本の內の時俘（PRISONER OF TIME）と云ふ記事をよんだら、ベニスの貴婦人で、窈窕花の如き美人があつた、或る時、自分の美しい甲冑で名高い女神の彫像の樣に裝ふて、其美しい姿を名ある畫工に描かせた。かうして永久若い美しい我姿を世に止めて置いて、花の色の褪せぬ間に、人の目から身をかくしてしまふた。一度でも其の面影に接した者に、少の衰へた樣を見せた事がなかつた。花の姿に華美を極めた離別の宴に現はしたその翌日から庭園の內靜かな家に蟄居した。幾度もたえて人に會ふた事もなく、かゞみのない部屋の內に我が姿をさへ次第にわすれて、只だ靜かに一生の終るを待つて居た。世の人にこの貴婦人は昔の物語りの美女のやうに思はれた枯葉の散つた濕つた狹い道に立つ階上を見上ると左右の窓は皆鎖され、扉は釘づけて居る、只だ婢僕の通ふ路のみこさはれて、そこから生きた人へ食物が運ばれる。永久に美しく活きんとする可憐らしい望み、永

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

久世の人に讃美されたい強い慾望、その貴婦人は鎖された窓の内で、なにを思ひ、最終の日を待つて居るのだらうか、幽かに洩るゝ馬車や、人の聲をきゝ、何に感じ居るだらう、少しも心が動かずにをらるゝだらう？、せめて自分もいつまでも若くつて居たい、此の貴婦人も新らしい女の部類かしら、面白くよみ終り、日記へ認め置き、床の内で自分は冥想の國へ、さまよひ出で、後夢の人となつた。

六月十日。晴天。けさは心地よき日なれども、風強く米さまと御母上さまと自分とお女中と四人で、大武へ寫眞を取りに行く。かへりに日比谷の松本でおすし、サイダーを御馳走になる、御氣毒に思ふ。四時半歸宅、東日出さん御來訪、いつもながらの花の姿に接す、劇場の内外の御話し伺ふ、見たりきく程樂なものでもなし大いそぎで御夕飯すませ、おかへりになる。夜柏木の豪傑ボールの選手の高山樣實さんの處へ見えらるゝ、自動車で意氣頗る盛ん、常はお顔もろくに見せない方がお酒の勢で盛んに姉さん〳〵を連發、弟の友達と思へば可愛い、山村樣は選手の内での可愛い評判の方とか色こそ炎天ぼしになるので黑いが、なんとなく人なつかしい方、御顔と反對にお聲がおとなしいのか、又おちついて氣に入つた、御妹さまは女學館の内さだめしと思はれる、御寫眞御約束申上て部屋へもどる、十二時日記認め床に着く。

外は新内の流し、實に身も世もない位お好き、流してくる人の前身が思はれてならない。

十一日より二十日まで

韓國興業會社取締
中山希賢氏令孃　中山よね子

六月十一日。水曜日。近頃は何となく氣分すぐれず、此日も前夜來よりの雨ふりつゞきにて一しほうつたうしくおぼえぬ。母上は今日より梅雨季に入りたれば、えて身體をそこなひやすき故一層氣をつけよとの仰を御心のほどうれしく感じぬ。やがて部屋の掃除をすませ、八時頃朝餉をへつれ〴〵なるまゝに、しはし蘆花先生の「みゝずのたはごと」など讀み居たりしも、倦みたるはあらねど、唯何となく心さへぬ程に擴げたる書をとぢ、日頃より通ひたる鍼醫の許に行かんと髮を結び、女中の筆を伴ひ、十時近く家を出たり。歸宅後雪子樣への御返事など認め入浴すませ九時床につく。

六月十二日。木曜日。六時床をはなれ朝餉を終り、床の間の花生けかへ、後文机にむかひ獨逸に在す從兄の許へ文認む。午後築地のみよ子樣の御許御訪ねして、御なつかしきまゝに時の過ぐるも知らず遂に長座致し何時御話のつくる樣もなければ、五時頃御いとま申し歸宅しぬ。夕刻叔父上御訪ねありしも相憎く父上御留守の爲め蓄音機など出し叔父の常々御好きの呂昇、朝

太夫などの義太夫御聞かせ申し、父上の御歸りを待ち居たりしも、十時頃遂に御歸りになりぬ。一足違ひに父上御歸宅になりたり。やがて伏床に入りしもむしあつく寢もやられざるまゝに、日頃愛讀する書を讀み居たりしも、何時しか夢路に入りぬ。

六月十三日。金曜日。朝より風烈しく吹き、雨さへ降り居たり。蒸し熱くいと心地惡しき日なりき。午後になり雨もやみ風もやはらぎたればとて、父上は何處にか外出せられたり。夕がた一葉の寫眞とゞき見れば臺北のなつかしき從妹靜子より送り來るものにて、二年ほど見ざる間に餘程大人びたるには驚かされぬ。六時頃父上は大内樣御同道にて御歸宅されしが、御部屋にて盤をかこむ碁石の音聞えぬ。氣分惡しき爲め入浴見合せ八時ふす。

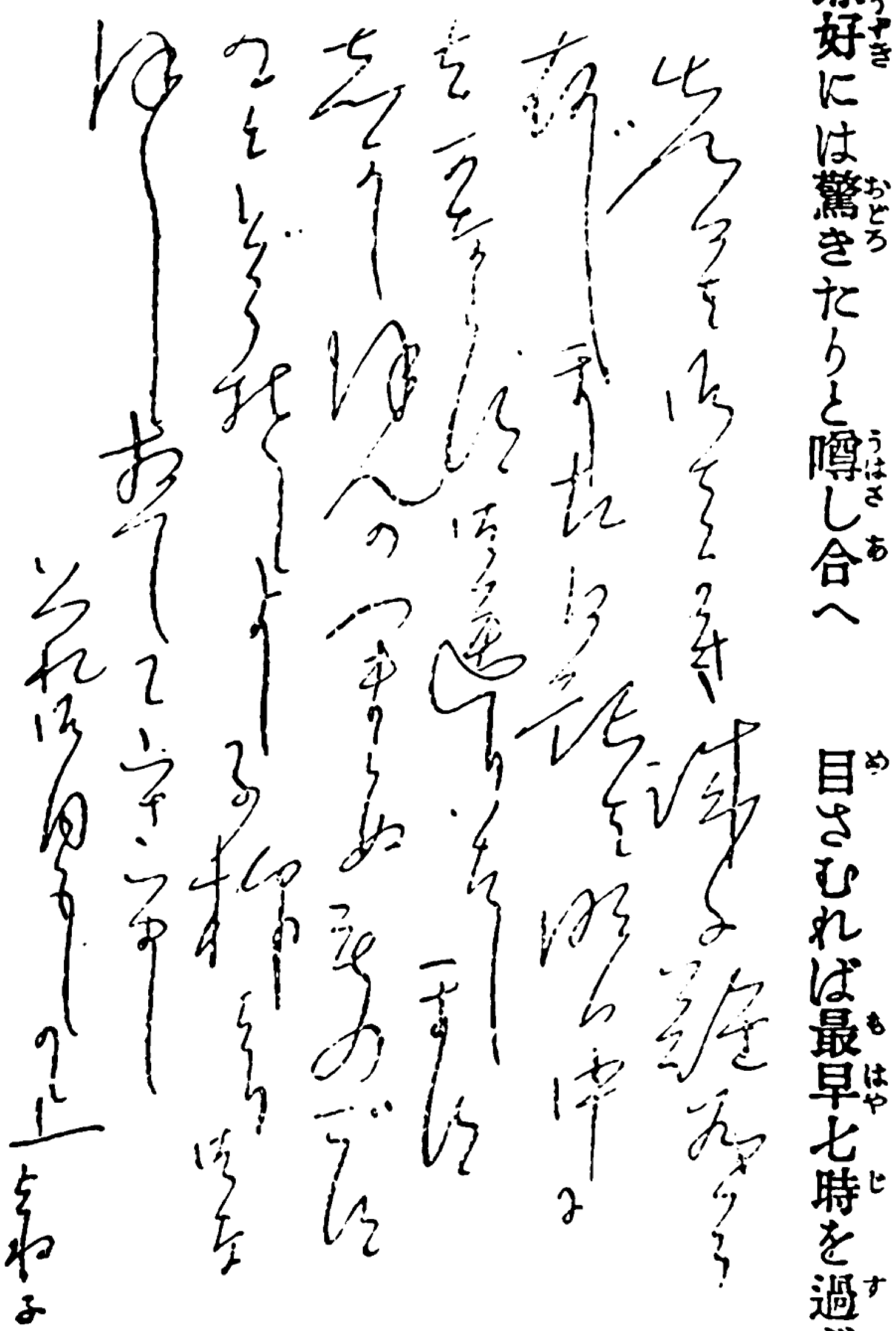
六月十四日。土曜日。夜來の雨はやみたれどいと曇りがちにて、今にも降りださん模樣なり。朝の内にと思ひたちつ、鍼醫の許へ出かけぬ。須田町に至りし頃小雨ふりしも間もなく晴れ心地よき日和となれり。歸途

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三越に立寄り正午家に歸れり。一時頃兄上は芝綱町運動場にて、此ほど來朝せる大學と慶應との野球試合ありとかにて、慶應かつべしと勇ましく御出かけになりぬ。

皆々兄上の平素よりの野球好には驚きたりと噂し合へり。常の如く仕事をはじめ縫かけの帶仕上ぐ。六時近くに兄上は御友人と御歸宅せられしも沈み勝にて御部屋に行かれたれば、今日の試合は慶應敗れしものとおもひぬ。空はだん〴〵曇りて雨さへ降り出せり七時頃親しき友鈴木千代子樣の御父君御見えにて、親しく御物語し、やがて父上も御歸宅せられまた御友達の御歸りになりたると見え、兄上も來られいよ〳〵賑ひよも山のはなしに時を過し暫らくして鈴木樣は御歸りになりたり。雨は一しほ烈しくふり、隣家にはうたひを歌ふ。時折ビワの音さへかすかに耳に入れり。十時臥床尙もビワの音ゆかしく聞えぬ。

六月十五日。 日曜日。しと〳〵と降りしきる雨の音に目さむれば最早七時を過ぎ居たり。何時晴るゝ樣もなければ、やむなく母上と例の鍼醫へといそぎぬ。近頃の天氣は降るかと思へば晴れ、晴るゝかと思へば雨となり、今日も歸りには心地よきほど晴れ渡りて、一しほ暑さをまし道歩むも汗いづる程となり、高下駄はけるもいときまり惡げに思はれたり。家に歸れば玄關には見知らぬ履物二足揃へあり。御來客の模樣なり、午後御客樣も御歸りになり、父上は天氣よければ散歩に行かんと仰せられ母上と共に女中一人をつれ御伴したり。



中山令孃筆蹟

幾臺かの電車をまち、業平橋にており、之よりさき京成電車にて四木に下車し、堀切菖蒲園に歩を運びぬ、都住ゐの者にとりては、田舍路をあゆむはえも云はれぬ趣あり。心地よく思はれたり。かしこの菖蒲も今を盛りとさき揃ひめさむるばかりの麗しさにしばし足をとゞめたりしも、四時惜しくも此處を立出、鐘ヶ淵より船にて吾妻橋まで行き、久方振りにて淺草觀世音にまゐりぬ。日曜の爲の非常なる人出にて混雜し、各活動館よりは盛に樂隊の音聞え賑々しかりき。僅ばかりの買物なし後歸途につきぬ。

六月十六日。月曜日。茶の間の時計が七時を報じ驚き床をはなれ、今日は龜井戸の秀夫樣御出との前日よりの御しらせ故いつもよりは一層ねん入りの御掃除すませ御待ち申す。やがて御伯母樣とお二人でお見えになり、久しく御目にかゝらぬ内大層なお變り樣、人形の樣な可愛いゝ御顏して僕も來年は幼稚園に行くのだと大氣焰、小さい緋ばらの樣な唇から僕が〳〵と口癖のやうに何やかやとおもしろい事ばかり、自分の年もわすれ一緒になつて遊ぶので皆に小供の樣だと笑はれぬ小供氣のない食堂もいつになくにぎやかに晝飯をすます。間もなく御歸りになりぬ。夕方S樣より御心こめし御手製の御はぎ頂く。

六月十七日。火曜日。昨日今日のあたゝかさに日頃手しほにかけし裏庭のなつ菊もやう〳〵にほころびそめ一人眺めんもいとをしく思ひたち、花ずきのS子樣に少しばかり參らせしに御叮嚀なる御禮狀頂く。

六月十八日。水曜日。六時起床、部屋の御掃除すませ十時頃よりかねて赤堀先生より御敎へうけし割烹の御稽古にと女中たちとコキールつくねあげ等を作り晝餉をすまし、しばしピアノの御さらひをなし居りしも、麴町の伯母樣より御電話かゝり、帝劇をお誘ひ下され父上の御許しを得て入浴後女中一人を伴ひて家を出で劇場にて御伯母樣に御逢ひし、評判のトスカ、喜劇富士登山、手古舞など何れも面白く見物し御伯母樣と御別れ申し、十一時歸宅臥床せり。

六月十九日。木曜日。すゞしき内にと思ひ立ち、母上

のゆかた縫ひはじめぬ。正午仙臺の親戚より九重送り來る。しるすべき事もなくむなしく一日をすごしぬ。

六月二十日。金曜日。朝より晴れ暑さ一しほはげしく覺えぬ。下女の筆は相變らずまめ〳〵しくはたらくので、共に洗濯の手傳などし、午前中は記す事もなくすぎぬ。午後横濱にかたづかれたる雪子様お尋ね下され二年ぶりの事とて御なつかしく、何からお話してよいやら、つもる話もあとやさき、二ヶ月程前より新家庭を作られし事とて、通學時代の御姿はどこへやら、御樣子も何とやら夫人らしく御見うけ申しぬ。四時の汽車にて御歸濱との事、むりに御引きとめも出來ず、やむなく御名殘申す、入浴すませ、日記認め、十時臥床。

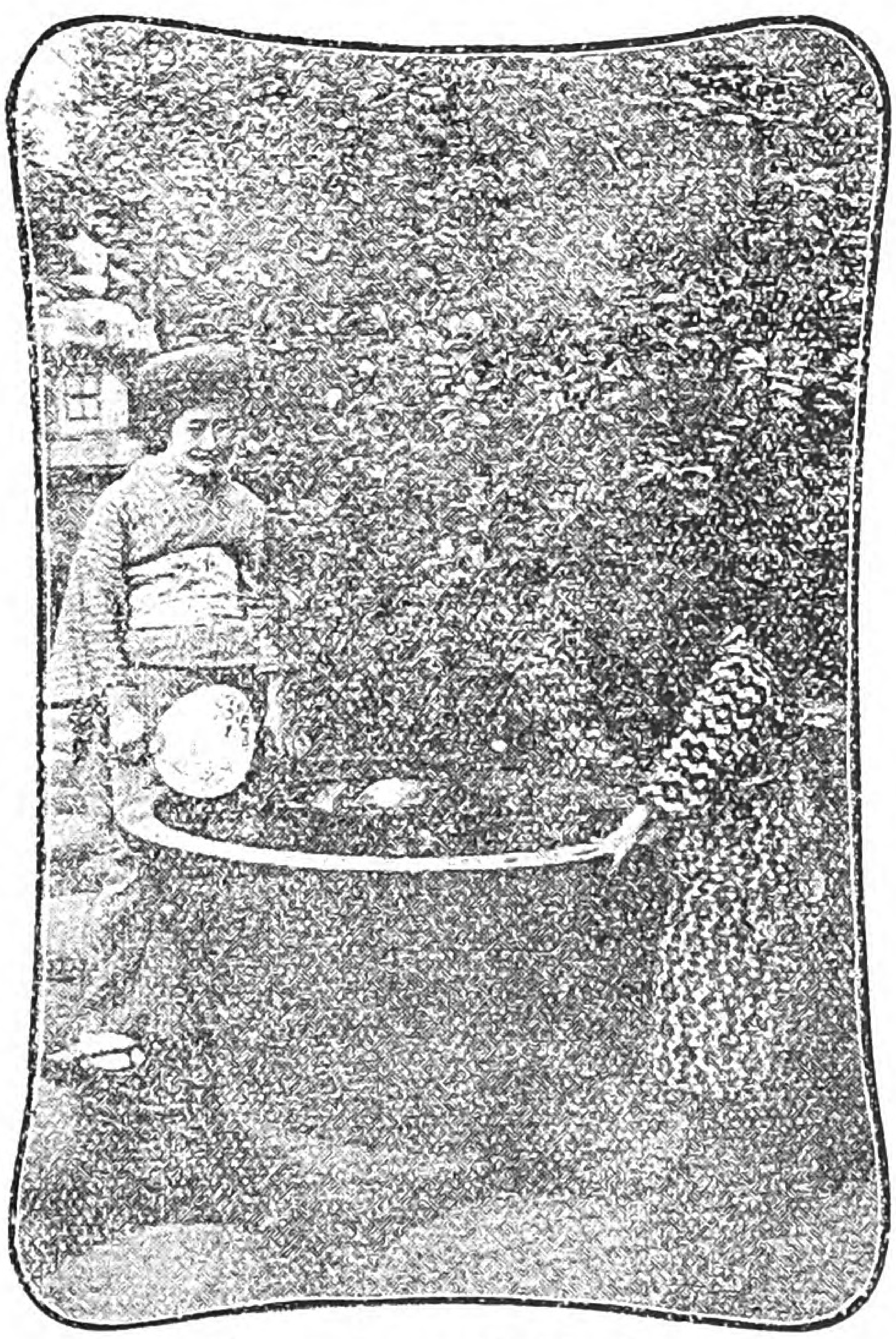
二十一日より三十日まで

成蹊實務學校長中村春二氏夫人　中村小波子

六月二十一日。土曜日。晴。芝生の何故か今朝ことに目だちたり。庭にいで、朝の清き空氣をすふ。六時寄宿に行き、尾寺三名けふの早びけの屆を丹下さんに賴む。六時半頃皆々して朝の食卓に向ひゐしにプロペラの音しきりに聞ゆ。皆々と共に庭にとび出し空をあちこちと見廻す程に、二つの飛行機揃つて頭の上を通る實に勇ましき姿、かく空中を鳥も及ばぬ勢して行きすぐるよと見とるゝまゝに、別世界の如き感にうたる。遠く〳〵蚊の如く見ゆる樣になる迄見送り家に入る。赤子しきりに泣く。長女の髮を結びて學校に出す。乳の消毒してより寄宿の獻立例の如し。

今日は尾寺子の伯父上にあたる桂與一樣の御葬式午後二時よりある筈。（新田二子はその爲め昨夜より實家に歸る）三人共新調の夏服着る。新山樣より御迎ひの方

來り三名打連れ行く。晝食後學校に行く。一時半主人も青山の登場へ行く。あとかたづけしてよりまた學校に行く。高商の大塚生來る。今日試驗すみ、明日歸國の由。けふの園藝にじやが芋をほる。大きな美事のもの澤山ほり出して皆々うれしさうに眺め居る。實に種子まき肥料やり草とりなどしてかく出來上りし樂しさをさてこそと思ふ早川氏來訪。出産の祝にてられし也。手紙の返事三通程しるす程四時を打つ。おどろきて臺所に入り夕食の支度に取かゝる夕主人歸宅、直に例の跣足にて學生等と鍬かつぎて畑へ行く。今夜臨時凝念法の方兩名來らる。大久保と千葉の方の由。けふ校庭の水蜜桃實のりしまゝ一個もぐ初ものとて佛壇に供ふ。尾寺二子今日新山樣方へ宿泊。



中山希賢氏のお庭

六月二十二日。日曜日。曇。昨夜は崇(三男)寢らずして泣きて困る。乳母をはなしてより未だ四五日しかたたぬ事とて、乳の戀ひしき故ならん。今日は日曜とて何となく心の內、裕なり。朝食後子供達ひきつれ一家總出にて立教の原へ一時間ばかりぶらつきて歸る次男稻村をみて、あれ、兵隊ちやんがといふ。主人しやがんでみて成程兵隊ちやんだと笑ふ。丈低ければ稻村の頭のみ僅に見ゆればなり。二階の掃除の手傳し掛物をかけかへ花などさす。けふ成蹊園の學生上野の水彩畫展覽會へ行きしがひる頃歸宅。後また主人と共に畑に出でゝ草花の植かへをす。午後二時昨日新山樣へ泊りし尾寺子等の「只今」の聲に早速玄關に出しに、新山樣御隱居樣來らる。二階に御通

しす。初めて御目にかゝりし事とて、尾寺子の事につきて色々御話しまた伺ふ。寄宿へ御案内し、畑も御めにかけ一時間ばかりにて御歸り遊ばす。子供達を停車場迄御送りさす。夕食後コスモス唐もろこしの植かへにて皆々總出。實に子供と云ふものは面白きもの用をいひつけられる事のうれしくて、四歳六歳の子供さへ、苗の運びの手傳してうれしさうにかけ廻る。

六月二十三日。月曜日。

晴。今朝は久しく氣にかかりゐし戸棚の整理、子供の着物の始末して午前中はすぐ。ふと、プロペラの音耳に入る。縁にいで、空を仰ぎしに一昨日濃霧の爲めに歸行出來ざりし澤田中尉の飛行機勇ましき速力して所澤に歸り行く。主人用事ありて自轉車にて外出。ラケツトを求めて十二時頃歸宅。みつ子來る。退院後初めて遇ひしこととて、色々話したまる。夕食後澁谷へ歸る。夕子供達と畑中を散歩す。

今日は母上の御命日とて例の御すしをつくりて佛前に供ふ。夕民一樣より送つて下されし園藝肥料届く子供達をば湯に入れてをる時、澤柳樣御いで遊ばす。



中村夫人筆蹟

六月二十四日。火曜日。

晴。朝の例の仕事をへてより小さき子二人に久々にて御伽ばなし二つする先頃中は水曜日には寄宿の子供達と共によく話しせしも、からだの重くなりてよりは怠り勝なりしまゝ、大よろこび。又あしたも、きつとをくり返して外へ出で、シヤベルにて土いぢりに餘念なく遊ぶ。學校に行きしに洋服屋來りしと電話

かゝる。尾寺子のシャツとその他の直しもの出來上りしとて持ち來りし也。少し具合あしくて賴みしと違ふまゝ直さす事とす。有明堂より書籍屆く。穗積先生御重患のよし御一家の御心配の程を御察しす。午後宮本生來りしまゝ御見舞の使を賴む。

先月の末より臥床の爲めそのまゝにしてありし寄宿の會計しらべなどする。用事の手紙三通したゝめ少しひまありしまゝ婦人文庫をよむ。

けふは篤子の生後三十三日目にて御宮詣りの日なり家例によりたゞ家中にて祝ふ。神棚を清め御酒、燈火赤飯など供ふ。寄宿生及其他の學生一同へ赤白の大福と夕食の膳少しく心設けしたり。

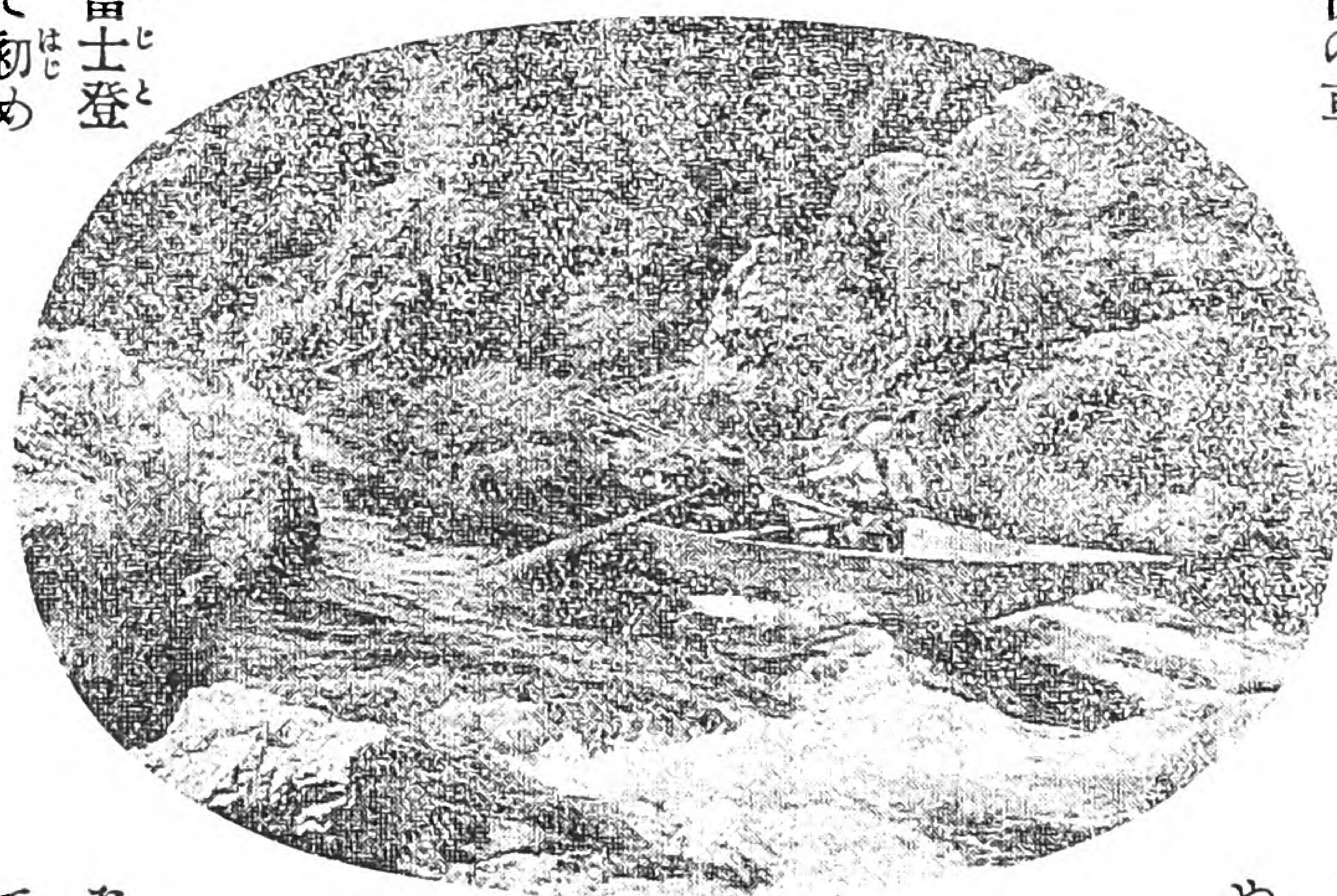
兎角てり勝なりしこの頃畑にても雨ほしさうに見えしが、晝頃よりあやしき雲さまよひ出して、夕よりぽつ〱落來りしが、やがて大雨となる。畑の土、やつといきつきし如く、前の唐茄子畑のみどり色こゝちよし。

六月二十五日。水曜日。曇。今日は皇后陛下の御誕辰日とて小學校は休みとて何となく賑かなり。けふの休みを幸、みさ子(長女)にいひつけて自分の部屋の掃除をさす。とかく不整頓勝にのみしておく事とて、幼き時よりの習慣の大切なる事など云ひ聞す。午後木村子を西片町の手島樣と共 同會 へ使にやる。新保樣の御子息御死去なされし由、皆樣の御力おとしの程御さつしする。御悔みのふみさし上ぐ。今朝水鷄二羽學校の敎室へ飛び込む。一羽は生徒等つかまへて鳥籠へ入れ麥など與ふ。他の一羽麥畑に鳴きゐしとの事きゝ、大かた夫婦づれなりしならんに、可愛さうとて夕はなちやる。越後の大竹氏より、ちまきを貰ふ、珍らしき品とて三時に皆々に與ふ。夕食後皆々と草取す。

六月二十六日。木曜日。曇。四時半子供の目ざめしまま起きいで畑道をぶら〱する。朝つゆを含みしみどり葉のいと美しく、そよ〱吹きくる風心さわやかにてこゝちよし。三十分ばかりして子供を下女にまかせて家に入る。長男を起して食事す。食事の折三男の主人の謠をうたへる膝に腰かけて、眞面目な顏しておと

なしく聞きほれて居るに皆々笑ふ。朝の仕事の終りてよりのち書齋の片づけす。半日かゝる。午後は學校にゆき用事を片づけたり。夕食後は例の草いぢり。今夕の凝念法六名。

六月二十七日。金曜日。晴。ダリヤの美しきもの二つ咲く、主人本鄕の手島樣へ行くにつき畑のじやが芋、キウリ、豆など、とる。凝念法を遣澤先生に御願ひし八時―九時の三年の習字九時―十時の一年の英習字の監督す。十一時主人歸らる。午後二時主人板橋小學校へ講演に行かる。二時半頃高見澤樣御二方にて御いで下さる。久々にて御目にかゝり御懷しく思ふ。先年富士の裾野へ行きし折のこと富士登山のこと、歸るさの水害にて生れて初めての草鞋キヤハン姿の事など、それからそれへと御話



急流を下る船

しに花がさきて、樂しく恐ろしかりし追懷にふける。けふはこれより諸所へ御廻りなさるよし、一時間ばかりにて歸らる。七時頃主人歸宅。今夜何やら用多く十一時過ぎ床に入る。けふの主人米田屋行き明日に延期。

六月二十八日。土曜日。晴。今日師範の附屬小學の學藝會なり。寄宿の方の明細書認めてより今村銀行へ使を出す。髮を結び身仕度して丹下さんと同道して小學の學藝會へ行く。恰度初まりしところ東海道旅行につきての趣向中で面白く思ふ。晝の時一度歸り、また午後の保證人會へ行く。校長の御挨拶野々村主事の色々の心得の事など御話しありて、一々擔任教授につきて日頃の成績、品行などにつきて伺ふ。尾寺の下の子二人はおひ〱有望のよし。長男の方何

分おもはしからぬよしなり。家にては一層督勵せしむべき由約してかへる。けふは新太郎子の誕生日とて赤飯をたき皆々して「御目出たう」を云ひて祝ふ。食前この誕生日を期してます〳〵勉強する樣主人より御話しあり。夜主人京橋の米田屋へ行かる。

けふは父上の御命日とて例の櫻飯をたき佛前に供ふ。

六月二十九日。日曜日。晴。今日はゆつくりと思ひゐしに末の子に起されて四時頃より畑にいづ。珍らしくも富士、箱根、秩父の連山よく晴れたり。キウリもぎに行く、日々もぎとりをれど少しもつきず。よくなることゝ思ふ。五時半他の子供の起いでしまゝ、皆々を下女につれさせて立敎の原へ行かしめ、朝の仕事にとりかゝる。一時間ほどたちて、ネヂリ花を澤山とりて歸り來る。食事すませて主人と子供三人の五人連にて染井へ墓參に行く。歸りを巣鴨よりして十一時前歸宅せしに、永井松三樣御孃樣と甥の方と御出下され御待ちのところなり。二階に御通しす。御父上の御悔みやら御無沙汰御詫びやら申上げる。これより上野に行かるゝよしにて三十分餘りにて歸らる。晝食後今夜の來客の料理にとりかゝる。三時高見澤樣御出遊ばす。六時頃澤柳樣の御見えになりてより手料理にて夕食すゝめまゐらす。久しぶりにての御集りとて昔しの御話、實に親しき友ほど樂しく心おけぬものはなしなど自分迄も樂しき心地す。九時頃より遣澤先生も御見えになり、二十年前の中學時代の御物語などます〳〵御賑かなり。高見澤樣けふは御泊りと一人ぎめしてをりしに明朝千葉へ御用事ありとの事にて十時半皆樣御歸りになる。

けふ井上玄一樣と、椿朗子の母親こらる。

六月三十日。月曜日。晴。けさもよく晴れたり郊外のながめ全く夏なり。未だ少し日の早きとあやぶみ乍らあまり心地あしきまゝ髮を洗ふ。寄宿のはる昨夜より腹痛にくるしみて今朝起きられぬまゝ、すみを手傳にやる。晦日の上、手少なにて殆ど一日たちづめなり新太郎子先頃より目が充血して何となく心配なるまゝ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

青山の眼科醫院へつれさせてやる。秋一も共に行く。夕歸宅、ごくかろき血膜炎のよし、二三度にて全治するとの事、秋一途中にて求め來し寫眞のオモチヤ、氣に入りてうれしくてたまらず食事もそこ／＼に學生達に一々見せ廻す。實に小供と云ふものは罪なくて愛らしきものなど話す。

この月は産後とて學校の方も怠り勝ち、從つて應接の事も少なく、また筆もやう／＼此頃もち初めしものの針もいまだもたず。外出もなさぬ事とて氣樂なる日日を送りしなり。

（遠山英子さんの前號の日記の續き）

五月三十日。金曜日。ふりつやみつ。

雨が降り出しぬと思へば又やむ。やみぬと思へば又一しきり、女中等は幾度乾物を出し入れなしたらんなど思ひやる。

けふのミセス、ミウイートの英語は、この前に出せしセンテンスにつきての御話なりき。

午後は樂しみの割烹なり。

今日は二度ぶりとするなれば大騷がし。

品物は蒲燒、豆腐、磯燒、ケンチン蒸鯛、かき玉子鹿の子苺等なり、家に歸りて父君や弟と味はう事の樂しさよ。

明日はいよ／＼歷史の試驗なれば、必死となりてさらふ、すぐ覺えてはすぐわするゝに大閉口。

五月三十一日。土曜日。晴。

今日は少しくひやゝかなり。

試驗のよく出來るやうにと一心に母君の靈に額づきて學校へいそぐ。

朝の時間は部長さまの修身にて「一時と永久」といふ御話なり、いつもながら部長樣の御話のお上手には感服する。

第三時間目は歷史の試驗なり、問題はテーベの衰亡の原因とローマの內訌と紀元前一四六年につきとて、レオニダスと、ハンニバルとなりき。まづ／＼大したまちがひもなくすみて大安堵。

午後は歌の會なり。

夕餉の後は父上や弟と五目ならべをしたり、窓の中をぐらきまでに生ひ茂れる木立のもとにて涼しき風鈴の音など聞きつゝ書物などよみたり。

あゝかくしてむなしく皐月もすでしゝなるか。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

若き婦人の缺點

明治學院長井深源之助氏夫人　井深花子

世の中が段々忙しくなり競爭が盛になつて來るに從つて、利己主義な行爲を耻としない人のあるのは殘念な事であります。取り分け當今の人の禮儀は虚禮に流れ、心にない禮儀を表面ばかり交換する風があつて、禮節の根本である眞實を忘れた人の多くなるのはなげかはしい事であります。人と應接するにも動作が粗暴であつたり、道で逢つてもお辭儀も叮嚀にしない、客にいつても常席につかないと云つたやうな人はさうあるものではありませんが、虚禮虚飾の交際をする人は少くはないやうであります。世の中は日ましに忙しくなりますから、禮儀も形式ばかりの禮儀でなく、精神的の禮儀になつてほしいと思ひます。

電車に乘つて居ると、知つた人には席をゆづゝても知らない人であると、自分の眼の前にどれ程困つてゐる老人が居ても、子供をつれた人がゐても一向知らない顏をして居る人があります。知つた人には相當の禮儀をしても、知らぬ人には甚しく無作法である人があります。此れは其の人の禮儀が精神的でないからであります。

此にあらためて申すまでもなく禮儀は人の眞實な心が外に現れてはじめて眞の禮儀となるのであります。いくら外に見える立居がしとやかで、その言葉が叮嚀でありましても、精神的の言語動作をしない人は必らずその裏面に僞をかくして居ります。まことの禮儀は本當の深切な心から一擧一動わり出したものでなくてはなりません。それで禮儀といへばむづかしい小笠原流のお辭儀のしかたや、襖の開閉のやうに思つて、人の前と、人の居ぬ時とを區別して動作を表裏するやうな事をしないやうにしたいのであります。小笠原流でも何の流でも構ひませんから、兎に角心の底から優しい感情をもつて知る人知らぬ人の區別なく、一樣に通用する作法を學んでいたゞきたいと思ひます。

ある人の話に獨逸に留學してゐた頃、獨逸人の家庭から、御飯を食べに招かれたが、どうも食卓の行儀が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やかましいので窮屈でならないから口實を設けてまで斷わらう〳〵としたと云ふ話でありました。日本の家庭では家での禮儀と、外に出ての禮儀とを別々にしてゐる家が多いので、よその家庭に招待せられると、あらたまつた禮儀を知つてゐないと無作法を致します。然し西洋では食卓の禮儀は自宅の禮儀を客にいつた際の禮儀も同一でありますから、客に行つても、客來があつても、無作法をする事がありません。平生家庭でしてゐる禮儀とかはりませんから、決して窮屈を感じないのであります。從つてどんなに禮儀正しい家庭に行つても、樂しく食卓を共にする事が出來るのであります。

　日本では子供などに、よそへいつてはさう云ふ事をしてはならないとか、よそへいつてはそんな事を云ふものでないとかと云ふ母親が多いやうでありますが、それらは僞善を敎へてゐるのであります。さう云ふ風によそゆきの行儀とうちでの行儀とを別にして了ふものですから、日本の子供は人の中に出るのを喜びません。

　禮儀は決してさう窮屈なむづかしい事ではないので深切からの禮儀ならばお辭儀一つしても對手を喜ばします。お産のお見舞にいつて、弱つてゐる産婦にくどくどとお行儀立をするよりも、心からのやさしいお辭儀一つしても、立派なお見舞であります。心から出ないものならばしない方がいゝとおもひます。

　中流の家庭の奥樣などは來客でもあると襖を開けるにも一々幾度となく立つたり坐つたりして仲々手數がかゝります。女中でも澤山ゐる家の奥樣ならば毎日さうして手數のかゝる禮儀をしてゐる方もありませうがまづ大抵は、來客の時丈で、人がゐない時は決してさうはしないのであります。

　私は別に叮嚀にするのを惡いと云ふのではないのでたゞ心に禮儀があれば別に人の居る時と居ない時とを區別しないでも手數のかゝらぬ行儀を通用したらよいと思ふのであります。影でしない事は人前でもしないのがいゝと思ひます。是れからの忙しい世に處するには今までの人のやうに二通りの禮儀を持つよりも、よそとうちとの區別のない行儀をつくつた方がいゝと思ひます。要するに禮儀は形式よりも精神の方が大切であつて精神の眞實が禮儀の根本であります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

訪問みやげ（五）

婦人記者

＊＊

鍋島侯爵夫人　鍋島榮子

▲近頃私の感じたことは　言葉遣ひの著しく亂雜になつたことで御座います。奥方とか、奥樣とか、御新造樣とか、斯う云ふ言葉が、區別もなく隨分亂雜に用ひられるやうに思ひます。何事も自由な今日の世の中で御座いますから、言葉遣ひのやうなものは如何致さうと隨意であるやうなもの丶、餘り區別立たず亂雜に使はれますのも如何なものかと私は存じます。

＊＊

バチイラ　オーブアーツ　北村美那子

▲苦しかつたことは　夫透谷に死別れてから、もう今年が二十年目で御座います、死なれた時は、お恥かしい話ですが、一圓の金もなかつたのです。里家からは歸つて來るやうにと云はれましたけれども、一旦人の妻となり子供までもある身ですから、何處までも北村の家にふみ止まつて子供の養育をしやうと固い決心を致しましたので、先づ一圓五十錢ばかりを借りて來て、それで以て一家經營の第一歩をふみ出したのでございました。

＊＊

下田歌子

▲心苦しいことは　私の生涯は誠に波瀾多き生涯で御座いました。それを自分から物語りをするのは心苦しいのです、それに一代の中に人間の眞價が分るものでなく、棺を掩ふて後定まるものでありますから、今日まで嘗め來つた幾辛酸は、まだ〳〵辛酸といふ程のものではありませぬ沁み〴〵感じたのは誤解といふことについてゞす、凡て誤解は自分から解かうとすると、恰ももつれた絲のやうなもので、益々もつれて了ひますから、餘程注意して解かねばなりませぬ。それには歲月の經過に任せるが一番宜しいので、歲月は裁判官であります。自分からは何にも言はず、じつと我慢して歲月のたつのを待ち、やがて自ら解りました時の愉快さは何物にもくらべることが出來

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ません。

＊＊

▲戀しいものは　岩崎重矢耶氏夫人　岩崎延枝子　私がもつと文才でもあつたら、こんな田舎にぶらぶらしてゐる間に、立派な作でも拵へるものにとつくぐ情なくなります。毎日平々凡々でますます世間から遠くなるやうな氣がします。自由であつて自由でない一家を持つてはまゝにならぬ事ばかり、二度と來ない娘時代がほんとに戀しう御座います。それにつけても都の空がなつかしくてなりません。

＊＊

▲最も不愉快に感じますのは　女醫　吉岡彌生　往診の家で、何時の間にか醫師を變へておき、私が其の家に往診にまゐりますと折角のお出でありますが、親類共の勸めで患者を病院の方へ入れましたから、と一寸體裁のよい繕ひ話其の實は當方に察せらるゝ語で逐ひ歸さるゝことです。實に此の時ほど不愉快ないやなことはありません。

＊＊

▲私の苦勞は　佐分利外務參事官夫人　佐分利文子　外交官の妻を表面からみますと、いつも華美やかに若若しく粧ひ、晴の場所に貴婦人と談笑し、珍味佳肴に飽き、出るに馬車あり、入れば婢僕あり、流し元の面倒も知らず、婦人の幸福を一身に集めてゐるやうに思はれますが、さて身になりますと任重く道遠くで氣苦勞はなかなかなものでございます。釋迦に説法ではございますが、外交官夫人を理想となさるお方は十分覺語なさらなければなりません。さうして準備としては多方面な趣味を十分に解して置くことでございます。

＊＊

▲好きな事は　丹波藥學博士夫人　丹波貞子　私の一番好きなのは掃除です、ですから塵掃を何本も柄の短いものやら長いものを拵へて置きまして、客間の天井や縁側の天井など拭くのでありますが、その時は自分で足繼を致し、女中は下に居て雜巾の絞り更へを仕て貰ふやうに致して居るので、これと申すも他人の大切な娘に若し怪我でも爲せてはなるまいと存じますからで、それ故に時としては、奥樣が仰有る浮雲といふのは何方か分りませぬなどゝ云つて笑はれるので御座います。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



鷄卵の話

—（つゞき）—

農商務省種禽牧場
長崎發生



(12) 消化する時間

鷄卵の利用は調理用と藥料用と種々と其利用法はあるが、生卵の營養の價値は云ふまでもない、一般に食物の消化に要する時間は、其形質や胃の狀態にも由るにせよ、普通は大體二時間乃至四時間と見る事が出來るであらう。今消化試驗を見るに、

固く煮たるもの、及フライとしたるもの	三時間半
軟く煮たるもの	三時間
焙りたる卵	二時十五分間
生卵として其儘のもの	二時間
攪拌したるもの	一時間半

之れで見ても煮卵燒卵よりも、生卵が一番消化し易い事が解るのである。斯樣に食物としての利用以外には、寫眞用の蛋黃紙に利用せられ、化粧用、洗濯用の原料に其他工業用に藥用に其利用は中々大きいだけに年々歲々其需要も增加してゆくのである。

(13) 卵の保存法

卵を保存するには、其方法數多ある內にも鹽と石灰は最も用ひられてゐる方法である。鍋の中に鹽を六十匁と石灰を卵一個の大きさ位とを入れ、水を二升五合程をよく沸かし、前の混合物に注ぎ加へ、よく攪拌せて冷くなつた時は、陶器類の器に保存すべき鷄卵を入れ、其上から此液體を漉して注ぎ、すぐ蓋をして適當の場所に安置する。斯くして數ヶ月間よく保存し得るのである。貯藏時期は四月乃至八月の頃がよいとせられてゐる。最後に卵殼の大切なる事を申上げて置きたい。

(14) 鷄卵の殼を棄てるのは惜い

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

元來鷄卵は髮毛を洗ふのに宜いとせられてゐる、それは白味の主成分の蛋白質が脂肪を乳化消化せしめて能力があるからである、そして之で洗ふた後はなんとなく美しく思はれる、夫れから卵殼は如何に大切であるかと云ふに先づ洗粉としてよい。

鷄卵は何處にでも使用せらるゝが卵殼は捨てる人が多い、出來るなら笊の如なものに入て日蔭で乾かせるすると質が脆くなる、良く乾いた所で、細に碎く、之を手輕に擂鉢の如なものに入れて丁寧に擂り潰し、篩にかけて粉末を分ける、其細粉に市中で賣る洗粉を二分の一程混せて用ゆるもよし、又米粉を少し煎りて細粉としたるものを二分の一乃至等分に入れ混合して出來上つたものは普通洗粉の比ではない、遙に優れた上等の品である。

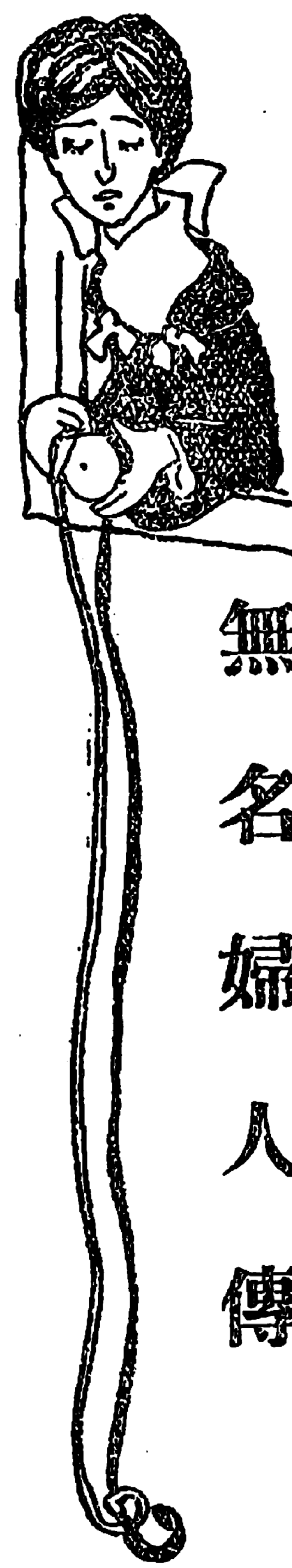
又卵殼は罎の中の汚れや、鍋や釜の中に汚れを落すに都合のよい品である。よく乾燥せしめ、よく碎いたものを用ふるので、碎粉するに強ち洗粉ほど丁寧にするには及ばない。之を罎に入れ水と一緒によく振りうごかすと奇妙に汚物は取り去られ、罎の底などが汚れて、如何にも取れぬ時、此碎粉を擦りつけて洗ふのである。之は鷄卵の殼のみに限らない、鳥類の卵殼は總て汚物を取りさるによいが、其中にも鷄卵は特別である。そして卵殼は其成分として、炭酸石灰九十三%炭酸マグネシユム一%三燐酸カルシユム〇、八%有機物四%を含んで居るだけに、よく產卵する鷄には卵殼を養鷄飼料としてやりたいものである。卵殼の代りには相當の石灰質分の蛤殼のやうなものをやりたいのである。(終)

○生靈●　　正宗白鳥

一度新聞に出た長篇小說が今度單行本となつて出たのである。主人公は女學校を卒業したばかりの繁子と云ふ女で、泥人形の女主人公と同じ型の溫和しくて、世間を少しも知らなくつて氣の好い女が、一皮一皮めくれてゆく實世間に觸れてゆく心理狀態を白鳥氏一流のキビ／＼した筆で描寫してあるものである。

(定價金壹圓、麴町平河町金尾文淵堂)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



無名婦人傳

（二八）親の犧牲となつて縁遠さの餘り氣の狂つた女

さみどり女（丹波）

青葉の梢も深うなる七月初旬の事でした。私は久しぶりに實家の母を尋ねました。

積つた色々の談話の後、母は思ひ出したやうに、

「ちい樣は、お氣が狂つたのだよ。」と云ひます。

ちい樣と云へば、あゝした勝氣なお方、女々しい事など思ひ焦れて、お氣が狂ふと云ふ風な性質ではないお顏を見ましても、少し眼尻の上つた所から、小さく締つたお口元、幼年な私達はいつも、

「ちい樣は、しつかりしてゐらつしやる」とうつかりした事など口へ出せない位に思つてゐました。

其方が何して、狂氣になどなられたのでせう。私は嘘の樣でなりませんから、母に尋ねました。

母は尤だと云ふ樣に首肯て、話し出しました。

母もはじめ人から聞いた時は、何うしても信じられませんでしたさうです。ところが或日、珍しくもちい樣が私の實家へ遊びに來ました。

私と然う近しくもなかつたちい樣は、實家へ遊びに行くと云ふことなどは之迄皆無でありました。

ところが其日は家へ這入ると直に、會釋もせずに

「をばさん鋏をかして下さい」と仰やる。

母は審しさに「何うなさいますの」と尋ねました。

薄紫に紅の小櫻を絞り出した羽二重友仙を、ちい樣は懷中から出して、ぱらりと廣げて見せました。

「これ綺麗でせう。私好きで好きで、耐らないので買ひました。愛さん(私)も屹度お好きです。私愛さんには色々お世話になりました。お禮に切つて上げるんで

す。」
と、早口に仰やいます。母は此時人の噂に氣がついたので、
「有がたうございますけれど、只今は愛も宅にはをりませんから。」と出來るだけやさしく云ひました。
「いゝえ、何卒鋏をかして下さい。かして下さらなきや破きますよ。」あなや手に力をこめ樣となさいます。
母はそれでも、色々となだめたり、すかしたりして漸く得心させました。するとちい樣はしくしく泣き出して、
「私は親の業晒しでお嫁入りが出來ませんの。いゝえ誰がゝくしたつて、村の人が皆然う云つてゐますもの。」
とあの羽二重を抱いて、



「お前も二十五に成つたの。なぜ嫁かないの。あなただつてもつて、然うよ、私はね私は親の業晒だから。」
つて、ちい樣ほどの方が、それは他愛なく泣いたり、笑つたり、ほんとに見てゐられるものではない。
と母は言葉を切りました。
ちい樣のお宅は村内での資産家で、今は誰に押しも押されも致しませんが、財産の出來た年數の短さと、お父上の仕打に缺點があるとかで、村受は至つて惡かつたのです。
お父上は他人許にでなく我家の者に對しても、末娘のちい樣に對しても至つてしまりやでございました。けれどお母上が優いのと、ある手から溢れると云ふたとへ通り、ちい樣は何不足なく二十頃までは樂く暮しました。

ちい樣の緣談は、ちい樣十七の秋はじめて起りました。双方の問合せや、見合まで無事に濟んで、いよいよ扇子の納まらうと云ふ時、突然先方からことわりに來ました。

次々に幾つとなく持出される緣談は、どれもこれも似合しいの許りのやうに思はれました。

けれど仲人を呼んで、好い返事を聞かせますと、「云ひ遲れましたが、彼方さんには外のがまとまりまして」と云合した樣なことを云ふ。

中には見合は何日にとまで取り定めておきながら、ちい樣が髪を結つたり、着物を更へたりして家の仕度も出來た頃、仲人だけが云ひにくさうに、日延を云ひに來たのもあります。

それも二十頃までは左程氣にもかけませんでしたが一二とすぎ最早や二十も半となりますと、世間の手前家の面目、殊に何不足ないちい樣の娘振に對して、御母上のお心遣は一通りぢやありません。

こちらでは幾程辛棒して嫁ける積りでも、先方から不承を云はれては何う仕樣もありません。

二十五の春又もや一つの緣談が起りました。

御母上は薄氷を踏む思ひで話しを進めました。

今度は幸にも見合の日、「今本人と二人づれで出かけてゐるから。」と云ふ言傳までありました。

で、ちい樣も勇んで仕度をなさる。家の中は急に明く思はれました。ところが肝心のお婿樣は二時間經ても三時間經てもお見えになりません。

下駄の音、靴の音、俥の遠音にまで心を跳らせましたが、何うした譯か言傳までしながら、とう／＼お婿さまはお出でになりません。

ところが其日、村下の茶屋で休んだ二人連の上品な男の人がありました。一人は四十位、一人は三十足らず。其四十男が、それとなくちい樣の內の話しをもち出して村受はよいかときゝました。

すると同じ樣に休んでゐた一人の男が、

「さうですね、まあ一等でせう。あんな家の娘を嫁になどしたら、人の恨だけでも出世は出來やしません」と一口に云つて了ひました。

其事が何かの拍子でちい樣の耳へ這入ました。

之迄かず多くの緣談も大方は恁うした人の惡口から破れたのだと云ふ事まですつかり知れました。

それからちい樣は、口惜しい、と耻かしいとを口癖のやうに、遂に氣が變になつたのでした。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

婦人職業案內（八）

山田菊水

女子藥劑師



▲一得一失

女子の藥劑師と云ふと、職業案內と云ふ方から云へば、餘り專門的であつて、餘り汎くもなく、而かも亦た近き將來に於て、大に發達する見込みがあると云ふ譯でもありませんが、この職業も亦た女子の新しき職業の一として紹介して置く必要があります。

西洋では女子にして藥劑師たるもの頗る多いと云ふことでありますが、抑も藥劑師の仕事は、女子の仕事として適當であるや否や、一應考慮を要する價値があります。女子に適せずと云ふ側の說を聞くは、女子は比較的應用の才に乏しくして、適當の藥を見計らつて顧客に賣ると云ふことが出來ない、また有益なる新藥を發見するなど丶云ふことも難かしい。加之仕事をするに敏捷を缺き、忙がしい藥局にあつてテキパキ處理して行くと云ふ樣な點に缺けて居ると云ふので、獨逸などでも女子藥劑師廢止論を唱ふるものもあるさうであります。然しながら女子に適すると云ふ側の說を聽いて見ると、其所にも亦た一理なきにあらず。女子藥劑師は男子の如く敏捷に立ち廻ることは出來ないが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

その代りに仕事の上に於て頗る親切であつて、殊にその注意深い天性は、調劑の上に於て遺憾なく發揮せられ、諄いほど念を押すから、分量を誤まつたり、藥を間違へたりする危險は、殆んど絕無と云ふべく、醫師の作つた處方を調劑するには、極めて適當であると云ふのであります。何れにも一應の理屈はありますが、何事にせよ一得一失は免れないもので、恐らく長所と短所とを兼ねて居りませうが、記者は寧ろ後の說に左袒して、藥學者とか眼の廻る樣な忙がしい藥局に勤むるものは格別、普通の職業と云ふ方から見れば、寧ろ女子の藥劑師たるに適して居ることを信ずるのであります。

▲現在の女子藥劑師

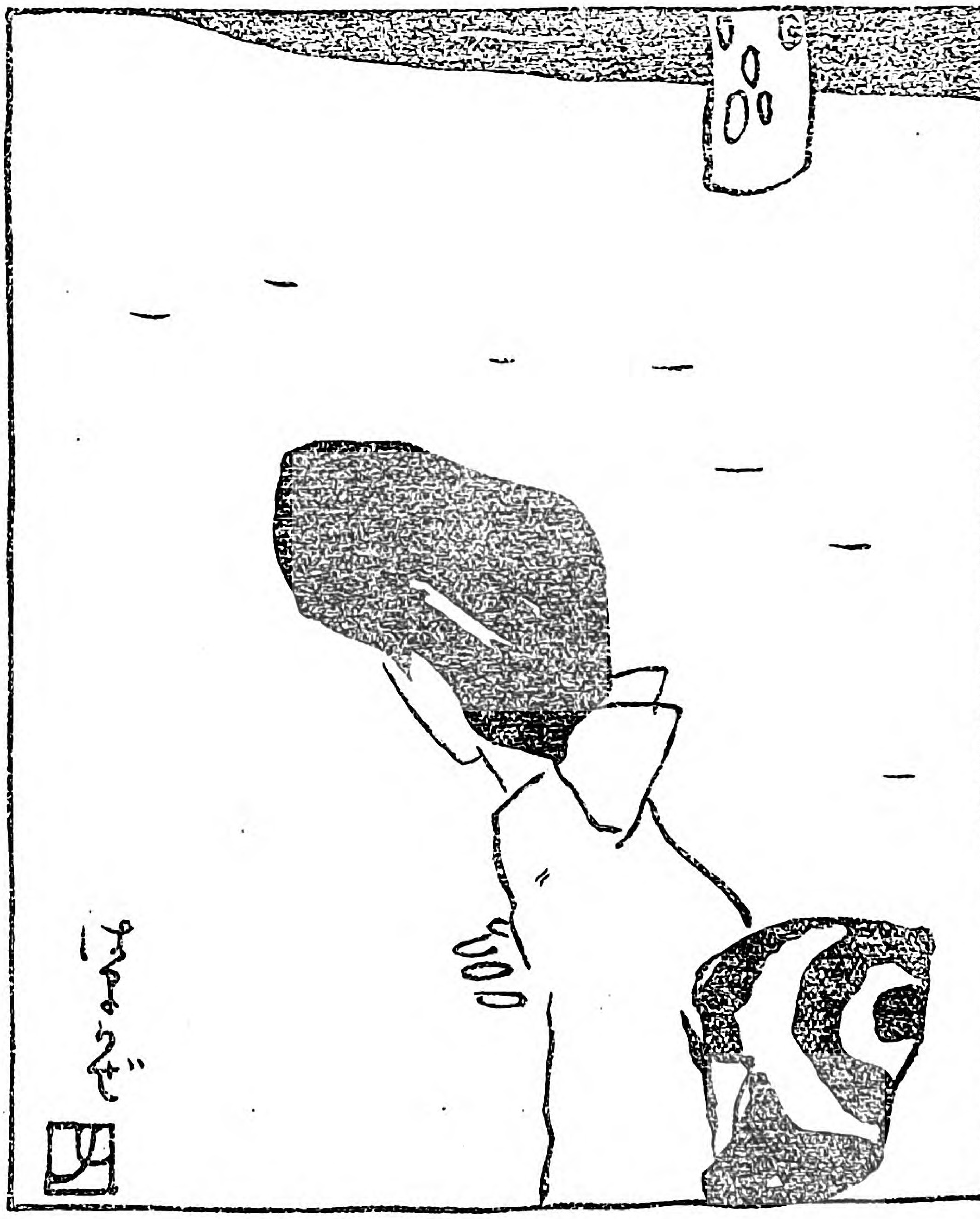
現在藥劑師の免狀を持つて居る女子の數は甚だ少數でありまして、恐らく全國で三十八か五十八に過ぎなからうとのことであります。而して其多くは藥業家若くは醫師の妻女であつて、獨立して之を職業として居

るものは、割合に少數であると云ふことであります。而かも病院などで女子の藥劑師を要求する聲は、漸く增大して來て、現に女子藥劑師のみを使用して居る病院もあります。例へば市ヶ谷見付の榊病院、青山の帝國腦病院、及び女醫吉岡彌生氏の東京至誠病院等は、全部女子藥劑師を使つて居るさうで、その他にも小さな病院には女子藥劑師を使つて居る所がありませう。只だ今日の所大きな病院で女子藥劑師を使はない理由は、女子藥劑師の數が少ないために生ずる一の困難があるためであつて、藥局長が女子であれば、その下に働く助手も矢張り女子でなければ工合が惡く、女子の藥局長の下に男子の助手を使用するとなると、助手の立場が困難となることがありますからであります。例へば病院内の組織に階級を立てるとすれば、院長醫員藥局長看護婦長と云ふことになりますが、女子の藥局長であれば同じ女性の看護婦長や看護婦との應對は、同輩同格となつて、名前を呼ぶにも「さん」附であるが、その下にある助手は看護婦長看護婦を呼捨にす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る、と云ふ様な可笑なことになり、何うも工合が惡いと云ふことであります。故に女子藥劑師を使ふには藥局全部を女子にするか但しは藥劑師一人で事が足りる様な小さな病院でなければ、いけないと云ふことになります。將來女子藥劑師の數が大に增加して來れば、病院の藥局を女子で占領する時も來ませうが、今日の所では病院に雇はるゝには、男子の夫れと比して多少の困難なる事情があるのであります

而して俸給は先づ月給十五圓乃至二十圓位から雇はれ



るのであります。

▲賣藥小賣店

藥劑師になつて病院に勤めるもよいが夫よりも寧ろ藥店を開業した方が面白い無論これには多少商賣上の手腕を要するので、免狀を貰つたからとて直に出來るものではありません故に新たに藥劑師を志す女子は、醫師又は藥業家の家族か若くは賣藥店でなくとも煙草店なり小間物店なり、何か商賣上の經驗のある女子か、但しは又た商家の子女でなけ

れば、成功しないと云ふことになつて來ます。

別に調劑するのでなく、單に賣藥を小賣する分には免狀も絲瓜も要りませんから、商賣上の手腕經驗のある者には誰れでも出來ますが、同じ賣藥を賣るにしても、藥劑師であれば大に都合のよいことがあります。それは醫師の處方によりて調劑するのは、醫藥分業の實行されて居ない今日柄、多寡の知れたものでありますが、然し藥局を開いて居ると處方なしに調劑を賴んで來るお客が中々多い。此種の調劑は藥劑師がしてよいか否かは、法律に不備の點があつて判決例も區々になつて居るが、內務省や警視廳では公益上この種の調劑を差支なきものと解釋して居りますから、規則による或る制限の下に調合して賣ることが出來ます。我々にしても一寸した病氣は醫師の厄介にならず、藥屋へ行つて胃散を作つて貰つたり、沸騰散を調合して貰つたり、下劑を盛つて貰つたりしますが、この種のお客が中々多いもので、所謂藥九層倍の利益の多い商ひであります。

他の利益は藥劑師と云ふ箔の付いて居るために、その店で小賣する賣藥の賣行がよいと云ふことであります。賣藥にも同じ種類のものが澤山あつて、お客は常に撰擇に迷ふのでありますが、藥劑師の出して居る店は自からお客から信賴せられ、これ〳〵の容體には何の藥が良からうかと相談を受くることが多く、其都度適當な賣藥を見立てゝやると云ふので、同じ賣藥でも藥劑師の店の方が賣れるのであります。先日記者の子供に匐行診が出來たので、近邊の藥劑師の店に行つて、何か良い賣藥を吳れと云ふと、何とか云ふ賣藥のビスミツト軟膏を吳れました、匐行診は醫師に診せた所で矢張りビスミツトをつけるのであります。藥劑師は斯う云ふ風に信賴されて來て、結局主人の資格のために、賣藥化粧品まで自から賣れ出して來るのであります。故に藥劑師の免狀は、調劑のためよりも、寧ろ賣藥の賣行をよくすると云ふ、可笑しな副產物を生ずるのであります。

▲藥店の資本と收入

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

薬店を開業するとなると何の位の資本が要るかと云ふに、勿論これは程度問題で一概に標準を示すことは出來ませんが、實際家の説を聴いて見ると、目拔の場所は別として先づ市内の普通の町に開業するとして、間口の二間もあつて家賃の十七八圓か二十圓も出やうと云ふ所に店を出し、看板でもかけて、一通り店を飾り、先づ見苦しくない小さな賣藥店を出すとしたら、ザッと五六百圓もあればよからうと云ふことであります。而してこの位の小奇麗な店を出して何んな利益があるかと云ふに、極端な場末でない限りは、開業當日の抑もから一日三圓位の賣上げはあると云ふことで、賣藥の卸値は平均六半掛で卽ち三割五分の利益がありますから、開業當座でも一日一圓餘の利益は見らるゝ譯であります。而して段々近邊にも知れて店が古くなるに從つて、賣上げも段々多くなつて來て、前に云つた位の店であれば、普通一箇月の利益が六七十圓と云ふ見當ださうで、先づ家賃を拂つても小人數の家族ならば食つて行けると云ふことであります。尤もこれは普通の賣藥店のことで、若し藥劑師が經營するとなれば、前に述べた調劑やら副産物たる景氣やらで、賣上げも利益も多くなる譯であります。兎に角此所になれば最早純然たる商賣となつて來て、商略上の手腕の如何によりて、如何樣にも發展することが出來ます。

▲女子藥學校

藥劑師となるために勉強する所は、今日の所麴町區紀尾井町三の女子藥學校だけであります。此の學校は陸軍藥劑官恩田重信氏の經營せる所で、明治藥學校の一部分となつて居ります。

恩田校長は女子の職業に就て我々と少し異つた見解を有つて居る人で、女子は徹頭徹尾家庭の人であつて獨立して職業を求むるのは間違つて居る、只だ藥業家の娘又は藥業家に嫁に行かんとする女子を、藥劑師に仕込んで見やうと云ふ所から此の學校を創立されたもので、主として藥業家の家運長久と云ふ着眼點から女子藥劑師を養成して居られます。然し藥劑師の家族で

なければ藥劑師となつて不利益だと云ふ理由はなく、誰でも希望さへあれば進んで藥劑師となり、藥局に勤めたり藥店を開いたりして一向差支を見ないのであります。

千住に矢島三男司君と云ふ藥劑師があります、その細君久子も同じく免狀を持つて居りますから、主人は專ら自分の賣藥を賣弘めるために外に出かけて働き、店は細君が子供を育てながら取締りをして居るとて、藥劑新聞などにも載つた、家運慶い藥業家でありますこれは夫婦共に藥劑師である場合でありますが、妻が藥劑師であつて夫が普通の商賣上の手腕のある人であつても、右の藥劑師と同一の慶たい結果が見られます元來女子の職業と云ふのは、女子が獨身で獨立して生活すると云ふ意味ではなく、何か腕に仕込んで置けば萬一の場合に狼狽しない、心强いと云ふ意味があつて家庭と離れたものではなく、家計を助けたり婚資を得たり、嫁して順潮の時には夫婦共稼ぎで家產を興し、逆境に處しては家運を殞さないと云ふのであります

故に藥業家の家族に限らず、農家の子女にも軍人の娘にも、趣味さへあらば藥劑師たらんことを勸むる理由を失はないのであります。

女子藥學校の入學資格は、高等小學卒業者又は之と同等以上の學力ある十六才以上のものとなつて居りますが、文部省では昨今藥劑師檢定試驗の受驗資格を、中學又は高等女學校卒業者に限るとし、十年の後に實施しやうと云ふ目論見がありますから、高等女學校を卒業した後に入學した方がよろしい、實際から云つても高等女學校を卒業して入學したものは、稽古に餘裕があつて著しく目立つて進步すると云ふことであります、修業年限は二箇年となつて居りますが、卒業しても直に檢定試驗に合格することは保障されません。從來の實例によれば、卒業後六箇月同校にて補習して、先づ學說の檢定を取り更に六箇月補習して實地を取ると云ふのでありまして、結局入學から檢定試驗に合格するまで、三年はかゝるものと見ねばなりません。文部省の檢定試驗には年齡の制限はありませんが、開業するには內務省の免狀を貰はねばならぬので、未成年の間は開業する譯には行きません。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三泣車（七）

我等が屍に優しかれ

情死は日本特殊の慣習で支那にも歐米にも相愛の男女の一方が、他の一方の死を聞きて自殺することこそあれ、同時同處に相擁して死する日本風の純然たる情死は、殆ど其の事例を見なかつたが今や端なくも墺太利に於て、而も貴族同士の間に之を見たのは頗る面白い。事は去六月十八日の眞夜中である、墺都維納市の停車場に列車が著いた、驛夫が只ある客車の扉を開くと、腥風一陣怪しくも面を掠めたので、車内を調べると、意外にも室の一隅には、一人の貴夫人が鮮血淋漓として、堅く銀製の十字架を抱きしめて横はり、床には人品卑しからざる一青年が、片手に短銃を握つたまゝ倒れて居た。女は伯爵夫人アリス、アルベルチ（三十）男は男爵クヱルシー（二十）と判然した伯爵夫人が認めた一片の遺書があつて、二人が到底望みなき戀愛の犠牲たりし旨を認め、最後に『吾等は諸共に死せん事を望めり願はくば優しく吾等が遺骸を取扱ひ給へ』とあつたさうな。年が餘り違つてゐたから死んだのだと京城日報は言ふけれど、それはちと受取れない。

男の乳母

名古屋市針屋町のお寺に「佛教信者組合」といふ札が掲げられた、信者も組合組織になる當世だ、これはまだい〻。口入屋に「男女乳母入用」と云ふ札が下げてある。男の乳母があるとは知らなかつた

鼻を剪る

福岡縣田川郡添田村、高橋某長女クマ（四つ）は、この間鋏で弟某（二つ）の鼻を切つた、之は平素母に「泣くと鋏で鼻を切るよ」と言はれ居るので、頑是な

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

き小供心に嬰兒の泣くのを止ます爲めに仕たのだといふ。おしつこをすると、おちんこを切ると母がいひいひしたので、弟のを切つてしまつた兒が信州にあつた劓、刵、刖、剕、いづれ刻ならぬは無けれど、宮刑に至つては天人ともに悲しまん、慘なる哉。

奇答

ある女學校の入學試驗に「いづくんぞ美果ををさむるを得んや」の答に

何時。どこに。そうならば。いつでも。そうゐのならば。いつ何どきでも。いつぞや。なんと。そんなふうだから。何時迄も。どら程であらう。たいしたもので。としたのがあり。

●「上聞に達せばや」に　天皇陛下に達したらば。この所をよくきくやうにして。このあんざい所に行き見たらば。此の所のことを天皇にお眼にかけたら天皇はさぞ驚くであろ。この有樣を電報で知らせたら早いだらう。

●「丹青の妙いふべからず」　つまら無いことを云ふこと勿れ。丹かいつてはなりません。自分の働きを名にとつていふな。青いのが妙になつてしまひます。

●「水魚の交を結べりとぞ」　惡の人と交をなすべからず。水の中に居る魚と交際するにいたれり。魚は水と交を結ぶも同じである。水中にすむ魚と交りは出來ません。

●「心許なし」　心や許すことが出來ない。心を許してはなりません。可愛さうである。氣がきかない。心にさはりがない。心がどうすることも出來ない。詰らないこと。あぶないこと。……この讀方を「コヽロユルシナシ」としたのは少くなかつた。

●「市井」　市の井。惡いこと。町の井戸。土地の名……これも「シイ」と假名をつけたものが九十六ばかりある。

●「法會」「ホウカイ」……と讀んだのが三分二位はあつた。……人の所に行つて面會すること。をがむこと。法律をきめる所の會社。多くの人が會議すること。法律の談話。法律の會議。會の規則。たゞねあふ。會の法律。ヤルコ。佛の祝。會のしかた。會社できめた法律。會や法。知らせ開くこと。坊さん。法律や部會開くこと。死んで二度とあはない別れ。色々のことがあつて寄りあつまること。

人相書付の捜索願

大阪市西區九條町四丁目筒井國雄といふ自稱易學大家は、妻あやが門生村田泰岳と提携して、金四十五圓を持つたまゝ駈落ちしたので、お手の物の算木さらく筮竹をひねつた上句、紀州と出たのでもあるか、兩人發見の人には、謝禮十圓を呈すべしてふ書面を和歌山署へ送り、其人相書には、丸髷姿の女の顔へ、黒子まで入れ男子の方は髮を分けて、鰌髭を生してあるといふ、鳥ニアラズ我レ其天ニ蜚バザルヲ知ル焉と、どんなにか先生商業道具をせつちやうしたらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

猫の生れ代り

丹波に、眠るとかぢりついて顔といはず手といはず何處とわけなしになめ廻すといふので追出された女あり……

新聞記者の無識

興行師から貰つて草の中へ隱しておいた蛇を、自分一人で征伐した顔つきで持歸り錢取つて人に見せた爲、囚はれた男が越後にある、新聞屋が某が大蛇を生捕つたと書いたので評判になつたのだ。こゝに「福井縣三宅村にて捕獲したる獸は、體の長さ一尺五寸、尾一尺三寸顏猫に似て、鼠色を帶び、前後の脚の間に三寸餘の幕樣のものあり。他の獸に驚かさるゝ時は、木に飛付きて、樹皮に其幕を摑みつけ離るゝことなし」と『朝日』にある、むさゝびを知らぬ天下の記者にも恐れ入る。

面白い誤譯

忠臣庫は日本を知れる限りの西洋人には大概知られてゐる、幾つかの飜譯も有る、獨逸に傳はつた譯には面白い文句が多い。かほよ御前が「それこそは妾が明暮手なれし御着の冑」といへるを「後醍醐天皇が明暮着けられた冑」としてある、御着とあるので御料の冑と合點したのであらう、「四十七字のいろは別かなの冑を和げて兜頭巾の綻びぬ國の掟ぞ久方の」を「國が太平であるから兜師は綻びを繕ふ術を知らない」とし「手を出して足を戴く蛸肴」を「蛸の禮式」とした。蛸入道の鉢巻踊を聯想して困つた「テレツクテレツクツゝテンテン」は「キツツキといふ鳥にツツケツツケと命令したものだ」には涙がこぼれる。

命がけの賭

お愛嬌に西洋の珍談をお目にかけやう此は飲んだくれが、賭には勝つたが、其爲に死んだのである。

A man in Covington, Ky., made a bet the other day that he could drink a pint and a half of Cincinnati whiskey in twelve hours. He won the bet and his widow remarked at the funeral next day that it was the first money he had earned by hard labour in ten years.

當月の園藝



▲ダーリヤ▼

天竺牡丹、唐牡丹、芋牡丹とも申しますが、ダーリヤと言へば知らない人はありますまい。菊咲とか、カクタス咲とか、いろ／＼あります。では菊咲とはどんなのか、カクタス咲とはどんなのか、一通りは知つておく必要がありますので、一應申しておきたいとおもひます。

　菊咲。今まで在り來つた普通の種類で、一重と八重とがありまして、一般に他の種類よりも花が大きい、殊に和蘭巨大種など丶言ふのになりますと、直徑六寸餘りにもなることがあります。

　綟れ咲。菊に似た細かい瓣が綟れて咲くので一重八重の別があります。

　コルレッツ咲、グローリフ咲など云ふのもありまして

中々に美しいものがありますが、今のところ菊咲、綟れ咲の全盛時代と云つてよろしいと思ひます。

　栽培するには、春早い内に、藏つてあつた甘藷の樣な球根を叮嚀に一つ／＼に切り放し、莖の土の上に出して植ゑ込むのであります。それは極く簡單で、只だ二三尺に生長した頃に、支柱を立て丶やることを忘れなければ、肥料とても別に好き厭ひはなく、六月から十月まで絶えず、黄、紅、白、紫、絞、覆輪等、色とり／＼に咲きます。種子を蒔きますと親木よりも變つたものが出來ますから、樂しみも多いのみならず、春蒔きますとその年中に立派に咲きます。尚挿木によつても蕃殖することが出來ます。花が濟みましたならば球根を掘り起して二三日日陰で乾かし、凍らぬ樣に鋸屑、籾殻等の中に藏つておくのであります。尤も東京邊のあた丶かい所なれば、そのま丶に厚く土を被せておきますと、凍る樣なことがなくて越年いたします。

▲チキタリス▼

一名を狐の手袋と申します。何故だかは知りません

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、何かそれには話があることだらうとおもひます。

花の色には白、紅、桃色等あります。それが四五尺と言ふ花梗のまはりに幾十となくづるりと下がる所は見事なものであります。此草の葉を乾して、心臟病によく効くと言ふ實芰答利斯丁幾を採ることが出來ます。

種子は細いので生え難いけれど、一旦生え出すと中中丈夫なもので毎年宿根します。春蒔のですと翌年から花が咲き、秋蒔のものも工合よく育ちますれば、同じく翌年から花を見せます。肥料は別に選り嫌ひをしません。

▲鷄冠花▼

夏秋の間に赤、紅、白、黃の鷄の肉冠に似た花が咲きます。矮性のは五六寸、大きくなるのは二三尺にも達するのがあります。花の形には球のやうなもの、圓くて細長いもの、穗の樣に垂れて居るものなどありますが、總じて家園になくてはならぬ花であります。

作り方は至つて容易であると云ひますのも、あの綺麗な花の中に千を以て數ふる、黑くて小さい種子を結びますによつて、捨てゝ置いてもこぼれる種子から生えますから、二寸程になつた時、適宜の所へ移植なさい。種子は春蒔の方がよろしい。

▲フロックス▼

夏から秋にかけて、白、紅、紫、覆輪等の小さいながらも、如何にも可愛らしい綺麗な花を、次々に無數に簇り咲きます。殊に星形種の如きは此上にもなく愛らしい花です。

普通の一年草ですから春に種子を蒔くのですが、直蒔になさる方が却つてよろしい。そして六日頃迄何回にも蒔き、尚挿木をしますと、年中此の優しい花を見られます。花が咲くまで、一二度薄い水肥をやり、心を摘み枝を澤山出させる樣にしてやらねばなりません。

▲向日葵▼

燒く樣な夏の太陽に向つて咲き誇る向日葵を見ると何時も何とも言はれない心がします。勢のよいのになりますと、一丈あまりにもなり、直徑五六寸もある菊に似て黃金色に咲きます、此の花は朝は東天を、夕方は西に日の沈む方に向つてゐるので、此の名をつけられたのですが、大抵は南に向つてをる樣です。一年草ですから、春は日當りのよい所へ種子を蒔き、ウンと肥料をおやりなさい。そして大きな花を見たいと言ふのなら、葉の腋から出る小枝を摘んでやれば、大きい花がみられるやうになります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

化粧問答　藤波芙蓉

問　私本年十九歳ですが、時候の變りめに顔面へアセボ大の吹出物が生じまして、直りかけた跡が剝皮致して取れません、尤も其出來ました時は大層カユく、掻けば掻く程赤くはれますが、硼酸で洗ひましたら如何でせう、何卒直ります方法を(大阪、小夜子)

答　硼酸位では駄目でせう。アブラ性でしたらリグールを酒精と等分に、若しアレ性なら、それを蒸餾水で等分に溶いて、夜間つけて御やすみなさい。

問　先生御發明の美髮劑と美髮香油を一所に用ひましても宜しいでせうか、若し差支ないとしますれば、何れを先につけましたら(八橘知子)

答　美髮劑は毛の軟な方、美髮香油は硬い毛の方の用料として製したので、二種共に御使用になつても差支はありませんけれど、御許様の毛質に鑑みなさつて、何れとも一種を御專用なさつたらよいかと思ひます。

問　私は至つて毛深で、剃つて間もなく又濃い毛が生出しますが、薄くなるか若くは生えなくなる法を。それに束髮にして居りますと毛切れがして赤くなります。毛髮のよくなる黒くなる油は(小石川、毛深女)

答　硫化劑で脱毛さすもよいが、むしろラノリン二に對し過酸化水素一の割合で煉合したものを御つけになり、徐々に其所の毛を赤く、白く、短かく、細くといふ順序で、遂に發生をにぶくなすつた方がよいでせう、而して今度文壇社から新たに御わけする事になつた強髮劑をつけ、その上に美髮香油を御つけなさつて御覽なさい。

問　(一)先生が御親切に御敎へ下さる處方を當地の藥店に持つて參りましても藥品が多く揃ひませんのですが、先生御手紙で御調劑を(二)頰紅用の紅は一番何がよろしう御座いませうか其賣店代價等を。(三)根かもじの當る處が段段毛が薄くハゲのやうになりました。(四)短時間で白粉のノリをよくする化粧法は(山口、はる子)

答　(一)能ふ限り御希望に應じませう。兎も角直接私宅に宛てゝ御尋ね願ひます(二)賣品の多くは猩臙脂若くはカルタシンで拵へてありますので、永く使つて居ると俗に所謂紅ヤケ致すものばかり、何れも是れと御すゝめするに足るものを見ません。それ故或は皆様方のために、私が自身に精選調劑して本社から御わけ申す様にしやうかと考へて居る所です。(三)同一の髷を同一に結ぶといふことは攝髮上の禁忌ですから、時々別の髷になさらんと其様なハゲになるのは當然のこと故、よく御注意なさいまし。而して其ハゲた所へ肉荳蔲油の少量をウイスキーにまぜたものをすり込んで御覽なさい、赤くなるやうでしたら、改めて發毛する方劑を御敎へ致しませう。(四)全體その白粉は何を御使ひですか、それによつて申上げませう。

問　白色劑として過酸化水素を用ひて居りますが、眉や生際の毛が赤くなつて困りますそれに他の化粧水では如何なる關係がありませうか、一時に他品と一處に使ひましても。(福岡、五月雨)

答　毛に少しでもつけば赤くなるとは、毎度御注意申して置いた通り、所詮は御つけにならぬやうになさるより致方ありません、過酸化水素水を御つけになり、約十分を經過した後でしたら、他の化粧品を御つけになつても差支ありません。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

問 (1)ベンヴインは當地で求められませんが、先生にお願ひが。(2)先生御發明のニキビ新劑は、私のやうな赫ら顔がます〱赤くなるやうなことは。(3)剝離劑を先生に拵へて戴くことは(宗關、愛讀女)

答 (1)承知致しました。(2)曾て文光堂から私の調製したニキビ新劑を希望の御方々にわけさしたのでしたが、少々事情がありましたので、其後その調製方を斷はりましたので、只今如何なる「ニキビ新劑」を賣つて居るか存じません、從つて果して赤くなるか否かも知りませんから。(3)拵へて差上げませう。

問 (一)肉色と新芽色の白粉を扮飾上に用ひますには、キセロルの普通の肉色及新芽色白粉に、どういふ方法作用を施しましたら宜しいのでせうか。新芽色を拵へるにはアルコールに云々との御言葉で御座いましたので、アニリンを求め自製して見やうと思ひましたが、少とも溶解致しません。又カルミンを肉色の方に混て見ましたが、矢張仰しやる樣にうまく參りません、何卒今一應精しく。(二)いつぞや髮へ塗るのに、カンタリス丁幾、沒食子浸劑等の調合劑がよいとの御教示でしたが、どうしてつけましたらよろしいか、その使用法を(神戸、少夜)

答 (一)キセロル肉色も新芽色も扮飾施術の上から薄過ぎる嫌があります故、これを一段共に濃くせねばいけんのです。これを濃く致すには、甲の方はカルミンをアンモニアに溶かした液を、乙は、葉綠色素を無水アルコールに浸出さした液と混和して製すので、アルニリンやカルミンは素よりアルコールには溶解せず從つて御許樣の御やりになつたやうなことをせよと、私が御答したことはない筈に心得ます。(二)毛揚子の類で、頭皮を帶赤發溫を感ずるまで摩擦して後、その毛揚子に右の合劑を含ませ、それを其上にすり付けるのです。

問 (1)百倍の硼砂水に硼酸末少量を混じて一ヶ月餘も使つて居りますが、更に白色の效果が見えません、却つて其が爲か如何か知りませんが、顔に腫物が出來て、ヒリヒリ致します。斯くても猶續けて用ひて居りましたら效果がありますでせうか。(2)當年まだ廿五歳にしかなりませんのに、眉間に八の字の皺が出來ました。何とかして幾分なりと之を隱すなり取るなりする方法は。(3)眉毛の薄い者は黄色ワゼリンを塗るがよいとの御言葉が在た樣に記憶して居りますが毛の長い者でも(函館、愛讀女)

答 (1)硼砂に硼酸を加ふれば、化學方定式は中性を示す理窟で、是なればアブラ性の人でもアレ性の人でも顔に腫物など出來る筈はないのですが、云はるゝ如きが事實とすれば硼酸の加量に過不及あつて、或は兩性(硼砂も硼酸も同性の樣に思ふて居る人もある樣だが、硼酸は酸性、硼砂はアルカリ性、兩々藥材としての働きを別にして居るのです)相殺するか、酸亡びてカリ性勝てるか此化學的變化があつて其樣な異現象を呈するに至つたのかも知れません、其なら御自分で硼砂水に硼酸を加へなさるより、化學的に合性された、硼酸性硼砂即ちポロ硼酸を百倍の蒸餾水に弱めて御使ひなさつて御覽なさい。併し其にしても一ヶ月や二ヶ月位で白色の效果を見やうとの御考へなら駄目です。(2)コールドクリームで如法の美容マツサージをなさつて、夜間即効紙を細く切り其皺の上に貼付て置きなさい。(3)差支ありません。

問 (一)クセ毛で、殊に油をつけると猶更ひどくクセがつきますが。(二)御飯を頂かずに居つてお腹の空かぬ法は(田舍の人)

答 (一)美髮劑を氣長く御つけなさい。(二)一見化粧問答の範圍外のやうにも聞えますが若しこれが絶食痩身法の間接保身のためと見れば私としての解答の義務を認めねばなりません。けれども絶食して空腹にならぬ法は手品師や魔術師ならぬ私のいまだ研究せぬ處、否斯樣な事實はこの現實界に到底あり得べから

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ざる仙境の夢幻談により見られぬ造說かと信じます。但し食物を採らざるも餓飢の感覺を去り徹夜しても睡眠の感覺より脫し、而して精神運動の機能を强め、大に過劇の勞働に堪へ得る方法でありませは、現に私の實行して居る處、晝間を多く來客の交際に費やし、夜間この方法で往々徹夜の筆硯に親んで居ります。けれども其方法さへ應用すれば、長時日絕食して居ても空腹の感こそ覺えざれ、絕食より來る體質貧耗を減ずる力を持つて居りませぬから自然體重を亡失し、從つて飢死するに至ることを免る〻わけには參りません。それに之れに用ゆるものは劇藥ですから素人方には御求めなさることが出來まじく、且つその量を誤りますれば却つてそれが反比例の障害中毒に罹る恐れがありますから、斯かる公開の問答欄で、迂濶に其內容を申上ぐることは御遠慮すべきが社會に對する私の探るべき道かと存じますので。

問 私は顏の色は白い方ですが、キメ粗くニキビやうの吹出物が致し、洗面の都度、顏がヒリ〳〵して赤く地バレ致し、非常に顏がホテりまして引ッ釣るやうな心地を覺え、口の週りに鹽カブレ樣のものが出來ますが(湘南の女)

答 リグノールを艷肌劑に約四分一程入れたものを御つけになり、ツエロリンを一丸づつ日に三回御のみなさい。

問 私はたぷ〳〵とアブラ肥えに肥滿して居る上に、顏が非常に赤く、臀部も人並より大きう御座いますが(牛込、なつ子)

答 白桃衣、冬瓜仁各二匁、白楊皮一匁を細末にして、それを六包となし、一包づ〻日に三回、食後空腹になつた時に井戸の水で御のみなさい、肉で大きなお臀なら體量の減すると共に小さくなります。但し出臀のやうな體格に關するのでしたら駄目です、斯樣なお臀は服裝術によつて蔽す外ありません。

〇幸子樣、佐藤榮樣へ、御二方からの御手紙が先日文壇社の方から廻つて來ましたが、通信料が添つてあるに係らず、又直接返事を吳れとの御文意なるに係らず、御住所御記入なきため、心ならずも延引に及びました、何卒改めて私方へ直接御申越願ひたう存じます。

問 (1)先生の御著書新式化粧法の中にお示しになりましたベンヅインとかプードルシャボンとか申す化粧品類は當地で揃へることが出來ませぬが。(2)御同著中に御說きになりました扮飾術のボカス化粧の法が手際よく出來ませんが。(3)毛穴の荒いのは(下關、き〻か)

答 (1)ベンヅインは藥店にありますけれど、多くはスモタラ又はハワイ產の下等品で、化粧料としてはシャム產の上等品でないといけません、これは自製するより致方ありませんが、御希望なれば拵へて進ぜませう、又プードルシャボンはキセロルのがよろしいけれど、割合に高價なるのみならず、わが邦にはいまだ僅かしか輸入されてありませんから、むしろ今度新たに本社から御わけすることになりましたトレートクリーム液を代用になさつたら宜いと存じます。(2)文章では著書以上に說明する事の出來ないのを殘念に存じます、所詮は習ふより慣れろの諺の如く、練習百遍技自ら達して頂く外ありません。(3)拙著中に述べて置きました法と料とを應用して氣永く御みがきになれは、自然綺麗な肌理となりませう。

問 (一)化粧法によらずして鼻形を格好よくする法を(二)顏色を美しくする法を(野菊)

答 (一)化粧法によらずとはおしろいで御化粧して格好よく見する法によらずとの意ですか、それとも所謂隆鼻術によらずといふ義ですか、何れにしても困難なことで只美容マッサージ術の應用によつて氣永く矯正する外に道はありますまい。この美容マッサージ術については、近き將來にだいて修容俱樂部から出版する化粧學講義に精しく述べます(二)も同講義に述べます。玆にては御答しきれません。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA





小說

その夜（地賞）

ちさ子

水氣に浸した海綿の千切れでもヒタヒタと打ち付けられる樣な軟らかい息詰りを覺ゆる夜であつた。まだ二三時間はと思つてゐた雨は周章しく降り出した。女二人は濡れて行く着物を氣にしい〳〵板戸を締めた暗い町を忙はしく歩るいていつた。

「此處ですのよ烏渡」

斯う言つて――さんの氣取らぬ束髮の前髮が彼方向きに消えると若かい連れの女は彈かれた樣に溝石を飛び上つて其處の露路口に小さく摺り寄つた。露路と向き合つた家の戸口から長い菱形を造つて往來に射してゐる燈火で薄黃く見えてゐた土は全然濡れてしまつて乾いた部分はもう殘つてゐなかつた。

一種の小さな冒險――斯う言葉に見出して女は微かに身震ひした。懷かしいといふ。遣瀨ないといふ。左樣いふ方面へ向いて行かうとする感情を妙に貶して、常識家らしく衒ふて來た心に不圖是迄經驗した事の無い力強い不思議な作用が起つて、今試みやうとする冒險、何となくじつとしては居られなかつた。

始めて逢ふといふ男を深く知り度いとは思はなかつた。奈樣人――只是れだけの問を意味もなく發作的に起して其刹那賴りない樣なそゝられるやうな氣分に支配されながらウカ〳〵と歩いてゐたものが少しの餘裕も無くそこへ行き當つたので、もつと間接に考へてゐた女には呆氣ない樣な念がせられるのであつた。無言で此儘歸つてしまはふかしら。斯うも思つて見たが又逢つて見度い樣な好奇心も

湧く。

「ヤ始めて。こつちへお這入りなさい。其樣處ぢやァどうも」

氣にしてゐた暗がりに潤のある聲が起つて黑い影が近寄つて來た。女は今更の樣に驚ろいて鳥渡身をよけた。

其處は、露路の中を横に曲つた、明るい十疊位の部屋であつた。始めて男の顏を正面に見た時、動搖いてゐる心を讀ませまいとあせつた女の眼は、何もかも直寫的に見拔いてしまつた樣な烈しい眼眸に射られて酷たらしく滑り落ちてしまつた。

女は竊む樣に其處いらを物色してゐた。光りの好くとゞかない壁際に置かれた、ミシンの臺と、古風な塗り簞笥の上に電光を斜に受けて、暗褐色に反射してゐる鏡臺とが自然と男の系累を思はせらるゝのであつた

「妹です―靜かな調子で斯う言つて引き合はせられた娘の顏を何故か女には見る事が出來なくて、丁寧に疊に摺り着けた恰好のよい髮と、大柄なつむぎの深い肩上がいつまでも眼に殘つてゐた。

「此の頃入社つて來た小さな男ね。いやにひとの顏ばかり見て氣味が惡い。」

「あなたが別嬪だからさ。あれで大學に居たつて言ふぢやないか、うちの社では學校さへ行つてると直ぐに採るんだからどうもいけない。」

「あんな事」でも此の節は編輯室にだつてうつかり行かれやしませんよ、さん〴〵からかはれるんですものTさんまでが？」

「主筆まで其樣こと言ふかなァ」

――さん達は餘り興味もなさ想にこんな言葉を交はしてゐた。女の落としてゐる眼は、開かれた中央公論の一ツ字句の上ばかりを幾度も這ふて行くばかりで、心は聲の方に引きよせられて行つた。

女はめつたに口をきかなかつた。男女は何物かにへだてらるゝやうで、考がへ考がへ普通の世間噺を殊更らしく話し合ふのであつた。女は何やら落ち着いてゐられなかつた。

軈て三人は雨の中に明るい町を歩るいてゐた。兩側の屋根から屋根へ引き渡したイルミネーションの光で濡れた、空間の銀のビラが美くしう輝やいてゐた。女は――さんと一つ傘で鳩の樣になつてゐた、男は茶色の中折帽子を幾度となくなほしながら。

割合に平氣で女はそこの活動寫眞館へ這入つた。白

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い幕には西洋悲劇が映寫されてゐた。どれも〳〵同じ様な顔と、過ぎた烈しい表情が女には氣羞かしく思はれた、それでも熱心に觀入つてゐる女の純な心には、變つた連れのこと等、少しも割り込んではゐなかつた
男は此様なものではあきたらないと云ふやうな容子をして始終何か別な事を思つてゐるらしかつた。
「オッ君。一體怎うしたの」
場内が明るくなつた時、前の椅子の人が振り返つて斯う男に聲を懸けた。其の男はもう夏帽子を被つてゐた。
「オ君來てゐたね。イヤ今度はヒドイ目に遭つて來たよ」
「左様だつてな。併し何か理由でもあるのかい」
「理由なんて有るもんかネ。つまり巡査等が好いかげんな證言を列べたて丶僕等を陷害したんだね」
「エラい事を行るな、して何日位入監て來た。」エ二十日そりやどうもね」



（地賞）　後ろ姿　陸前　黄川田かよ

女はセカ〳〵と二人の話に聞き入つてゐた。また急に薄暗く成つた。
わづかな趣味の一致——是れだけの事で向かひ合つて同化しやうとしてゐる二つの心が女には深く考へさせられた。奇蹟——此の言葉に宛てはまる事を自分のて丶ろにかへて見出した事のない女は、單調に歩るいて來た自分の生活に思ひ合して不思議な感に打たれるのであつた。それとなく他人に訊いて見た男の性格。文字の上に聞いた聲などを思ふと、女は暗らい處に引摺られて行く樣な恐怖を覺えてソッと此處から拔け出し度い樣な氣分にもなつた。それでもある力に絶えず引張

られてゐた。氣まぐれだとも思つて見たのである。

烈しい力を先方の胸に發して置き度かつた。から思つては泌み〴〵となり得ない自分の性分があきたらなく思はれた。こん〴〵矛盾が女の胸裡にはゴタ〳〵と、わだかまつてどうにも靜止されぬ程な狀態に陷入つてゐた。

「歩るけますか。」「エ大丈夫？」

駒下駄の鼻先で爪立つ樣にして蹤いて來る女の足元を男は氣遣ふ樣に、何度も立ち止まつて、斯う言つて見ては、何となく物足りなさ想な容子をして歩いていつた。

（評）大切なものを逃して、わけもないことを取りとめもなく書いてゐる、もつと好い小說を讀んで呼吸を覺えねばならぬ。

晝寢（地賞）

廣島縣　葵の花

ふいと、深い眠りから醒めたすみ江は重い事鉛の樣な頭を擡げてあたりを見まはした。

すみ江は横になつてるまゝ兩手を組んで其の上に頭をうつぶせに乘せて一歩一歩夢の中から遠かつて來る自分の心をまつてゐた、明るい晝のひかりに頭が瞭然りしてくると同時に今迄何處にかひそんでゐた哀愁の影が寸時もゆるさず壓迫してきた、つと起き上つたすみ江はフラ〳〵とよろめき乍ら甚だしく疲れた精神と肉體とを持て餘した樣にぐたり緣端に身を投げ出した手枕をして居た故で疊のあとが痲痺れた腕に赤くいろいろな形に付いてゐるのを撫で乍ら、すみ江は今まで押し徹して來た主張を、何者かに依つて見ん事拄げられた時の樣な不愉快な情緒をなめてゐた。

立ち並ぶ庭樹の幾重にも重なつて繁り合つてゐる青葉に、强烈なる太陽のひかりがキラ〳〵と目を射る樣に流れて、葉と葉、枝と枝との僅なすきからも洩れた光線が、毛氈をしきつめた樣に苔の上におちてゐる。なまぬるい風が梢に訪るゝと、サラ〳〵と聲立てゝ地上にゑがゝれたる青葉の黑いかげが一葉、一葉にふるひ怖く樣にすみ江はどんよりとした瞳を落してゐた。

すみ江の腦裡には先刻からあの手紙のことが丁度雲が湧く樣に表れて來て、それが次第々々に濃く廣くひろがつて行くのであつた、そしてもう今では他の何者を想ふすきもない丈、頭の全部は此の事のみでみたされてしまつた。

すみ江は夫を深く、深く信じて居た。それ丈強く腹

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

立たしさを覺えた、かの手紙の文句で見ればこれが作今の事とはどうしても思へなかつた。餘程以前から深い關係の結ばれて居て、しかも賤しい女だと云ふ事迄一目瞭然にそれと察しられるのであつた、すみ江は拭ふべからざる屈辱を與へられた時の樣なたへ難い程遣る瀬ない情緒になつて了つた。私は馬鹿にされて居たいや愚な女であつた、良人に恁うした秘密があるのを妻たる自分が夢にも知らなかつたと云ふのは何たる迂濶な話であらう？、こんな事忘れても人にきかせたくないのだが、已に口さがなき人の噂のたねとなつて、知らぬはお前計りとよくあのお人好の仲間入させられて嘲笑の的となつて居るかも知れない。白い清いものとのみ信じて居た雪が、案外汚ない地上に降り積つて居た時、それと知つて再び手に掬ひ、口にするものがそも幾人あるであらう？、地に落ちた良人の節操は、已に既に人のあしげにかけられてゐるのである、だが自分には此の汚れたる節操を、再び元の潔白にひるがへさねばならぬ義務がある、それは妻たる自分の立場からよりも、與へられた屈辱に對する極めて親切な忠實な心からである、能ふかぎりの努力にも價なき時は最後の手段を取るまでの事だ、とすみ江は恁んな事繰りかへしくりかへし思つた、そして今にもかへつて來る良人を、どの心して迎ふべきであるかを思ひ惑ふた。何處までも知らない振りを裝ふて事を他日に期すべきか、かの手紙をつき付けて—今初めて知つたかと思はれるのも口惜しいが—充分いさむべきか、はたまた何か適切な言葉を見出してそれとなく良人に疚しい思をなさすべきか、此の三ツの心は優劣なしにすみ江の腦裡をかけ廻つた、すみ江は小一時間も呆然りと考へて居た、つまりは此の心のはげしい爭を何れに贊同するともなく傍觀して居たにすぎない、すみ江の頭の中は丁度紺碧の淵の渦卷に草の葉を千切つてなげた樣なものであつた、何時迄も何時迄も同じ思は同じ所を廻轉して、「是れ」と云ふ纏つた想は浮ばなかつた、さうした内に昂奮し切つた神經が漸く落下して來て、すみ江の心はぼうつと煙に包まれた樣な氣分がおそふて來た、と睡眠と云ふ慾望がふいと頭を擡げた。

いつもは面倒な位ゐにしか思つて居ない眠りなるものが、今日は又なく趣味がある樣に思はれてならなかつた、暫くでも此の苦しい心とはなれてゐると云ふ事が、どんなに嬉しかつたか知れない、多少は自暴氣味も交つて居たので、すみ江は出來得る丈あんきに兩足を

伸ばして横になつた、そしてうつら〳〵してゐる内にいつか夢の中に引きこまれて了つてゐたのである。

ねむりから醒めたすみ江は、また先刻の苦しい思ひを繰りかへさずには居られなかつた、すみ江はつくづく男の心と云ふものをさま〴〵にゑがいてみた、そして同じ庭の花をいつ迄もぼんやり見てゐられないで、野にも山にも、至る處に咲く花の美しいと目に映つたのを、容赦なく手折ると云ふのが男の通有性であると人の云つた事を、すみ江は思ひ出して、不可解な男の心を疑はずには居られなかつた。妻てふ名を蹂躙されても、何んの不平も、不滿も、言行に表さないで、唯唯諾々と盲從してゐるのが、溫良な婦人であつて、男の氣儘を通有性だなんで觀過してゐる今の世の妻くらゐ、ばかげた下らないものはないと思つた。責任だの義務だのと云ふ名稱の下に、凡ての自由を束縛され、容易く身動きすら出來ないのみか、慰藉にかゆるに屈辱と痛苦とを與へられて、如何する事も出來ないで、逡巡してゐる最も哀れな悲慘な女の群に自分も一歩ふみ入れて居るのではあるまいか、自分と云ふものは既に良人の心からは過去の人として葬り去られてゐるのではあるまいか？、否そんな事はない筈だ、人一倍優しい良人の深い愛情は、日々の言行によつてあきらかである、とすみ江は思ひ直しても見たがそれが何んだか自己を欺いた、一時の氣やすめの樣に思はれてならなかつた、すみ江は神經質の女丈に今迄味つた事のない寂寥を、沁々と感ずると共に、故鄕の空を懷しんだり、父母や、兄妹や、友達の上を非常に戀しく思つたりしてゐた。夕餉の仕度をすべく勝手元を働いてゐる時も、嫉妬、痛恨、猜疑、など云ふ淺ましい想ひが入りかはり、立ちかはり、すみ江の腦裡を訪れて、寸時も此の苦悶から遠かることも能はないで、日のだんだんと落ちてゆく色にも、日暮し蟬の忙し相な聲にも、急に物悲しく泣きたい樣なセンチメンタルな情緒を味つてゐた。火ともし頃、良人は平日にかはりのない面色をしてかへつて來た「何んと云ふ白々しさであらう？」すみ江は今迄に大分忘れかけてゐた例の手紙の事が、主人の面を見ると同時にムラ〳〵と胸にこみ上げて來て、無茶苦茶に腹が立つてならなかつた。だが高潮しきつた惡感情を、無理におさへおさへて、幾度かムグ〳〵と唇は動いたが、すみ江は此の事については、何んとも云はなかつた。けれども包みきれぬ悶は自然と顏色に表れて、平日の樣に晴々しい笑や、ハキ

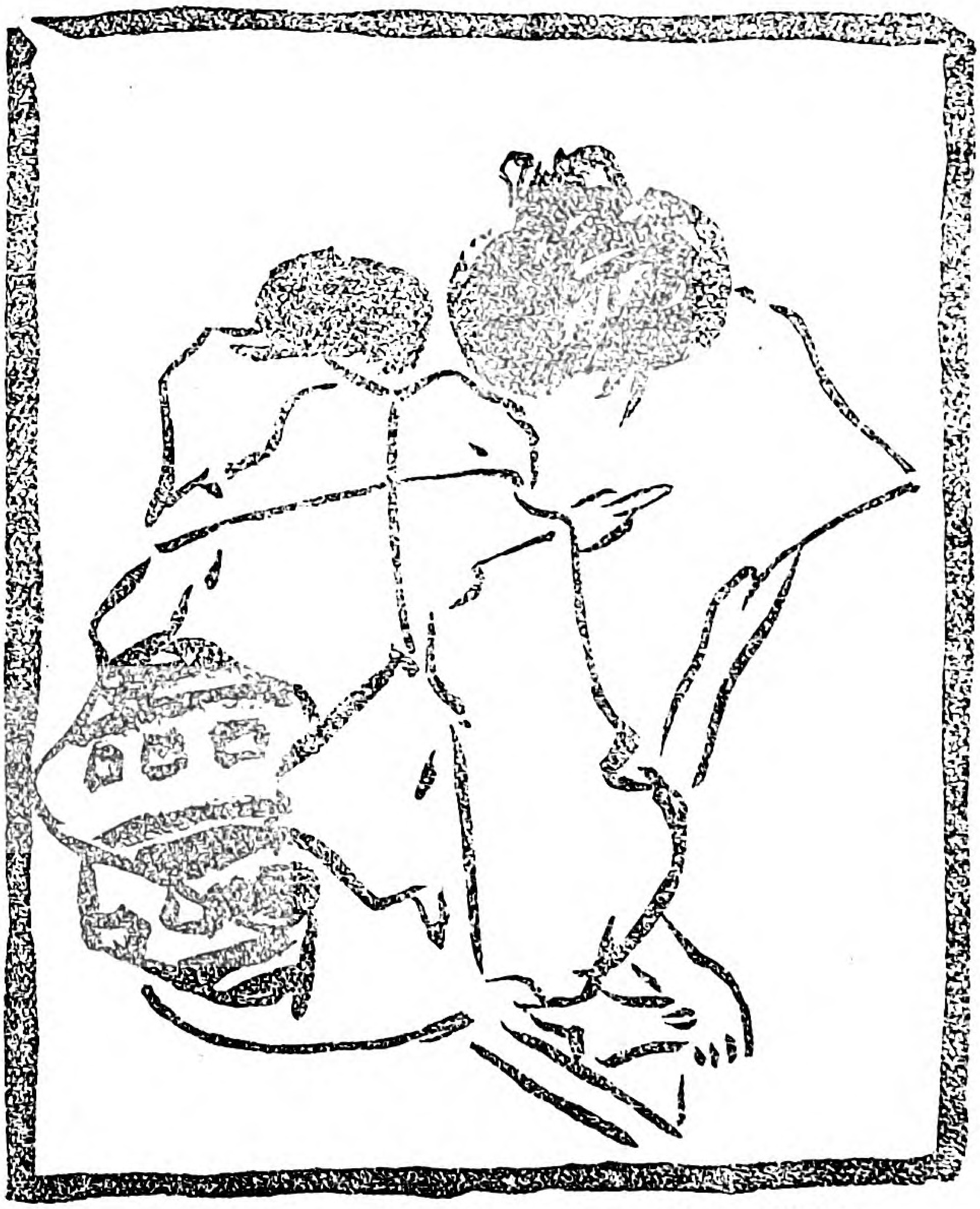
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ハキした口をきくなんて事は忘れてもしなかつた。絶えずうつむき勝ちに、沈んだ色を見せて良人の心を樣樣に惑はしてゐた。

「どうしたのかい、大變面色がよくないよ何所か惡いのか」

と幾度か良人は優しく恁んな事を云つて、量りかねたすみ江の氣を伺ふ樣に不安らしいおもゝちできいた、すみ江は其の都度頭痛にてとよせて其の場を濁してゐた、親切な良人は其を正直にきいていろいろとやさしくいたわつた、すみ江は何んと云ふわけはなしに良人の前に身を投げ出して泣けるだけ泣いて見たいと云ふ樣な情緒になつて居た

（評）解釋が多くて煩しい、此の人は心理を解剖する力だけ持つて居て表はす力に缺けてゐる。



（人賞）　子守　大阪　一夜子

湯屋の女（人賞）

牛込　猪野鈴琴

同じ町内に新らしく湯屋が建つてから大分客足が減つて來た。お絹は然う思ひ乍ら、着物入れる竹籠を丁寧に重ねて居た。曇つた姿見の面へ、ハーと息を吹き掛けて、乾いた布で磨いて見た。而して大きい束髮の前髮を兩手でなで上げて、自分の姿を映して見た。紅勝つた友禪の帶と白いエプロンが際立つて見える。棒縞の黒つぽい着物と、藍納戸色の半襟が地味過ぎて嫌だと思つた。中指の腹へ唾をつけてスーッと眉毛を輕く撫でると鏡の前を離れた。時計を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見ると午前九時だつた。男湯の方では書生らしいのが二人、湯槽に浸つて琵琶唄を歌つて居た。女湯の方へは未だ一人も這入に來無い。湯舟の蓋も、流し板も積んで有る桶も、白く乾いて居た。お絹は乾いた流し板を踏んで、三助が火を炊いて居る前を通つて、古い梯子を昇つて行つた。襖を開け放しに仕た二階は八疊と六疊の二間だつた。其處には簞笥も長火鉢も置かれて有つた。

　破れた所へ雜誌の口繪を張り付けて有る戸棚の唐紙を開けて、お絹は行李の中から淺黄色の風呂敷包みを取り出した。

　障子の方を向いて縫物仕て居た母は、ソツと振り返つて見て、

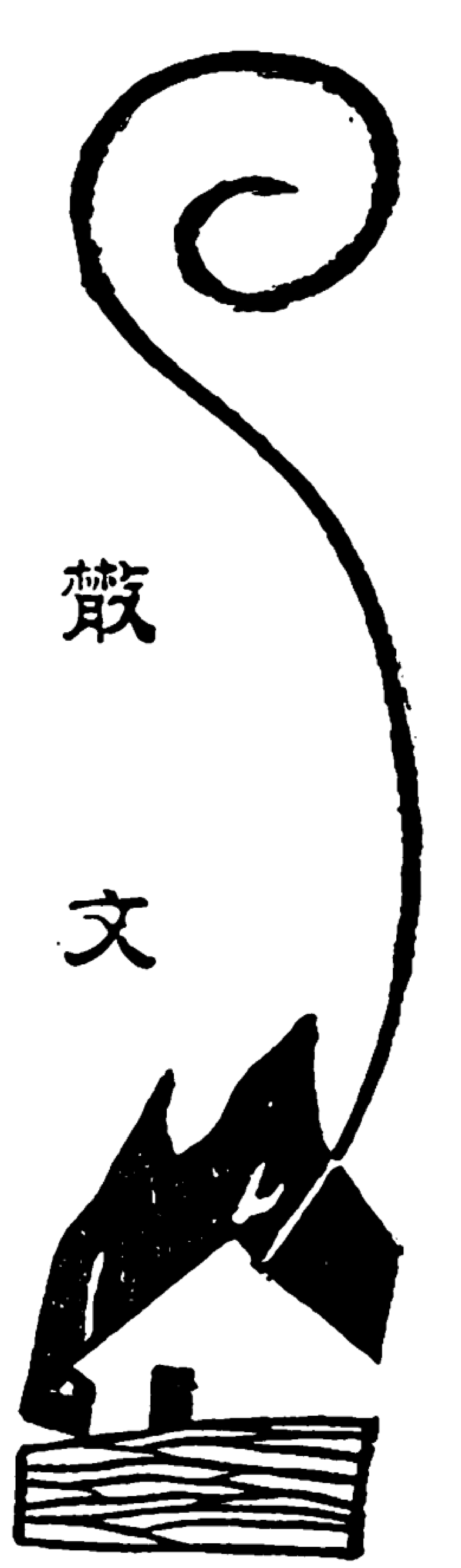
「何するの」「エヽ御細工物仕樣と思つて——」お絹は風呂敷を解いた、緋縮緬だの、友禪だの、羽二重だのゝ小切れを弄くつて居た。

「又細工かい、其れよりや達坊の着物を縫つてお呉んなね」母は自分の傍に置いて有る布入れの行李を引寄せて、中から四ツ身の張り返しの、裏表を揃へてお絹に渡した。お絹は眉を寄せた、下唇を反らして、不平らしい顔を見せたが、默つて其れを抱へて立ち上つた。簞笥の上の日光細工の針箱を、抱へた着物の上へ乘せて、落ち掛つた針箱の蓋を顎で押へて梯子を下りた。「又迯りつ放しだ。」呟く樣な母の聲がチラツと耳に這入つた。お絹は態と抛りぽかして來た小布れの包みを眼の前へ浮べ乍ら番臺へ來た。何時來たのか若い女が、自分の體から舞ひ上がる湯氣に包まれ乍らせつせと洗つて居た。毎日九時から十時の間に來る女、大抵の時は首と顏と手の三所だけ洗つて歸つて了ふ。

　お絹は女湯の、脱衣場の疊へ坐つて縫物を廣げた。天井の低い湯場と、古びた周圍の色がお絹の神經を苛立たせた。溜める一方の母は、普請の費用を惜んで客足の減るのも考へ無いで居る。何時も白い眼を仕て睨む義父と、鼻垂れな達吉と、吝ン坊一方の母との集つた暗い吾が家がシミ〴〵嫌だと思つた。「貴女位の可愛い顏を持つて這麼湯屋の番臺へ坐らせて置くのは勿體無いね、白木屋か三越の店員に成つては什う？」望みなら僕が世話仕て遣る。」度々入浴に來た顏を見知つた男が這う言つたのを思ひ出した。店員！、店員！、厚化粧仕て、襟を拔いて、毎朝通つて行く煙草屋の娘を思ひ出した。

　お絹は湯屋の娘！店員！と繰返してゐた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



散文

桐の花 （地賞）

横濱市　江の柳

いつその花はさくのか、その月をさへ忘れてしまつたのでした。ふとあのせまい坂に三本の木を見つけだしそれにはちひさい時、支那のゐのぐと信じてゐた紫のゐのぐのやうな花が咲いてゐました、そして黒い地上にもふつくりした袋のやうに散りしいてゐました、ゆくりなく見出したその花のなつかしさに、私の胸はわなゝきました。

あゝ海岸！十二の頃まではよくおかつちやんや、まあちやんと遊びに行つたあの海岸は、やはりもとのまゝでせうか、そして白い異人館の石垣から、高くかたむいてほろ／＼花ちらすしづかな細道には、やはり支那人や西洋人が花をふんで通つてゐるでせうかしら、そして黒い艶のある實が落て來る時分には、小さい三人は石垣によりかゝつてじいつと上ばかり見てゐましたあゝその實さへいつ落ちるのやら覺えてゐません。なつかしい桐よ、おかつちやんも、まあちやんも桃われに結ふて、町娘になりました。けれどわたしはおさげになりました。なつかしい桐よ、こんどおもひ出すのは何年の後でせうか。わたしはわすれたくはないのだけれど。

（評）少女の心といふものは全く此通りであらう、桐の花の印象も新しい。

暮れ行く濱邊 （地賞）

京都　中村淑子

磯の浪は稍や荒くなつて來た。漁夫等の網引く聲もいつしか波にさらはれて眞黒な身體も綺麗に見えなくなつた。山の端に今にも姿を隱さうとする太陽が、うらめしくも思はれた。何處かで小供の唱ふ唱歌の聲がハタと止んでしまつた。唯歩く毎にザク／＼と砂の音するのみ、彼方に歩む若い學生の二人連れ、小石を投げながら彼等も又此處を去る樣子だ。殘るものは唯自分一人となつてしまつた、太陽は全くかくれてしまつた斯くして瀬戸の內海は、だん／＼と夜の幕に包まれて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

行くのである、私はかうした、たそがれに淋しい海邊が一等好きなのである、否これまで、東を見ても山、西に向いても山、海と言ふものには全く緣のない京の地に育つた私にはどんなに海と言ふものが珍らしく、且つ愉快に思つたであらう。此の地へ來てから殆ど一ケ月にもなる、雨の日を除く外、一日とても缺かしたことはない、每夕唯一人、同じ濱邊で同じ景色を繰返しながら——然しちつともあきるとがない。今日もいつものあの小さい帆掛船が靜々と歸つてきた、私はツと立止つて、じつと彼の女を覗入つた、何だか妙に引き入れられる樣な氣になつてくる、アヽ私もあれに乘つてこの廣々とした海の上を滑べつて、遠い〳〵處も知らねば名も知らぬ離れ小島に行つて見たい！さうして雲井の外に友もなく、時々音づれる夜嵐を、せめてものなぐさみに——かうした浮世はなれた生活が一日でもして見たい！舟は磯の松で見えなくなつた。にはかに淋しい便りない感じが溢れて來て、思はず袂をかきよせた。と同時にハッと我に歸つた如くにはかに步き始めた。さらばよ磯の浪！又明日を期しながら家路についた時は、早やとつぷり暮れて、岸打つ浪の音のみ高かつた。

（評）海に對する憧憬が、作者自ら語るほど強く表はれてゐないのは遺憾だが、語る處は忠實である。

夜の教會（入賞）

信州　首藤郁子

讃美歌の聲は、重い夜の空氣をふるはせて、起つて、電燈の光りの行屆かない四隅にこもつて消えて行く。暫らく物忘れしたやうな靜寂が續くと、色の黑い、髭の薄い牧師が壇上に現はれた。

咳一咳。さて、其說き出すところは「神の義罰と、罪の恐しさ」である。廣い堂のそここゝに點在する聖徒のうちには、聖書と牧師の顏とを交るぐ見ては、さも感じたらしく、小首を捻るもあり、たゞ、牧師の聲と表情の裡よりして、何物をか得んとするかのやうに其顏ばかり見つめてゐるのもある。又首うなだれて一心にバイブルにばかり目を落してゐるから、己が罪の程をいかに深く感じたのであらうか、殊勝な人よと覗いて見ればこはいかに、息づかひさも安らけく、ダラケた口の片端からは、ねばりさうなよだれを一寸のぞかせて、夢路は、今やパラダイスに入りつゝあるのだつた。これ等の中に只一人、熱心に說敎に耳をかたむ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けてゐて、折々何か感ずる所あるらしく、あらぬ方を見ては、嬉しげに笑ふ十七八歳の少年がゐる。見れば彼は盲目であつた。

聖書に、……盲目者よ來れ。と宣ふたキリストが、やはり此の盲目者を呼び給ふて、彼に心の眼を開き與へられたのであらう。

彼れは、裄の短い筒袖から双の手をニユッと出して、行儀よく膝の上に組んでゐる。そして或は急に、或は緩に、高く低く、感嘆の聲に力をこめて、諄々として說き去り、說き來る牧師の巧妙なチャームに魅せられて、喜色憂色を、交々其の暗い面に閃かせる。いかに彼の姿の可憐さよ。みじめさよ。夜な〱市を流し歩いて、ひとの肩や腰を按摩して得た僅少の錢を以て、其日々々の命を繼いでゐるのであるが、日曜の夜毎には、唯一の業を休んでまで、靈の糧を得べく、此處に來るのである。



甘酒賣　東京　鶴田靜子

折柄牧師は、「かゝる性質の我々は」と、一段調子を強めて、またぐつと聲を落し、「實に、只、キリストの血によつて淸められ、惡の誘を退けつゝ、天道に向つて進むより他に道は無いのである」。と頭を振り、手を空中に振り動しつゝ、巧なアクセントで、人の注意を促しながら、熱心に說き進む。此時、彼盲目は、またニツと笑つて額上を去る數尺の所に掛つてゐるオスラムに向つて、其の開かぬ目をあげた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

牧師は、漸やく壇を降りて、讃美歌は、四顧の夢を破つて起つた。彼は、大きな、そして鼠色と白の斑の目玉を、クル〳〵させながら、誰を憚るさまも無く、大聲張り上げて、只管、神に讃美をさゝげてゐる。

（評）短い文章の間にさま〴〵な注意を惹起させやうとする巧みな書きぶり、少しは文章に熟れた人であらう。

新緑

病葉

しつとりした晩春の微風は、更衣した私の懷中を快う吹き拔いてふつくらした新緑の中にもぐつて行く、が、直ぐまた蘇生つて來ては、何やら落付かぬやうに、異樣に物懷かしい香を放つて始終、密かに戯れるのです。蠟を引いた如に艶々しくむつちりと茂つた若葉は、風に揉まれる毎になよ〳〵と嬌めかしく悶えて、靜かに、甘き愁ひに堪へぬと云つた樣に囁き交します。と、其の囁きのひま〳〵に、又一種の幽かな呟きが洩れて來ます、宛で絹を裂く如な幽に鋭い……聲。と、私の憧憬心は直に夫を何かなし「杜鵑」と定めて了ひました。そして、云ひ知れぬ嬉びに思はず胸はときめきました。

水が流れたあとの小石の浮いた路でない路の、砂を踏んで私は、麓の河原へ降りました。河原は青葉に覆はれて暗くなつてゐます。其の薄暗みを透いてぼうつと仄白く、草苺の花が、岸なる高き石崖にふうわりと枝垂れて、靜かに咲き亂れてゐました、そして其處には、丸つこい蜜蜂の群がぶん〳〵狂つてゐました。下にはみしやり……みしやり……と小波

が倚せて、水の香の浸んだ古杭の朽目から、赤黒い小蟹が這ひ出してちよこ〳〵と水に消えたり、石ころに交つて、泡を噴いたりしてゐます。偶と、浸したくなつて足を入れると、むづ〳〵と藻草が絡みました。河上には、圓やかな丘が連なつて、こんもりした森の中にたゞ一つしよんぼりと赤い鳥居が淋しく立つて、澄んだ水にひよろ長く影を落して居ます。水はほんとに好く澄んでゐます。

偶と、何やら幽遠な響が、何處からともなく微かに、微かに、私の神經に傳はりました、と、同時に、くすんだ小蒸汽の船體が河下の樹立間から夢の如にずうつと現はれて、長い水脈を引きつゝ、徐々に、我眼前に其の輪廓を擴げて、靜かに〳〵河上へ上つて行きます、おゝその幽遠な響きは、そこから起るのでした、船が又次第に其影を縮めて遠ざかるに連れて、其の美しい笛の音も霞んで、霞んで、遂に消えて了ひましたけれど、私の胸に一度浸み込んだ其の淡き悲哀の伴なふ音脈は、何時迄も〳〵、水の上に顫へ漂ふ如でした。

淺いコバルト色に潤んだ夕空には、いつか、大きな星が一つ、夢から拔け出たやうに和らかうまたゝいてゐました。如何にも靜かな夕暮です、私は此儘此處で、此の清々しい夕べを、獨りで死たいと思ひました。

（評）新しいみかたと、古い見かたとが、文章の上にまで混交してあたら好い感興をそぐやうなこともある、新しい方へ急いでお歩きなさい。

夕靄

信濃　世良田優子

町には灯がともりました、私の靜かに〳〵考へる夕は來ました、私は窓

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

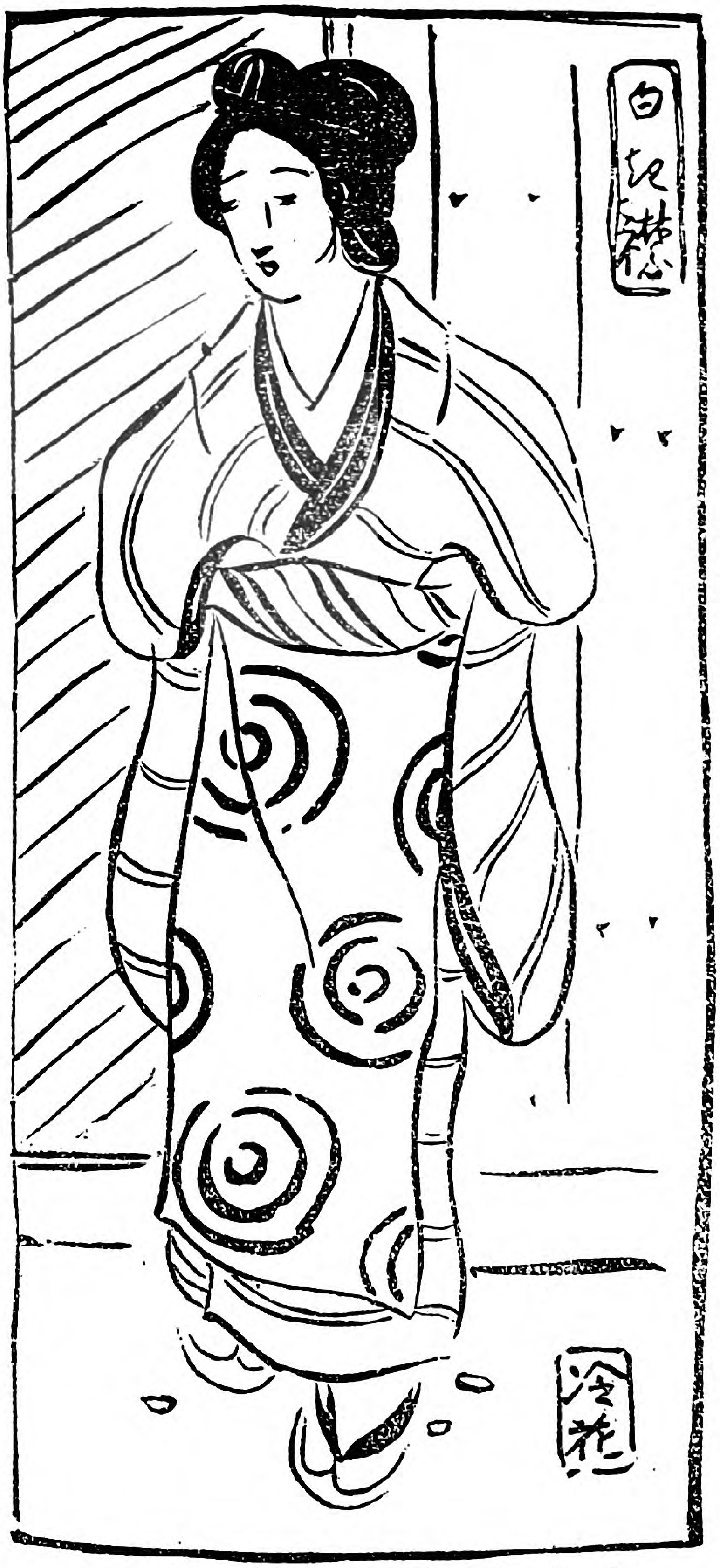
に赤い八ッ口の袖を重ねて夕靄にぼんやり光つてゐる灯を見入つて考へる併が、いつか附いてしまひました、そして今宵もさうしてゐます。靜かに自己の心の推移を思ふ程寂しい事はないのです、かうした緋の袖なんか、しんみりした寂しい私には應はしく有りません、もうしんみりした寂しさ、丁度夏の深林の様な心に變つてゆかなければならなくさせられた私私が何も知らなかつた時に凡てを捧げ様とした時に、（それは誰にもせよ）なぜ母なる人が私を家庭に入れて下さらなかつたのでせう、私の心が若かつた時に優しかつた時に周圍の人は冷淡に見てゐたのでした。

そして現在の私には周圍の强迫が非常な勢でまゐります、そしてもう今では私の心は周圍の强迫に耐へ得るだけの力をもつ様になつてしまひました。

「自己は一人だ何物も自己を知つてくれる人は無いのだ」といふ此心が私を力强いものにさせてしまひました。

一人の寂しさ、自己を自己で見つめて、しみぐ泣く此寂しさが何物にもをかされなくなつたのです、私は此寂しさに生き又終るのをよろこびとします高原を去らう、自己の道を去らうとして悶えた私はあゝ矢張りかうして沈默して――沈默して――じつと終つてしまひたう御ざいます、此心の凡てを知つて下さる人が唯つた一人都にゐますけれど、其人だつて私をどうして下さらうと云ふ事は出來ないのです、矢張り自己は自己で仕末しなければならないのです

え、もうく誰もく、構つて下さいますな、構つてほしか有りません、私は一人で死んでゆけますもの、自分の身ですもの、自分で仕末してゆ



白き襟　栃木縣　渡邊かずえ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐます、私に何も云ふて下さいますな、私の心は狂ひ相です、私の頭はもうめちやくちやにわけがわからなくなりました、かうした悶えを私は夕べ夕べにしてゐます、この夕靄の包んだ信濃高原の山を越ゆれば都には私を知つて下さる人が有るのだ——有るのだ——などゝ又そんな心にもなつて見るのです、矢張り私は自分で自分の解決に苦しんでゐるのでせうか？

（評）此れ丈けでは少しも此人が分らない、否、或るものは分りすぎる位だが、それ以上一歩、内在してゐるものが分らない。

住吉の松原

丹波　さみどり女

住吉と云へば直ぐ松原を思ふ。其松原は打つゞくみどりの木立の、潮風に揉まれた振りの面白さ。色は山國の松には見られぬ濃さ、深さ。

木は細手だけれど、枝は地を這ふ樣に出たのが多く、一本の枝が四方へはつて、木の柱に自分だけさへ支へかねてるのが多い。

見上げる所爲か舞子あたりの松葉は小さいが、こゝのは太くて大きい。

行く道はかたく跡が付いて、彼の海濱獨特な、ザク〱と足を埋める樣な砂地ではない。

松と松との奥深いところに、小さい茶屋建ちの一棟がある。

光澤のよい白堊に菱形の切窓がついて、其薄暗い中から顔が一つ見えてゐた。

白くて小さくて、目と口許りがちよんぼりと、其顔についてゐる。

松のみどりが左右から、かざし合つて、白堊は一層白く、窓内は一層暗く見える。

世を捨てゝ行ひすます、美しい若い女の人が佗うした中にゐる樣な心地がする。

英ネルや、セルの單衣を着た人達が、涼しげなパラソルを輝かして行く輕い足どり。

商家の丁稚らしい一團が、白い重箱包みを提げて溢れさうな笑がほして行く。

小學校の生徒が長い行列をつくつて、松の間を縫ふて行く。

三和土の上へ自然木の切株を埋めて、一人ベンチが出來てある。

五月のはじめの風は涼しく、松の香を含んで、行く人達と私達とを、一しよに吹きめぐる。

（評）住吉といふ地が能く表はれてゐない、自分勝手につまらぬことを言つてる場合が多い。

若き繪師

麴町　中川きく子

葦の繁れる河畔に建てる一ツ家！それはあの若い繪師の住家でした。

月の冴ゆる夜、星の瞬く夕、水は月を來せてゆるく〱流れ、冷やかな夜風は、葦から葦へと吹き渡る毎に、葉末の露と微に囁きました。

此の美くしい自然と、濃い森の色彩の中に包まれて、若い繪師は何時でも夢の樣な憧憬に捕れて居りました——カンバスに畫かれた紅い花と白衣の少女とは彼の理想でした——。

ベニスの月下堀割を滑べつて行くゴンドラや、マンドリン弄ぶあの黒い瞳のブルネットの少女は、彼にはなつかしい幻の影でした。

悲哀の曲がマンドリンから、レモン花咲く明るい南國の水の街より街へ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と漂ふ時、青い葉の繁つたアカシヤの木陰に涙在る、詩中の人となり度かつたのでした。ゝ、現美より現美に續くロマンスならば――只はかないイルユジヨンに過ぎないのに――彼はやつぱりく若かつたので在る。けれど彼の熱心な希望と憧憬は、彼の目前に幻を現出させました。喜びと希望に滿ちた胸に丹精の香ゆかしい繪筆抱いて、彼は此の地上のつきない道をさまよふ、放浪の旅に上りました。遂に故鄉を後に幻の國へと旅立ちました。星と星とが紺青の夜の空で青白く瞬く時、紅い灯影が堀割に流れる時、何んなく感じで彼は故鄉に一人淋しくのこした老いたる母を思ふでせうか？河畔の家は閉された限り何事も語りません！

（評）何かの飜譯の一節でも讀むやうである、それとも創作であらうか。

移住者

常陸　鈴　蘭

陸路百三十里。思へばよくも此處まで來たものだ、或る強い引力があつた故とは云へ、二三十里外へ出るのも大事に考へてゐた私には、確に大英斷であつた。琵琶湖畔の友は、常陸へと云つたまゝ可愛い眼を見はつて何も得云はなかつた。さうした時私は、心細いやうな、又堪へられぬ程な離愁を覺えるのであつたが、紫の筑波の山を懷かしき人達に逢ひ度い、と云ふ思ひは、直に私から離愁と云ふものを摘みさつた。けれ共、いざ出發といふ時は、流石に悲しうて何とも口をきく事が出來なかつた車窓より、漸々小さくなり行く故鄉の山々を見るとき自分も何か知ら、小さな暗い處へ這入つてゆく如うな氣がして、今一度生れし地を踏んで見度く思つた。そんなことから、あれこれと、考へくしてゐる中、結果霞浦の紺碧を目前に見られる、土浦へ着いた。春まだ淺き頃であつた故か筑波山の紫は、幾分か淡ずかつたかと思ふ、でも、たゞ見る大平野の眞たゞ中に超然と、そびゆる雄姿を見た刹那の悅び……あゝそれは何と云つて良いか分明らない程であつた、或る一個の力を得たやうな氣づよさを覺えた、けれ共一日一日とたつ中、吾が夫と、兄姉たちの他に一人も知る人のないのに、そろく淋しいと云ふ心が起つて來た、それに町へ行つても、何地から來た人？と云ふ、顏ぶりを見せられるのが何より嫌だつた。――移住者――さうだ移住者だ私は……此の土地にとりて――と思つた際、移住者の淋しき情緒、と云ふものを痛切に感じて、ふるへる心を、溫かき人の慰めに依つて、やうやく陽氣になることも、度々であつた、一步ふむ土の上も、一本の小草も他の土地だ、移住者は淋しいものである、筑波の山は私達を何と見てゐるか知らぬが……。

（評）近頃言合した樣に細野さんと、桂の華さんとが常陸の國の新しい家の人となられたのは、記者も不思議に感じてゐるとた

七面鳥

富山　鈴木くが子

『あなたの顏は、七面鳥のやうによくかはる。今、かはいゝ顏をしてゐらつしやると思ふてゐるうちに、つら憎い、おそろしい顏になつて終ふほんとにその二つの眼のためですよ。あなたの眸は今、おそろしく血走つてゐます。何を考へてゐるの？』と言つて友が、私の顏をさしのぞい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た事を思ひ出す。が、私はそんな事を氣にかけてゐなかつた。けれど今、鏡の中の私をごらんなさい。こんな可愛い顔があるものですか。こんなきれいな眸がありませうか。無邪氣な花のやうな面！玉のやうに透き通つた眸！私は鏡の中の私に接吻しやうとして、鏡の冷さに思はず首をすくめて、眼をとぢました。暫くの後、眼を開いて鏡をみた時、さつと時雨のやうに悲しさが、私の心に降りました。鏡の顔は以前と全く違つてゐます。眸はものすごく瑠璃色にくる〳〵とまはつて、何物をかみつめてゐるやうです。そして面の憎げな事よ！なんと云ふ悲しい事であらう。七面鳥といふ鳥は、こんな悲しさを持つでせうか。

（評）わざとらしい嫌ひがある。

高山の山寺にて

伯耆　ふみ子

疲れに疲れきつた足は、もう一歩も出ないので〇〇神社の高い石段の上に、妾は呆然として立つてゐた。見果て得ぬ些々の揺ぎもない、新緑の山に夕日のかげが、一線淡く投げられて、そばに立つてゐる妹の顔も父の顔も皆緑のかげがひそんでゐた。

やゝ暫し、やすらひの後妾共は石段を一歩々々降りた。険しい山坂歩きつめの妾共は、もう何も見たくも聞きたくもない。行きくれ歩きつかれた旅人のごとく、参詣人の宿所なる、とある山寺の方へ歩を運ばせた。老杉の梢を拂ふ夕方の風は流石高山だけに寒く身にしみる。

青苔の香も高い石の門をくゞると、茅ぶきの大きい屋根のお寺があつたプーンとお線香の香が鼻をついた。白い木綿の綿入れきたお坊さんが出て妾共を奥の廣間に案内して呉れた。此處かしこの部屋にはもう澤山の人が宿つて居る樣子、妾共三人はちと廣すぎる十疊の間、唐紙には古しへの支那の詩仙が白雲悠々たる高山をながめて居る絵が書かれてある。お床には、天下無敵の四字を大書した古びた掛物、疊の香さへ何となく古めかしい此の一室に、妾共は漸く身も魂も憩はせた。

寒いけれど高山の夕ぐれが見たさに、障子をさつと開けると、古い杉の樹立のあたりから夕ぐれの雲か霞か、湧いて來て妾の立つてるあたりにも、狹霧の樣なものがふはり〳〵とこめて來るのであつた。

やがて夕飯は運ばれた。赤塗りの圓いお膳に、わらびや、ぜんまいの鹽辛いお料理が乘つて居た。白い着物のお坊さんのお給仕は何とも云へない浮世ばなれした心地がした。

山寺の夜は次第に深くなつて、障子に月影がパツと射して居た。筧を傳ふ水の音が玉を轉ばす樣に聞える。遠くの山の奥から、カッコ鳥の啼くのが、萬籟たえた寂然とした深山の夜の大氣を時々振動させて居る。妾と妹は父に、昔しは此の高山に四十四のお寺があつて、年に三度のお山開きには、中國八ケ國からの參詣人があつたことなどを、夢の樣な昔しの榮えの物語りを聞き今更のごとく時めき給ひし山僧の面影が偲ばれた。あゝ、大木の新緑のかげに黒染の衣は香ひしならむ。あゝ、聖き尊き山僧の朝夕の讀經の聲は如何に深山の奥に響きしならむ。など想像せられた。

一日の疲れで、妹や父はいつか眠つて居た。うす暗いランプは何か昔を語つて居るやう、丸窓の障子にはいつか月の影は消えて居た。（伯耆大山に參詣せし日に）

（評）時節柄好い讀物だと思つて、讀んで了つて失望した、間違ひなく書いてあるだけで、少しもうるほひがない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夏蜜柑

和歌山　夕影鳥

夏蜜柑の霜除けを取つて遣つた爲めに光る樣な濃緑の葉の間から黄色いフツクリとした實が半面やら三分一やら、のぞいて居る、朝露にぐつたりと濡れた葉は心地よいさつき晴れの朝の日光に光る光る銀色の樣に、此の頃自分は毎朝この園に出てはみかんの木の下にイむのが例となり、又樂しみの一つともなつてゐる、けれどもう蜜柑も取らねばならなかつた。

見渡せば廣々とした野邊、いま麥の穗が眞青で油菜の實が薄緑、その中をぼたん色のげんげ畑が飛び散らかした樣に、稀にはクロバーも緑肥として培養せられてゐる、自分のすぐ眼



カフエーの女　横濱[illegible]春潮子

のにも一段程クロバーの花が、その眞白な花の象、一シツトリと朝露を含んで何となく唯何となく震えてゐる。

刻々に移る空の色の變化、一段藍の濃くなる毎に、天空遠ざかつてゆくすると遙かに望む高野連山、泰然として東西に走る、あの山々に、ほんのりと薄紫のもやのかゝつて居たのが一分毎に明らかな姿を現してくる。邊りは靜かである、靜寂なる事太古の如き中に、草も木もすべて甲斐ある生に永らへんとする樣は朝の野外には痛切に感ぜられる。萬象動かず語らず此の天地の間にほしいまゝなる大氣を胸いつぱいに呼吸した、ふと後の柿の木でもう蟬が鳴いてゐる、秋の田の穗波を騷がせる樣な群雀その一羽が私の側まで、チツ〱〱──とこゝまでお出で……もちつと、なか〱來ない頭ばかりキヨロ〱さして、あの小さい山しやうの實の樣な目玉が、又

なく可愛い。幼い日冬の冷い風の朝つぱらから、兄の供をして、をとりの目白籠を提げ乍ら、山と云はず雑木林と云はず、かじかむ手先きを息で温め〳〵幾度も木の影に立たされ或時は危くも支へられた鳥籠がパッタリ落して餌猪口を割るやら怒られるやらみんなあんな小鳥がほしかつたのだらう。彼方の土堤を草籠背負つた姉樣かむり二人草露を踏み分け踏み分け降りて來る素足が殊に白い自分もいつとはなしに裏門の方に向き直つて居た。

わらび狩り

羽前　長澤美也子

東北の寒冷なる地に住んで居ても、いつかは春が來る、と思ふ間もなく初夏のやはらかき日光は小富士山に照り返すのである。

ひと日――この小富士山にわらび狩りせんと思ひ腰辨當にて家を出た。相手は誰れも居ない只眞の心の友なる貞ちやんと二人きり――廣い世の中には私達の樣に眞の友を有するお方もあるでせう。しかし私の村近邊にはまだ見あたらない程です、私は彼の人の爲にどの位力強く日を送るか知れない。深山路に入るにつれて息はきれて來る。今までは例の二人が笑ひさゞめきつゝ歩いて來たが其の話もいつの間にか止んでしまつた――一本取り二本取りして居るうち登るにつれてヒヨコリ〳〵とかゞめた腰がこはくなる程たくさんのわらび……とり切れぬうちにとう〳〵腰に下げてあるわらびの重さを感じた。

一休みして夏蜜柑の皮をむいて食べた、山はまだ深緑には行かないがその爽快なる事何物をかこれにたとへつべきである、ロツキー山やスキツツル山中をしのばれてならなかつた。

かうして居るうちに日は暮れかゝつた。谷間の狹い所をかすかに流るゝ水に、夕日はあか〳〵と映じた、うす紫の藤はこの夕日に照らされてます〳〵色が冴えた、わらび取りの目はつひに此の夕焼の景色に足をとゞめられ、家に歸つたのは眞暗闇の夜、星はきら〳〵光つて居た。

行きずりの人

紀伊　白椿

五月も第四の土曜といふ日、赤い灯の街を歩んだ予は、ホワイト、クロースにうつる袷と機械の音、人のどよめきの渦卷の中に這入りました濕つぽい土間に、明るい電氣！

見知つた顔もないやうだが、それでも何だか重大な罪惡でも犯したやうに心はおびえてゐた。金糸とりの簾をめぐらした、右側の腰掛、私と殆んど同時に、同じ腰掛に腰を下した、若い人があつた。

白つぽいセルの筒袖に、五分刈の凛々しい姿、腕組をして――しかし私には知つた方でない。

幾度か變る映畫に心の幾部を吸込まれる樣な心持、そんな氣分の續く時何氣なくふと振返る瞳に……若い人はニツコリ――

××××××××××××××××××××

私はあまりの事に、思はず顔を伏せた、刹那、パツト電氣が消えた危ふく、危ふく、取られやうとした手、熱い、柔かい手が、我手にふれたのです。

さすがに、若い血が波打つのでしたが、あまりといへば輕卒なではあるまいか？かゝることの自己を尊重せぬ行爲がたまらなく口惜しく、元より行きずりの異性に許さぬ決意。振り放つて私はかたくなつて、我と我

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

手を袖の下にしつかり握つてゐた。

人波につゝいて○○倶樂部を出た私は、眞にホツトして、夜の沈んだ空氣を蘇生つた心持で味ふた。

強い女として誇るに、物足らぬ私は、明るい電氣と、見知らぬ若人。暗黑の瞬時が、不安な、恐怖となつて今尚其夜のことが思ひ出される。

少女と別るゝまぎは

延岡　優花

旅路にパツタリ暮れた太陽の明るさを慕うてすゝり泣く順禮の子の樣な淋びしさに囚はれて、いつまで私は泣くのでせう。

行きなやんだ二すぢ路のいづれを採れば、私は太陽の明るみのある光りに接する事が出來ませう、若かれ、美しかれ、華やかなれよ十八の生、だけど〳〵世間は私をさう見すてゝはくれない、それだけ私は幸福なのか知らないけれど、青白い生存と、鮮紅なる希望の、大なる矛盾。

希望の達せられない悲しさと、青白い生存のわびしさ、青白い生活を續くるか、またどんな色彩の生活に入るかの境に、しよんぼりと夕暗の中に佇める少女の判決は未だつかない。

母も祖母も私に嫁げと云ふ、私は、私は、どうしませう、いつまでも孤獨の淋しさに、泣いて美くしい情緒につゝまれてる少女となりませうかイヽエ、それは成りません、祖母も、母も、普通の女の踏むべきみちを踏むで來た女です、どこからか囁やく聲は私の心からでした。

『行け――、行け――、行ける處まで』

『少女として行くの?』『エヽ、』又心が反對の答を言ひます、さうした私の問題はまだ未定です。

『なぜはやくきめないの、いゝでせうねえ』

不思議この刹那に決定した。

少女の文字の果敢なき影をジツと見送つて華やげる三弦の音色にひたりながら、銀燭眩ゆき中に、ほの笑めるのが日沒の野に泣きくづれた私なのでせうか、私は勝利者の樣に左の藥指のエンゲージリングを燭光にかざした。

夏の夜

日本橋　坪田みどり

町の灯!!私は夏の夜、殊に下町の夏の夜の、氣分ほど大好きなものはない。赤い灯、青い灯!!

明るい街の店々に、美しく陳列されてある、品物の一つ、一つにも、涼しさうな氣分が、みなぎつて居る……。打ち水にしつとりと濕り氣のある道路には、そゞろあるきの人達が團扇片手に輕い足どり……。

かゞやく瞳、黑髮のゆらめき……派手な帶!荒い浴衣の袖が、夜風にひらめいて、馥郁たる、ローズの香が漂ふ……。かうした姿が、三々伍々、むぎわら帽に入り亂れて……カンテラの下に、並んでゐる、艶々しい草花に、例へやうも無く、美しく調和する……。

群集のどよめきを、うしろに、籠の中から逃れ出たのであらう、螢が一つ、嬉しさうに舞ひ行く、青い光りに尾いて、電車道を左に入つて、粹な小道を大河端へと、たどる……。

打ち淸淨められた、細やかな格子先、なまめかしい、御神燈の中から、爪彈につれて、仇つぽい聲が、漏れてくる。衿足のきれいなのが二人、素足に草履をかろく、突かけて、河岸の方へ行く……。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

群星

伊豆　杉本ゆりか

○戀に醉ふて居る人ほど幸福な事はあるまい。戀に醉ふて居る人ほど不幸な事はあるまい。
○社會は破損した人間を修繕する所である、社會は破損した人間で充たされて居る。
○人の性は善でもない、惡でもない、譯の分らぬものだ。
○元日に働くは阿呆である、大晦日に働くは阿呆である。
○鐵は鐵である、銀にすることは出來ない、然し錆び鐵を光たつた鐵にすることは出來る。
○月夜に提灯をつけて歩く人ほど氣の知れぬ事はない。
○善は惡の反對ではない、惡は善の反對ではない赤色と白色との關係である。
○醫者の子は病氣に死に、藥屋の子は藥に死ぬ
○藝術家は藝術に生きて居るのではない、パンに生きて居るのだ。
○島はどんな心持でないて居るのか分らない、「笑つてゐる」「泣いてゐる」かやうに論ずるものの其根據はない。

佐渡島の女

▲杉浦様と白百合様が三重吉様の作物が御好だといふ事が三重吉崇拜の自分にはたまらなく嬉しかつた。
女と赤い鳥！櫛！あゝした誰もまねる事の出來ない彼の人獨特の氣が何時も私をチャームしてしまふ。每號雜誌にのる彼の作物を皆集めてよんで見たいと思ふ。
▲島の天地も漸く青葉にうづめられて來た。人も垢にまみれた綿入をぬいで渚から流れこむ涼しい風に單衣の袂をかるくふかせてゐる。赤い花や白いしるしをつけた觀光團も每日幾群となく通る。
▲蘆舟先生、醉茗先生、諸友の皆様と島の旅行を遊してはいかゞ？寂しいまで靜かな承久帝の御陵の前で誌友の御姉様方のなつかしい御話が承りたい。白い小石をしきつめられた相川の濱と眞野の渚の美しい夕陽と俎にのせられるまで動いてゐる鮮魚とは都の人を滿足させるに充分だと思ふ。
私は先生方や皆様の御出でになるのを御まち申してゐます。

日向　優花

▲六月號には幾分か私の滿足を得る事の出來るだけの作があつて嬉しく思はれました。
▲曉子様の葵まつりはたゞ見る樣に讀まれました、そして私は胸に夢の樣な幻を描いてさまざまの色彩の香のたゞよふ行列の華やかさを懷かしみました、まどらかな書き振りはさらさらと流るゝ小川の水のやうに淀みをなうしるされてあり、また三二頁の終りの幾行かには曉子様の御性格が表はれてゐる樣に思ひながら讀み下しました。
▲糸子様の疑問は讀む私でさへホッと安息しました。寫眞を見られた時の糸子様のお顏は屹度不安のまなこにうるほひがあつたに違ひない。けれどもありさうな事、糸子様は言外なさらないでよかつたのです。
▲邦子様の悲しき春は第四番目のが好きです
▲よし子様の初戀人は第二番目と第七番目のとがすきです。

新潟市　若井紅雨

六月號の批評を少し書いてみます。
▲迷ひ道、材料は平凡だけれど舊習に囚はれた若い女の誰しも遭遇する煩悶である、女學校を卒業すると同時にカンマンスクールの女教師となつた、雪代の樣な女は幾千人あるか知れない、私は此方の作品に對しては一度は一度よりと、心よい感じを持つて讀んでをる、この作品等もローマンチストの啜り泣きを聞かされる樣な氣分もした。道子、暖かい家庭にありながら其の暖かさに抱かれる事の出來ない女、それが普通の女性だから仕方がない。
▲詩。期待してゐた吉田さん白鳥さんはなぜ見えないのだらう。我が寶は三篇とも優しい、丁度夏の雲の樣な心よい詩だ、去りし吾家の跡、よりも「あゝされど、な忘れそ、林檎畑に眠る心を」の方が女性らしい。
「醒めし人の」作者は赤い花咲く南洋を戀ふ燕の樣な人、「夕の空の歌」の作者は暗い北國の情緒を懷しむ雁の樣な君だと思ふ。私はお二人の前

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

途を視して置かう。小品文に付いては何も云ふまい、がいつもより賑かだつたのはうれしかつた。

▲和歌。佳作で如何にも女性らしいと思つたのは、洗ひ髮五尺丈なす君がかた櫻眞白う散る夕かな眼をとぢてひたに君戀ふ甘やかさお白粉の香に草の漂ふ、いとかるくねたましき泣飾りたる女の友と遠ざかり行く、栃旅買はづかしき夜よ人妻は明るき瓦斯の下をよけつゝ、等である、戀とか君とか云ふ文字に埋つてゐるのは少々あき〱した。其のくせ自分も作るんだけれど——もう少し自然界を讃美した聲を聞きたい。第五六年のころは二百餘首も記載された和歌が六十首では餘りに心細い、紙面が許さないのだから仕方もないけれど、最う少し盛んにして頂きたい。

▲俳句と來ては尙更情ない次第、せめて最う半頁位は俳句の爲めに分割して頂きたいと思ふ。

▲評等と云ふと大それた樣に聞えるけれど、實は六月號の文藝欄を讀み終つてから、頭の中に殘つた淡い印象を辿つて筆を無意識に走らせてゐたもんだから、つひ貧弱な根底もない事を、のべつにしやべつてしまひました。お許しを。

※

兵庫縣　松並　ひさ

▲私の通つてゐました、學校は私立、殊に、ミツションスクールと云ふので、讀物にはあまりやかましくありませんでした、其頃私はよく、少女世界を讀みましたが、上級の方は女學世界、女子文壇など、讀まれました、時々借りて讀みましたが其の時の私、十四歳の少女にはあまりにむづかしい事がありました、其れは讀書力がたりないためでありましたが此の頃はかなり讀めますので中でも和歌が一等好きです、小說、小品もすこしは作つてありますが、あまりはづかしいので投書はひかへてゐます、そして私の好きな人は小說では正宗さん、和歌では、前田、若山、原田さんなどです、雜誌は新潮、アララギ、白樺、女子文壇、四冊はたいてい毎月讀んでゐます。

※

富山　鈴木くが子

▲片方の事ばかりをきいて人を責めたり、惡く云ふたりするのは嫌です。どんな罪人でもその心持を聞いてやると、相當に同情すべき點があるものだと思ひます。

▲今年帝大を卒業した××さんは、奥さんを貰ふのに、きれいでさへあればいゝと申しましたさうですが、私はあさましくてなりません。これは醜女たる私の僻目かも知れませんが、美も醜もたつた面の皮一枚ぢやありませんか。或る男は、美しい女は心も美しいといひましたが、私はさうに限るとばかりは思ひません。世間には、容貌は醜くても、心の美しい人は隨分あります。それに美しい人の多くには、その美を鼻にかける傾があるやうです。これは容貌の醜よりも以上な心の醜をさらけ出したものだと思ひます。滿月といつてもいつかは缺けます。きれいな花もいつかしほれる時がきます、美女も老いずにはをるまい。世の中には、生れつきからの美女はあまりないものです。多くは化粧の力で美しく見せてゐるのです。美女だの醜女だのさわぐにたるものではありません。

※

夕かげ草

▲婦人問題とかいふものが、世間でやかましいけれど、私等には何の關係もないやうな氣がする。

▲一つ二つ讀んでみても、一向に私たちの目前の生活に交涉のないことばかりで、世の中には此んな問題もあるかなと思ふばかりです。

▲問題は男の方から起つて來るのでせう、婦人問題だつてつまり男子問題なんでせう。

▲新しい女といはれたくないと思つて、苦勞をするのです、それは間違つたことかもしれないが、新しい女といふ言葉は一種の冷評であつて決して善い意味に云はれたことがない、世間といふものはこんなものでせうね。

▲私はもつと私共の生活に接近した問題を伺ひたいのですが、思ひの外然ういふことに觸れないのは殘念だと思ひます。

※

吉野　きよ

▲誌友の方々のお書きになる文章は注意して見て居りますが、批評などは迚も出來ませんが、前島優梨子さんの文章は、なつかしい女らしい文章だと思ひます、邦枝子さんのは花やかですが近頃は拜見しません、喜志子さんの文章はしつかりしてゐて敎へられるやうです、白百合さんは都會式とでも申すのでせうか、眼にパツと映るはでやかなもの、炎の花さんにも好きな處があります、廣江曉子さんの文章は昔の物語を讀むやうです。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

詩

晝はひねもす（地賞）

村山　咲子

ひるはひねもす
青草のしげみをなつかしみ
かなしきおもひと
空しき憤りとの
心の中を
さらしてなげく
青草のなつかしみ

夜はよもすがら
寢床のなかに
息するむくろ
明日をまつながきよる
しみ〲と、しみ〲と
なみだの味のなつかしさ
いきする、むくろよ。

（評）いつまでゝも感情の烈しさを持つてゐる

小曲（人賞）

上毛　雲路

□
朽木に生ひしくさびらの
毒ありとこそ聞きしゆゑ
ひそかにとりぬ人しれず
愛づる心のいとほしき

□
名も知らぬ小草に咲きし
色白き夕の花びら。
暮色を恐れて、こと〲く、しぼみたり
『淋しくも去りやらぬ、
庭のすみなる青き心よ。』

□
君は躑躅の花を、くちづけて土に落しけり
嬉しくも、悲しくも、あれ、
『初戀のなやましきわが心よ。』

（評）詩才は閃めいてゐるが、如何にも詩の作り方を知らぬ、其時を待つより仕方がないのであらう。

展望（人賞）

日向　小池　優花

灯つきて
靄はおりぬ。
丘の家より
其の窓より
見おろせば
町と村の
夕のさまは
いとも靜かに
高きみそらの
星の影まばらに輝く
闇のはて
——遠ちの港に灯のゆれる、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

丘の家より
我窓より
打みやる
夕のさまは
いとも靜けし。
（評）今少し氣をつけて此の題材を親切に扱つたら好い詩が出來たらうに――。

狹き天地

富山　鈴木くが子

×
我が眼にうつる、
天地の狹さよな。
二人が住み處、見當らぬまで……。
×
あはれ、若き人妻の上に
何事か降りそゝぎし？
彼女は今日もひとひ、
泣きて暮しぬ。
×
若き女は心地よし。
汝、けはいはせねど、
水々しき
若き肌の心地よし。
×
君に送らむとて
菫摘めば、
あはれ我が手の熱に
かくもしほれぬ。
されどすみれは
なげかざりき。
美しき君が手の中に
枯るゝ命は惜しからずと、
すみれはなげかざりき
（評）小曲の形を知つてゐる、整つた作だが、果して女性の作なりや否や疑ひあり。



踊り　岡山縣　木村水草

藤

大阪　桂木小枝子

まつしろい花と
紫の花が
葉をくゞつてくる風に
すれ〳〵になびく、
若々しい手が
やはらかい肩を抱いて
ゐる樣に
やさしい蔓皮
白と紫と
綠の葉の中を
得意さうに、這ふてゐる
白い花が
そつとよつて、さゝやくと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

紫の花は、
スーッとにげて行く
紫の花が
歸つてくると、
白の花がさゝやく
蔓皮は、だまつて
うなづいてゐる
あれ〳〵、また
花と花が、さゝやく。

（評）詩とは言ひ難いが、其心持だけは汲み取れる。

月姫

豊後　散殘る花

夜のしゞまは――、
鈍色の破衣かむりて
迫りぬ――。
青碧の大空に
やどろ月の影
悶えあるわが胸を
見透して
あはれむがごと
またゝきぬ
もだえある者よ
汝は罪の子よ
來れ來れ――、とく來れ
わが側におかむ
はぐゝまむ
月姫はみて上げて
まねきましぬ

（評）舊いと云ふ外はない。

歎かひの後

千葉　野村としみ子

淋しければひと木鉢に植わりたる
つり鐘草のうす紅き
花の淡き匂ひにも
心しみ〴〵涙ぐまるゝなれ。

樹々の青く芽ぐめる日――つり鐘草の
若き芽はつよき日の光にも痛まず
鉢うゑのまゝ
窓におかれたり。
銀笛の音のうるむ朧月夜や――
つり鐘草の若き芽は
すこやかにのびて

かくていく夜花さきければ
淋しければ
かすかな花の匂ひにも
心しみ〴〵涙ぐまるゝなれ。

夜の若葉

菊　子

ともし火の光がしづかに、
私の心のすきをもれて、
庭の若葉の其胸に、
はかないかげをなげてゐる。
我が瞳曇つてゆく、
夕暮のさびしさ
あざけるやうな灯のかげの、
若葉の胸のさゝやきよ。

かはたれの色

京都　薗田久

かはたれの色ほの〴〵と
夢の息はき、
ま白の花はさぐれり。
あな寂し、
うつろの胸に
深き傷手負ひたるむくろの
たゞ一つ
冷えはてゝ横たはれり。
そと重ねたるまじの手は
古き怨の聲をたづねんとして、
悲しくふるふ。
かはたれの色ほの〴〵と
夢の息はき、
眞白の花はさぐれり。

野茨

新潟縣　河井壽子

川のをちに　さける野茨
あはれ白き　飽かぬいろを
わかき人の　かなしあゆみ
つかれたどる　飽かぬなれを
あらき風よ　吹くなあはれ
うれふわれの　なぐさむるを
ゆついわ村　草はむさず
つねにあれよ　さらばのばら

和歌

○（天賞）　長崎　種村喜代子

磯ゆけば足にちひさききずつきぬ汐に浸ればやゝ痛きかな

（評）小さき疵と、大いなる海と、孰れか深き意味

○（地賞）　小石川　戸張春子

すこやかに肥えてゆく身のこゝろよき産屋出づれば燕子花咲く

（評）善き妻の心かな

○（人賞）　金澤　畔の花

別れむと云へばすなほに別れゆく君はあまりに淋しかりけり

（評）うたも淋し

佳作

○　京都府　竹村槇子

香ぐはしき風の渡れば蜜蜂の箱に散りくる桐の花房

（評）心に働いてゐる歌

○　下澁谷　前田敏子

月見草夕となれば幻の蘇へる時君思ふ時

（評）昔の幻は夕によみがへる

○　信州　首藤郁子

湯上りの白き我が胸ふくよかに若く匂ひを漂はす哉

（評）誇り

○　廣島縣　田村もと

初夏の露と水とに新みどりつゆかゞやかに早苗ぞ生ふる

（評）早苗ぞ生ふると言ひ切りたる、いとよし

○　上毛　大川三津子

麥刈りて土くろぐろとあらはれし六月の野を過ぎし燕

（評）少女の歌にしては巧みに過ぐる疑あり

○　上毛　阿多津雲路

赤々とさつき咲きたり一つ摘み香をかぎすてゝ君は去りけり

（評）もとより香のなき花

○　對馬　伊藤夕陽子

ある時は思ひ上りし心して彼の紫陽花の花にみいれる

（評）みいれるが強く響く

○　兵庫縣　松並ひさ

智恵の實をあたへて別るたそがれよさびしさ殘る此の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

誇りより

(評) 冥想あり

○　山城　木の花

まろき月に一さしまへばほろ〱と櫻のちるがなまめかしけれ

(評) 花は盛りに月は隈なし、歡樂極まる。

○　美作　橋本しげ子

花らばらかざして歩む一むれのをとめ見てあり若き男は

(評) 男の心を能く知る

○　丹波　さみどり女

若葉しぬなが雨晴れし潤ひにかくて二人が生きて行く世に

(評) 生きて行くと云ふ意、一首に充つ

○　神戸　綠髮子

十の指一つ足らはぬそれよりもなほうとましや後みする戀

(評) 比喩が巧みでない

○　静岡縣　阿部翠雨

若蘆にむねすりて行く白鳥のゆくへかすかにふなうたの聲

(評) ふなうたの聲は少し細工らし

○　本郷　みゆき

喜びに古き女と呼ばれなむ君だにあらば我は古くも

(評) 戀に新しき戀も古き戀もなし

○　佐渡　わくら葉

まろび寢て別れし人をひた思ふ五月の夜の月のさす室

(評) 原作第五句悲しき閨とあつた

○　伊賀　山中靜子

わが心またも時雨てふくる夜のくもる灯かげに袖をぬらしぬ

(評) 古韻縹渺

○　神田　小島知子

ダリヤの芽うす紫に萌え出て小さき花壇に夏は來にけり

(評) 夏上りも暮春なるべし

○はらへども追へども去らず銀蠅は我捨てたりし男のごとく　神戸市　白露

○しどけなく雨ふる晝のわびしさに要なき文をかきて見るかな　東京　影子

○ちら〱と陽炎村の宮の跡たゞぼ[illegible]りと見てあれば消ゆ　伊賀　中村操子

○何となくはだ心地よきネルの衣[illegible]思ひを胸にそへつゝ　岡山市　石井洋月子

○今日もまた野ばらの白く咲く家に君が晴着を織りつゞけゝり　茨城　田村はつ子

○此三年泪をのみて吾知れる君が昨のうるはひに生く　兵庫縣　芙佐江

○　羽前　長澤美也子

ねやの戸をしめずにいぬる渡場の少女の顔に月照る　常陸　桂の華

○見交せば哀しさもはた寂しさも打ち笑むのみに和む此ごろ　名古屋　波の花

○銀線のさゝやきゆかし青葉かげ玉をつらねて五月雨のふる　廣島縣　葵の花

○英ネルのはだざわりよき六月のひかりを吸ひぬ青葉のかげに　千葉縣　野村としみ子

○素足して茗荷の花のちりてゆく畑の土をふめば悲しも　西多摩　笹本夕美子

○涙する人のうさなどのたまへば泣かじとすれど泣かれぬるかな　伊賀　秋野小夜子

○大沼の蛙なく音にさゝされぬもだえのはてに寢し一時を　神戸市　村田雪子

○男の子一人助けし身にてありしかなその若き日の昔懷しき　富山　鈴木くが子

○恐の家をのがれし駒が草原の朝日に向ひいなゝきをする　筑前　朝香子

○いと遠きものにわれのせ天かけり海の上にてたくみけるかも　京都府　薗田久

○君きたらば毒の香油をその胸に注ぎて我は靜かに笑まむ　宮城　齋藤靜子

○若き日の愁跡なく消ゆる如ちひさき波の白く砕くる　廣島　小山茂子

○初夏の木立を行けばほのかにも樹々の青きが瞳に沁みにけり　下関　金子よしの

○さくら草わがかたはらに上目する君がかたへにゝが上目する　佐賀　千住都志

○紫陽花や五月晴をば待つならんさびしき姿ぬれたる姿　日本橋　石原操子

○蘆生ふる岸邊のあたり水鶏鳴く月清き夜は風かをる夜　潟　千鳥

○額づきし女の髮に一輪のばらの咲けるが悲しかりけり　赤坂　格井翠子

○五月雨のしとく降りてうすぐらき思出のうちに今日も暮れゆく　芝　大庭百代

○さみだれの注ぐ大路やしめやかに都の人も心靜けく　長野　手塚みよ

○暮れて行く春の空だにわびしきをなほもの思ふ我れにもあるかな　埼玉　ねむの花

○泣きたさの胸をいだきて寄りそへば御言葉なくて君もうつむく　東京　すみれ

○風なぎし青水無月の朝空をさはに渡らふ白鷺のむれ　淡路　淡島ゆり

○街燈を慕ひ疲れし夏蟲の闇に消え行くわが心かも　名古屋　山茶花

○なさけある言葉に背がひ立いづるかやりくゆれる夕顔の家　大連　春花

○春雨の窓うつ音は細けれど痛くもひゞく少女のむねに　麻布　伊東浪子

○此少女又我の如戀に泣く時あらんかと寢顔みつむる　芝　古澤ふく子

○我がこゝろたらぬも恥ぢずなやみたる涙のあとに月は出にけり　府下　野草

○一時はあきらめてみれど故しらぬ涙は何に慰さめてまし　松山市　丹下つる子

○夕暗みを悲しむが如蜩の鳴く聲きけば我も又泣く　浮舟女

○呪はれし花の心のおそろしさ黑き胡蝶の牡丹にねむる　山梨　山田くにえ

○ほとゝぎす青葉の中にひねもすを鳴きくらしても足らぬ想ひや　原宿　よね子

○跣足に我前とほる君の影曉方にちらとゆめみぬ　濱松市　嵐敏子

○はてしなき小石川原を歩むごとはかなくなりぬ君のみ心　伯耆　新田文子

○いと淡き夕月の影身に浴びてれんげ島の花に泣かなむ　丹波　みどり女

○黑きもの見る目こと〴〵かげなして君をつゝみて我をさいなむ　府下　鈴枝

○書に倦みて瞳あぐれば雨に濡れし八つ手の青に心吸はるゝ　新潟　若井紅雨

○春祭りねがひなき身の我なれど母と並びて手を合はし居ぬ　信濃　稲子

○新らしき豌豆の青き香にわが歩ひたす初夏の朝　京橋　野花

○たらちねの亡き母したふ少女子のひとみの中に熱き涙わく　姫路　九十子

○よりかゝるガラスの窓に呼吸かけて指もて字かくたはむれもしぬ　常州　立川清子

○行く春の雲の歩みのおそうして緑に煙る筑波根の色　伊賀　紅花

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子文壇八月號

おん君の心ににたりとげもちて咲くや美くし白ばらの花　名なし草
○
西日さすたゞさき小さき室に居て戀語るでもなき冷さ二人　長崎　孔雀
○
指さして君のたまひし太き星み上げしまどの初夏の空　下澁谷　都紫子
○
青白き月の光にほの白う夢の如くに咲く月見草　赤坂　別所勇子
○
病院の瓦斯の光の淋しくもねむれる君が頬を照らしぬ　神奈川　木村紫雲
○
寂してふ事皆つどひ足らぬ事群がるなかに我のあるかな　新潟縣　秋月すゞ子
○
一人來て小暗き森を逍遥ふも深きため息するもまたよし　神田　岡本つね子
○
戀の事かくすとはせずいひたりとふるき人等にしりぞけられぬ　鳥取　水無瀬百合
○
人に來し若き男の文がらをそと持ち出だし林に入りぬ　栃木　小森いつ子
○
ふるさとや夕さり來れば母人の山椒の芽などつむが悲しき　東京　青木啓須子
○
かたくなの性とばかりに憎みたる妹なれど今は戀しき　岡山　淑子
○
小雨ふる青葉の庭にほろほろと赤き花ちる夕べとなりぬ　廣島縣　官垣はつ代
○
悲しさの胸を抱きていつとなくまどろむ窓に風薫るなり　東京　こきみ
○
柑子赤き海鳴る國の人はよし其處よなつかし吾の故郷　廣島縣　葵の花
○
漂浪の子の如くにも雨の日を軒にたちよる燕哉





俳句

○（天賞）

袖ふれば溫泉の百合の匂ひかな　上毛　阿久津雲路

○（地賞）

白瀧の水の途切るゝ暑さ哉　山梨　伊東米野

○（人賞）

白蛇神と祭るこの里草茂る　濱松市　嵐敏子

樟化石城あとに見る藤白し　丹波　さみどり女
夢多き旅のねざめやほとゝぎす　麴町　牧野はん子
猿橋を渡る夜明や時鳥　伊賀　中村こま子
庭園の赤きダリヤや夏の風　淡路　久米みや
夏の雨山寺の佛洗ひけり　兵庫縣　八上俊子
初汐のよする海岸十里哉　長崎　種村きよ子
旅立や時鳥きく朝月夜　芝　古澤ふく子
葉櫻やたそがれこめて小雨ふる　山形縣　高宮哲
武藏野や飛行機高く風かをる　茨城　田村紫色女
山寺に夢などむすぶ夏の晝　羽前　長澤美也子
新妻のもの洗ふ谷の清水かな　山城　木の花
初旅を蛙鳴く家に明しけり　静岡縣　阿部翠雨
短夜を寢足らぬ顔の女哉　府下　鈴枝
髮結ぶ打緒切れたりほとゝぎす　佐渡　萩香
涼風の來てころげけり筆のさや　茨城　栞守子

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



雜報

有栖川宮御薨去

豫て舞子に御靜養中の議定官元帥海軍大將大勳位功三級有栖川宮威仁親王殿下には、入梅以來御病勢よろしからず、終に七月五日夜、遽然として御薨去遊ばされた。斯くて十日午前舞子出發、悲しき御姿となりて即日東京の御本邸に御歸京遊ばされ十日午後八時二十分、喪を發表せられた金枝玉葉の御身も終の定めは免れさせ給はぬ御事とは云へ、朝野一般に悲痛の心に充たされた。

殿下は故一品幟仁親王殿下の第四王子に在し、文久二年正月十三日を以て、京都に御生誕遊ばされ、御年十六歳にして英國に外遊あり、其後は專ら我國海軍の發達の爲に御力を盡くさせられ、御勳功のかず〳〵は申すもなか〳〵盡きず。御病中に、明治天皇崩御の悲みに遭はせたまひ今又諒闇の中に殿下が其にあとを慕ひたまへる、我が皇室の御悲み、語らんも畏し。

殿下には去る明治四十二年若宮殿下御逝去の後は、德川家に御降嫁ありたる實枝子女王殿下御一方あるばかりで、宮家の御世嗣は斷ゆる筈であるが、今上陛下優渥なる御諚の下に、陛下の第三皇子光宮殿下を有栖川宮家の祖先たる高松宮の稱號を授けて、有栖川宮家の御世嗣と遊ばされた。

御靈骸は七月十七日音羽護國寺外豊島が岡なる皇族御墓地に國葬を以て葬られた。此日朝來愁雲四天を閉ぢ、沿道の拜葬者も亦靜肅に御見送り申上げた。

劇界の動搖

文藝協會は帝劇のシーザー劇を名殘として遂に解散した、坪内博士が多年の功勞に對して同情に堪へないが、之れ亦時代の一轉化であらう。島村抱月氏は更に若干の人々と共に中央劇團を組織し、松井須磨子等を中心として今秋興行を初めると云ふ一方坪内博士より離れたる土肥東儀氏等も何等かの形式に於て劇界に活動することであらう。

文藝協會の事に次いで、近代劇協會にも内訌あり、伊庭、上山兩氏は手を分つた。

劇界多事の時、何ぞ劇壇に動搖の多き。

諒闇明

早くも七月三十日の明治天皇の御

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一年祭が來た、御一年祭が濟むと諒闇は明けるのである、諒闇は明けても、明治天皇に對する國民追慕の情は永久に忘れ難いものであらう。只明治と云ふ言葉の日を逐ひ、月を重ねて歷史的の意味を帶びて行くことは又如何とも難い處である。

旅行地

今年も暑氣は嚴しい、八月になれば更に旅行する人が多からう、記者の理想は餘り月並の旅行を望まないが、便宜上には家族的、婦人的の旅行が容易いに相違ない、それには矢張海岸が好い、東京附近では相模、伊豆の沿岸、及び房總半島の沿岸ならば大抵何處でも景色は好い。大阪附近では、攝播の沿岸、及び私泉、紀伊の沿岸であらう。大阪附近で登山地は大和の南半より紀伊に跨つて一帶、東京附近では甲信二國、及び兩毛地方であらう。急流としては前者は保津川、後者は富士川が先づ近い方であらう。

汽車の割引

東京近くで汽車の割引を利用して旅行するならば、凡そ左の通りの場所がある、參考の為め掲げて置く。

房總線海水浴（二割引）通用期間三日加算▲銚子（毎土日曜）二割（普通期間同上）▲常磐線海水浴（二割）十四日▲湘南海濱（二割）三日▲江の島鎌倉（二割）三日▲諏訪（二割、普通期間に五日加算▲修善寺（二割）十四日▲飯坂（二割）十日▲東山（二割）十日▲鹽原那須（二割）十四日▲箱根熱海（二割）十四日▲東北廻遊（三等五圓五十錢）廿日▲富士川風景遊覽（三等二圓十五錢）十日▲富士登山（二割）▲北陸廻遊（三等六圓七十六錢）十四日▲輕井澤（三等二圓十四錢）七日▲日光（三割）三日▲松島（二割）十日▲香取鹿島（三等）一圓六十二錢五日▲荒川鮎漁（土日曜三割、平日二割）二日▲多摩川鮎漁（二割）三日

三晝夜の山火事

前月七日北米タマルパイス山の一部より火を發し（原因は汽車から捨てた莨の吸がら）三晝夜の間、燃えに燃えて幾百町の山林を燒き盡くした、軍隊の出動などがあつて大騷ぎであつた。

廣告を見る

新聞の廣告と云ふものも、見やうに依つては、此から種々な世間の樣子を知る事が出來る。手もとにある七月十七日の『東京朝日』の第一頁をみると、『財海時雨』と云ふ不思議な名の本がある、並んで『財政と金融』と云ふ書が二十四版とある、賣れたものらしい。横井博士の『都會と田舍』は成程博士のこしらへさうな書物だ、『農業水利論』と云ふのがある、我等が一頁の智識すら持たぬ事も書物になればなるものだ、大町桂月氏の『箱根山』は時節柄廣告の利目があらう、白鳥氏の『生靈』紅綠

氏の『礎』は功能書がなくとも分る、杉浦書伯の「スクラップブック」は何んなものか見たい、青年立志内地海外『最新の好職』と云ふ一書は、金儲けの近道　出世の手引とある、三十五錢は安いものだ。日本百將傳一夕話』と云ふ林羅山先生原著の書と、『赤き死の假面』と云ふアラン、ボオ原作の書と相并んでゐる處は、時代の對照が面白い、其隣りには『柔道教範』と云ふ恐ろしいものがある中學校の生徒募集と、株式拂込があつて市内地方男女外務掛採用と云ふ廣告には月收六十圓以上百圓位確實とある、生活難が嘘のやうだ。牛乳クリモラと云ふものがあつて、次に『有栖川宮殿下奉弔號』は際物である、之も有るべき筈。鶴香水に中元及暑中の贈答品とあるが中元は過ぎてゐる、數學の講義錄、簿記生の募集、それから人事興信所では何んな個人の秘密でもお調べするとある。ラヂウム温泉浴は婦人病に奇効があるさうだ千代田香油に女の顔があつて、又新職業は一日に一圓以上は得られるさうだ。梶田醫院の簡單な廣告、偖て最後に一番隅の方に三行許りで結婚紹介所の正直にお世話すと云ふのがある。一頁の廣告を見てもなかく世渡りはむづかしくなつたものだ。

▲前月より帝國圖書館の別館が開けたので讀書家には便利になつた。從來三百二十五人で滿員となつたものが、更に普通室百四十人、婦人室四十人、特別室二十人を増加し合計五百三十人の席が出來た。

▲世界の海で、最も深い處は、南洋マリアナ群島の附近に在つて、其深さ實に四千八百十八尋あると云ふてとだが昨年の調べでは、比律賓群島中の一部に、それよりも六十六尋深い海があるさうだ

▲東京から富士登山する費用は、普通贅澤をしないならば、一人金五圓で足りるさうだ。

▲朝顔の栽培家が段々減つて、ダリ

十九歳の婦人

▲十九歳の婦人どうしの交際紹介欄を設けますから十九歳の婦人は盛んに申込みあれ。

▲希望は何でも隨意、簡單な絵ハガキや雜誌書物の交換でも、思想的文章の交換でも、其希望を書いて御投稿を乞ふ。

▲記者は悉く之を紙上に發表しますから、各自好きな方と交誼を交換あれ。

▲原稿は「十九歳の婦人」と題して置くこと、用紙はハガキにても差支なし。

▲原稿しめきりは本月十日。來る九月一日發行の本紙上に掲載いたします。

記者

アの流行が次第にひろく／＼なつた、花にも盛衰は免れない。

▲「妻はお竹と稱し、妾はお鶴と呼ぶ云々」と日記の斷片のやうな二三百枚の原稿（殆ど不明）を殘して富士山中に死んで居た男がある、愛知縣の人、日記は九月二十六日まで記入してあるから二十七日に絕命したものだらう。雪中にあつたから死體は腐爛して居なかつた、最後の日記に曰く「九月二十六日、月蝕午後八時三分五厘、同九時二十六分、三厘、望、雨、起、雨、整理」と。

▲甲斐八代の五味某前月五日近くの野原で牛殺しと稱する毒草を喰ひ中毒して全身紫色に變じ死す、毒草の毒も恐ろしいものだ。

新刊

○若き男女へ　マクスオーレル著

マクスオーレルと云ふ人は、女の觀察が實に細かい、且深い、心理的だ日本人などの到底及ばぬ見かたがある、女自身は勿論、女のことを知つて置かうと思ふには、爲にもなれば面白くもある書物だ、譯者は藤井白雪子で、マクスオーレルのものには熟れてゐる（定價金七十五錢、京橋區南傳町正文館發兌）

○敎育と文藝　淺野利三郎著

敎育と云ふものと、文藝と云ふものとは何うしても一致しないのみならず、何うかすれば相離れやう相分れやうとするが、實は文藝も博い意味での敎育だから離れて了つたら世道人心の上に宜くない結果が起ると云ふので、著者は兩者の硏究をして、其一致を考へたのである。近頃の著書中で最も眞面目な用意のかゝつた著述で、熟讀すれば大いに利益がある（定價金一圓五十錢、日本橋區本銀町三、啓成社）

○色情と犯罪　澤田順次郎君

犯罪の裏面には必ず色情が潜んでゐるとは、裁判官の明言する處だが、それは何ういふ譯か本書を見れば一目瞭然、成ほど色情は恐るべきものだと云ふことが分る、統計なども詳しく調べてある。（定價金一圓五十錢、神田島田書店發行）

○途上　前田晁著

現代小品叢書の第三編である、木城氏は藝術的に覺めたる人、其の一篇一篇に氏が個性は著しく表はれてゐる、紀行文の如きものも、他の作家に比して遜色はない。（定價金三十五錢神田今川小路二忠誠堂發兌）

○矢車草　植松美佐雄著

例の少女悲哀小說と銘打つたるもの多々益々辨ずる著者の努力は近來目ざましきものゝ一つであらう（定價金四十錢、本鄕東片町本鄕書院發兌）

○神經衰弱の藥。　神田五軒町日新館藥房

發賣のセダチンといふ新發明藥は腦病及び神經衰弱に特効があるので、頗る評判が宜い、同病で惱んでゐる人には早速試みたまへ。

…編輯だより…

▲誌友消息　岩山（太田）喜志子さんは上京して牧水氏と同棲した▲山田たづ子（若葉）さんは厳父を喪はれて歸國中▲世良田優子さんは上京した▲そめ子さんは宇都宮に移つた。

▲『新しき文藝』出づ　豫定の通り本誌増刊新しき文藝は去る十五日に發行しました、見落した方があるやうならば此際至急御覧になると宜しいでせう。

▲文藝欄投稿に就いて　文藝欄は前號より引續いて擴張して居りますから盛んに投稿して下さい、小説には振假名をお忘れないやうに願ひます。

> 暑中御見舞
> 讀者の健康を祈る
> 記者一同

▲本欄　本欄に採録すべき特種の文藝的投稿も歡迎します、大抵百行乃至二百行の原稿として、本欄用と附記し、振假名をつけて下さること

▲誌友　誌友くらぶの復活を希望される方があるので、其一つの方法として十九才の婦人と云ふ題の下に交際欄を設けました、一三五頁の記事を見て投稿して下さい。

◉寫眞募集

諸嬢のお寫眞は勿論、風景、風俗各種ノ寫眞を募集します、掲載の雜誌は必ず贈呈し、寫眞は御入用ならお返しいたします。猶ほ全國寫眞業者諸君にも、同好の方は御寄贈を願ふ

◉文藝欄投稿規定

▲文藝欄の投稿は女子に限る▲小説、詩は自今振りがなを要す▲小品文は二十四字詰三十行乃至五十行以内▲小説は二十四字詰百行以内▲詩は長短隨意▲群星欄も長短隨意二十一字詰▲和歌俳句は一人一首限り▲圖畫は必ず方二寸以内▲投稿は毎月十五日、嚴に締切る。

▽贈賞改正　▲小説は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢▲小品文は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢、▲詩は天賞金一圓、地賞金七十錢、人賞金三十錢▲和歌は天賞金一圓、地賞金五十錢、人賞金三十錢▲俳句は天賞金五十錢、地賞金三十錢、人賞金二十錢▲圖畫は天賞金七十錢、地賞金五十錢、人賞金三十錢▲群星欄は平素優秀なる投稿を送る人に三箇月毎に金一圓の特賞を呈す▲以上贈賞は總て價格相當の物品を贈呈す。

改正 定價表（毎月一回一日外年四回増刊）定期號増刊號同額

△一冊分	（送料とも）	前金拾九錢五厘
△三月分	（増刊共四冊）	前金七拾參錢
△半年分	（同八冊）	前金壹圓四拾錢
△壹年分	（同十六冊）	前金貳圓七拾錢

◁申込注意▷

注文は總て前金のこと◎振替貯金（口座東京一七二九番です）にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢増しのこと（用紙は最寄郵便局にて無料にて呉れます）◎郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと◎郵券代用は必ず壹割増のこと（收入印紙は絶謝）◎最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ本社への照會は返信料添付なければ回答せず

◉廣告締切期限……毎月十五日の事
廣告掲載料金は御照會次第御報す
取扱所　博報堂、電報通信社、帝國通信社、萬年社

大正二年八月一日第九年第十一號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

東京市京橋區大鋸町十一番地
發行所　女子文壇社
電話京橋六〇七番
振替東京壹七貳九番

特約販賣　東京堂　北隆館　上田屋　至誠堂　東海堂　永久堂　頁明堂　大阪盛文館

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

八月一日發行 第九年第十一號（毎月一回一日）

女子文壇

大正二年七月廿五日印刷納本

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）

女子文壇

（海内唯一）（青年雜誌）

八月一日特別號　正價金卅錢　送料二錢

現代名家の日記

現代文壇の名家三十餘氏が寄せられたる七月十二日の日記である。諸名家が同日を如何に生活せられしかを知らんとするは最も興味ある問題である。

本誌七月號は發賣禁止せられたり。依つて一般愛讀者の爲めに更に此の特別號を發行す

女子文壇定價金八錢　郵税一冊壹錢五厘

◉本誌大賣捌所（東京）東京堂　東海堂　北陸館　上田屋　至誠堂　永久堂　良明堂（大阪）盛文館　其他全國各地書店取次販賣

發兌元　東京神田旅籠町一丁目　文光堂　電話下谷四八一九（賣捌所は全國各地雜誌店にあり）振替東京一九五五